

こんなことが言える?!

～新「古代史の旅」～

(総集版)

堂 本 彰 夫

2019 年 12 月

※この「こんなことが言える?!～新・『古代史の旅』～Part 1」は、平成 28 年 6 月以降から始めた、私の 3 部作のエッセイ集『我が想い 漂えるままに』の中の「古代史の旅」を独立させ、分量を増やし、タイトルも随時替え、ここまで書き綴ったきた論考の、言わば「第 3 段階」のもの（前半？）です。以前のものと、あまり変わらない部分もあると思いますが、よろしくご笑読？下さい。

なお、「第 1 段階」の「古代史の旅」(Part 1 /Part 2)、「第 2 段階」の「さらなる真相を求めて～続・私の『古代史の旅』～」(Part 1 /Part 2) も、下記ホームページ上に掲載していますので、併せてご笑読？いただければ幸いです！

(平成 30 年 10 月)

※この「こんなことが言える?!～新・『古代史の旅』～Part 2」は、平成 30 年 10 月に刊行した「こんなことが言える?!～新・『古代史の旅』～Part 1」以降、さらにテーマを膨らまし、そして論考を重ね、ようやく出来上がったものである。なかなかすっきりとした形、内容構成で仕上げる事が出来なかったが、現在の私の知見の集大成であることは間違いない。これまでの論稿に加え、これについても、よろしくご笑読？いただければ、誠に幸甚である。

なお、これまでの個々の論稿すべては、下記ホームページ上に掲載していますので、併せてご笑読？いただければ幸いです！

(平成 31 年 3 月)

<連絡先>

ホームページURL⇒<http://www.gakuyou.jp>

メール・アドレス ⇒gakuyou17@outlook.jp

目 次

- 1 新たに始まる、私の「古代史の旅」！その前に、少しだけ主張しておきたいこと?!
- 2 次に、とにかく「継体」の正体（謎?）を解明すべき?!何故なら、容易でもある?!
- 3 神武とその子達（神八井耳命と神沼河耳命→綏靖）、その関係（広がり?）を推理する?!
- 4 二つの「高千穂」?!それは、何を意味するのか?!放ってはおけない?本当の歴史?!
- 5 「天_{あま}」と「海_{あま}」、そこに交わる「神々達」?!投影されている氏族達は?!
- 6 「三種の神器」からみた「大和王権」の成立過程?!「記紀」は、それをどう示しているか?!
- 7 「大和三山（天の香久山・耳成山・畝傍山）」の意味?!「三種の神器」との関係は?!
- 8 「出雲大社」と「熊野大社」の関係にみる、「根の国系≡出雲系?」の謎、否、怪?!
- 9 新たに始める「古代史の旅」！「こんなことが言える?-Part 2-」に託すもの?!
- 10 「伊勢神宮の謎?」に、本格的に挑む?!それが解ければ、一体何が分かるのか?!
- 11 「丹波（後）」に、「伊勢神宮」の原型?がある?!本当の謎?は、そこにある?!
- 12 大和建国（3世紀末?）における「日」と「火」（の勢力）の合体、そして分裂?!
- 13 再度?「賀茂（加茂・鴨・迦毛）族」を追う?!もう一つの?「大和建国」の功労者?!
- 14 続いて、「賀茂（加茂・鴨・迦毛）族」と「秦氏」、そして「息長氏」の関係を追う?!
- 15 「縄文から弥生へ」は、「直線的?」につながっている?!そのことは分かったが?!
- 16 「倭国大乱（2世紀末）」とは何だったのか?!そこから、「大和建国」は始まっている?!

1 新たに始まる、私の「古代史の旅」！その前に、少しでも主張しておきたいこと?!

(1)新シリーズ「こんなことが言える?!」のスタートにあたって！

いよいよここで、私の「古代史の旅」の新シリーズを迎えることとなった！まだまだ、次の段階には至れないという思いもあるが（ある意味、余りにも膨大なテーマ・情報があり、とてもこれ以上は、今の私には手に負えない？、単純に言えば、それらへの対応（交通整理?）に恐れ?をなしてきたということである?）、ここで思い切って、自らのオリジナルを、あるいは新たに頭を擡げてきたテーマ（仮説?）を、真摯にぶつけてみたいということである?!

多少（それなりに?）輦蹙を買うかもしれないが、その方が、同じやる気、同じ労力を掛けるのならば（はっきり言って、「どうせ悩むのならば?」ということであるが!）、はるかに良いのではないかという、身勝手な（かなり横着な?）思いが、現在の私を支配し始めているということである?!

ちなみに、第1弾（「古代史の旅」）は、それこそ、我が古代史解明の決意表明?と、かなりアットランダムなテーマ散策?、そして、第2弾（「さらなる真相を求めて～続・「古代史の旅」～」）は、第1弾を受けた、古代史全体の大まかな流れ、継続性（史実?の順序性、エポック性）を考慮した?真相究明の試みであった！

この第3弾では、それらの中から、自分なりに（あくまでも自分なりに?!）明らかに出来るのではないかと思われる、人物特定や、それに関わる事実?を、新たな（多少進捗した?）視点・枠組みから、考察してみたいと考えているわけである！だが、当然?、テーマあるいは内容は、第1弾あるいは第2弾と、かなり重複はするものと思われる?!

ということで、これから、新シリーズ「こんなことが言える?!」と題して、これまでの膨大な（ある部分は、かなり不整合な?）論考を、改めて整理・再検討しながら、上で述べたように、さらなる突破口を確立すべく（自らのオリジナルを求めて?）、突き進んでいくこととしたい！ただし、当然ここには、新たな闘志（野望?）と、逆に募っていく不安（後悔?）が、さらに混淆（倍増?）していくことを名状しておきたい！とにかく、厄介な?旅を始めたものではあるのである?!それでも、やるしかないのでもある！

(2)もう止めよう！無意味（無駄）な?論争、囃し立て?!そして、虚心坦懐な真実究明（報道）を?!

それはさておき、その前に、まずは、この間、具体的な内容理解とは直接関係ないが?、世の中（とりわけマスコミ?）に、批判と言うか、要望?、否、ある意味での警鐘を鳴らしたいことが、幾つか出て来てもいるので、それらを、以下に示しておくこととしたい！しかしながら、その適否については、読者で

ある、みなさん？の判断に委ねられることにはなる?!あくまでも、まだまだ一つの説（主張）ではあるからである！

・邪馬台国（所在地探し）に関わる「二者択一」的スタンスと、双方の説の優劣報道は止めるべきである?!

さて、その第一は、やはり、いわゆる邪馬台国（所在地論争!）に関わる、まさに「二者択一的（「九州説」か「近畿大和説」かという）」なスタンスについてである！表面（形式?）上は、その双方を平等に?考慮しながらも（中立的立場と言わんがために?）、結局は、どちらが優勢（or 劣勢）かという、相変わらずの理解の仕方ないしは取材・報道姿勢があり、その功罪は、予想以上に大きいのではないかということである（要は、優劣の決着問題ではないということである!）?!

説?としては、どこであつても構わないが、何故、それを、「二者択一的論争」にしてしまうのか?!そして、それを、何故、必要以上にクローズアップさせる（囃し立てている?）のかである?!しかも、潜在意識的には、近畿大和説の優位性をちらつかせているようでもある?!

たとえ、どちらかが「邪馬台国」であつても（そうでないかもしれないが?）、もう一つの国（中心的存在）が、そこに歴然と存在していたことを、何故、正當に、否、それがどういう国?（存在）であつたのか、その双方の関係はどうであつたのか等、そうした総合的な?事実を踏まえた解釈、建国の歴史を、何故、真摯に追究（報道）しようとししないのか?!

『魏志』の記述や、そうした立場の研究物・考古学等の成果は、実は（最早?）、そのこと（二つの国?の存在）を示しているではないか（そうした報道のスタンスも、徐々に出て来ているようには思えるが…）?!ただし、その九州説には、近畿大和説の纏向（遺跡）のように、特定されるべき比定地・候補地が、一つに絞れていないという、残念ではあるが、ある意味致命的な?弱点があることは周知の通りである！

・纏向（遺跡）の意味（各地の勢力の結集地であること!）を、もっと広く（強く）周知（報道）すべきではないか?!

次が、上記と関連することではあるが、（初期）大和王権（纏向）が、いわゆる「邪馬台国連合（の中心地）」かどうかはともかく、そこが、最終的には?吉備を中心とした前方後方墳（→前方後円墳）勢力によって樹立されたことは、ほぼ定説になってきたと思えるが、ならば、それらの勢力が、いつ、どのようにして「大和（纏向）」に集結・進出してきたのか、そこにもっと焦点を当て、それらに関する考古学的論究・研究成果をクローズアップ（報道）させるべきなのではないか?!

それがまた、件の邪馬台国問題（所在地論争!）の解決に、さらなる道を開

く?!すなわち、これについては、既に考古学的な成果（定説）として、大和纏向（遺跡）が、全国各地からの諸勢力の集積地（特に、東海、近江、越地方からの参集が顕著?!）であり、そしてまた、意外にも？その中心勢力が吉備（←楯築遺跡）であったことが明白となっているようであるが、何故積極的に、そうした広域的な文物・勢力の移動・交流・離合集散に立脚した、総合的な事実解明と情報収集（報道）を行わないのかということである?!

ちなみに、これらのことが淵源となって、倭国九州説と近畿説の、果てしない？論争が続いていることにもなるのであろうが、二朝並立や相互越境的な文物・勢力の移動・交流が、実は、倭国の実相であったとも言えるのである?!

・「記紀神話」（「高天原物語」）は、（初期）大和王権の諸勢力の動きや関係を投影させているものと思われるが、そのことを、より実証科学的に（神話や文学だけに閉じ込めるのではなく?）、解明（報道）すべきではないのか?!

次も、以上と関係するが（真の問題はここから?!）、標記のように、近畿・大和に移動・進出していった「倭国（の一部）」ないしは「倭国以外の倭人勢力」（→纏向「大和」勢力）は、出雲勢力（の一部）を北部九州に送り込み（←倭国皇統、そして多分、鉄の争奪戦?のために）、九州倭国（邪馬台国連合／倭国皇統主権者）を崩壊させた?!

私が大いに依拠する、件の関裕二氏によると、出雲勢力（→「タニハ連合」（近江、越、丹波/丹後））が、それ（九州倭国）にとって代わったが（大国主政権→葦原中つ国?）、大和（端的には尾張氏?!）の裏切り（寝返り）?によって、その出雲勢力（の一部）は、北部九州から追われてしまった?!つまり、その過程において、大きくは、（北部）九州、出雲、近畿の関係がクローズアップされるが、何故、そのような構図から、個々の具体的なアプローチがなされないのか?!また、その必要性が喚起（報道）されないのかということである?!

すなわち、それが、「天孫降臨」、「出雲の国譲り」等の話（神話）へとつながっていくのであるが、そこに、尾張・東海勢力、「タニハ連合」、そして、吉備の物部氏（そこには、同族?としての「紀氏」「海部氏」、多分実は「尾張氏」、さらには「蘇我氏」も含まれている?!）の協力と確執が、その後の大和王権の歴史となっていくからである?!

端的に、こうした見方・捉え方の意義や可能性について、もっともっと積極的に採り上げる（報道する）べきなのではないかということである?!ただし、ここでは、神話や、そこにおける文学性は、別な意味では非常に重要であり（人間性探求等?）、そのことの意味や価値を、低めようとしているわけでは決してない!史実とそれ（の扱い）は、やはり違うということを確認しているだけである!

・「三種の神器」の意味と、その所在状況から、正当な（さらなる?）歴史解明

ができないのか?!

次に、このように見て来ると、いわゆる「三種の神器」(八咫鏡/天叢雲劍→草薙劍/八咫瓊勾玉)が、どこに奉斎されているのか、そして、それがどの氏族に関わるものなのか?ということについても、もう少し突っ込んで、議論(報道)されてもよいのではないだろうか(別な意味で、若干ナイーブとはなるが?)?!何故なら、それが、大和王権(建国)を成し遂げた?有力氏族を象徴するものであるからである?!

したがって、その来歴等が、改めて追究されていけば、その大和王権(建国)の実相と、それに関わった氏族等の出自や関係が浮かび上がってくることになるであろう?!大きくは、高天原勢力、すなわち「(最終的には?)前方後円墳勢力」の主力は、当初?「鏡」(石凝姥いしこりどめ命→鏡作部→物部氏?)、「劍」(素戔鳴命→天照大神→(タケミカヅチ命/高倉下命)→(日本武尊)→尾張氏)、「勾玉」(天太玉^{あめのふとだま}→忌部^{いんべ}氏)の3勢力(氏族)によって担われたようであるが、もともとの発生(母体?)は「出雲」であり、その頭領が「大国主命」であったということではないのか?!

とにかく、「出雲」の存在は大きいのである?!ちなみに、「大国主命」とは、ある特定の人物の名前ではなく、言わば、その職掌(位階?)名でもあった?!こうした中で、「鏡」は、三輪(纏向・崇神政權?)から離され、大和笠縫(檜原神社?)から、各地を転々として、最終的には、伊勢神宮(内宮)に収まっている?!改めて、これは、何を意味するのか?

「劍」は、以前にも述べたように、尾張氏の根拠地・熱田神宮に奉斎されているわけだが、その劍が、例の素戔鳴命が八岐大蛇を退治した時に、その尻尾?から出てきたものということは広く知られているが、何故、どのような経緯で、尾張氏(熱田神宮)が保有しているかについては、あまり詰められていない?!

「勾玉」は、現在皇居にあるということだが、「天太玉」の後裔とされる「忌部氏」に関係があったようである?!その「忌部氏」とは、どういう氏族なのか?!

ちなみに、この「忌(斎)部氏」は、藤原氏(+中臣氏)と反りが合わず(かなり邪険にされた?裏を返せば、正統性がある?!後の斎部広成の『古語拾遺』は、そのことへの怨念、不満をぶちまけたものとも言われる?!)、記紀の表舞台?には華々しくは登場していない?!しかし、例の「天の岩戸神話」では、「鏡」「劍」「勾玉」(後の「三種の神器」を意識させた?演出?!)として、明確に示されている?!いずれにしても、このことは、「鏡」や「劍」にしても同じであるが、その来歴等については、かなりの紆余曲折が埋め込まれているようにも思われる?!

・外国(特に百済)の王族・勢力が、倭国(→日本国)を支配?・建国したことに、何故言及できないのか?!

最後になるが、実は、ここが一番重要となるが(反面?、かなりナイーブとな

らざるを得ないが？)、古来、多くの渡来人、帰化人が我が国に来たとされるが、実は、その外国からの王族・勢力（特に百済）が、倭国（→日本国）の、事実（政体？）上の支配者（当事者？）となっていることは間違いない?!少なくとも、彼らの先祖・縁戚者が（母であったり、父であったりということであるが）、そうした外国の王族・勢力であったことは紛れもない事実であり（平安京を創始した桓武天皇の母親が、百済系の「高野新笠^{たかののにいがさ}」であったことは、つとに知られている!）、そのことを踏まえた史実解明や歴史的意味の解釈を、ある意味虚心坦懐に行う必要があるということである?!

ただし、「支配」という表現は、かなりの誤解や先入観を与えるものではあるので、その扱い、解釈に当たっては、当然慎重かつ真摯な対応が求められるが、ある時期（かなりの期間?）、広く倭族（人）と呼ばれる人達が、周辺ないし近接・混在していた、他の部族・勢力の人達と様々な人間模様を繰り広げながら、その住地、その安寧の地を求めて、大陸や半島、そして列島の各地を動いた・交流したということである!

要は、その有力な部族・勢力が、江南系、伽耶系、そして百済系の倭人（これとて、様々な系統がある?!）であったということであるが、倭国（→日本国）は、まさにそのような部族・勢力によって主導（建国?）され、今日を迎えているということである?!くどうようであるが、決して影響や交流があったということだけではないということである?!

2 次に、とにかく「継体」の正体（謎？）を解明すべき?!何故なら、容易でもある?!

(1) 幾つかの「継体」の意味?!そこに、その謎？を解くヒント（鍵）がある?!

さて、その栄えある？第一の追及対象・テーマは、やはり第 26 代「継体天皇」についてである！何故なら、以前にも述べたように、その人物特定は既になされており（→百済仇台系牟氏王子「軍君・男弟王」）、その解明は、ある意味容易でもあるからである?!

ただし、もちろん、それが、いわゆる「定説」となっているというわけではない！これまでの考察から（ある二人の先駆者？の研究成果からでもあるが!）、そのように私が判断しているということである！しかし、その理由（根拠）は、これから示していくように、かなりあるということでもある！

まず、彼は、第 15 代「応神天皇」の、まさにいわくつきの？「5 世孫」ということで、かろうじて「（応神）王統」を引き継ぐという立場（設定？）であったわけであるが（そこに、「継体」という名のメッセージ性が込められている?!もちろんそれは、後に淡海三船がそう贈名したということである！しかも、彼は、ある意味？現皇室まで続く、まさに「万世一系の皇統」の最初の？天皇でもある?!）、その経緯は単純ではなかった?!

そういうことを、私なりに、それこそ敏感に感じさせる次第なのである?!では、何故私が、このような実感を得ることになったのか?!それは、ほとんどが、兼川晋氏の研究成果からであるが（詳しいことは、ここでは紹介できないが）、まずは、その兼川氏が明らかにしている「九州（倭国）年号」の实在と、その最初の元号である「継体（年号）」の扱い（受け止め方）からである！

それに関わる「二人の継体（人物）説」には、本当に驚かされたが、まさにそこに、何らかの謎（隠された真実？）があるように思われ、一方で、「継体天皇」が「応神王統」に繋がっていること、そしてまた、他方で、「記紀」が、その前の「応神王統」の出発時期（神功皇后・武内宿禰が活躍した頃→4～5 世紀?）を、一番量して（はぐらかして?）いることが、その原因（根拠）である！明らかに、そこに「作為（虚偽）」が感じられるのである（ただし、ここだけではなく、記紀、とりわけ『日本書紀』には、それが多いことは多いが?!）。

さらに、これだけであつたら、その「作為（虚偽）」の実感だけで終わるのであるが、これに、いわゆる「百済王子」の渡来、あるいは、その百済系文物の影響・流入の実態（政治・経済・文化的な要素）が、特に近畿（河内）で顕著に見られることが、その意を強くするのである！すなわち、百済王子の「昆支こんき」と「軍君こにきし」の渡来（それ以前に倭国王となっていた「応神」?!本当は、高良大明神/百済残国王兄王・藤?の下への入質→百済檐魯制?）があつたことは事実であり（兼川氏や、それ以前の石渡信一郎氏の所論等）、そこに何か大きな事

件（歴史的エポック？）が横たわっていることに、かなりの確信を得ていたことが、今回のテーマ抽出ということになるのである！

ちなみに、その近畿（河内）への影響・流入の痕跡（事実？）とは、加羅系から百済系への須恵器の変化、河内平野（潟）の大規模灌漑、そして、古市、百舌鳥の古墳群（「群集墳」→誉田御廟山陵、大仙陵）の出現等である？！

(2)九州（倭国）年号と漢風諡号（「淡海三船」作）の突き合わせから見える、新たな真実？！

とは言え、やはりこれだけであったら、多くの先駆者たちの研究・所論の紹介（引き回し？）に過ぎなくなるので、何か、その新基軸が見出せないかと思っ
てはいた！それが、繰り返しになるが、兼川晋氏の研究成果である、九州（倭国）年号の「継体（年号）」（の存在）と、後に淡海三船（天智の子・大友皇子の曾孫）が名づけたとされる「漢風諡号」との突き合わせから生じる、新たな解釈（事実解明？）の可能性なのである？！

端的に、その幾つかの切り口（根拠）は、以下のようである！

- ①九州（倭国）年号の最初の元号（建元）としての「継体（年号）」は、そもそも淡海三船の「漢風諡号」賦与より先にあった（→「継体（年号）」元年は517年、「漢風諡号」賦与は8世紀中頃？）！つまり、「継体（年号）」は、「漢風諡号」としての「継体（人物）」とは、無関係に存在していた！
- ②その「漢風諡号」には、それぞれの人物（天皇）の歴史的役割？、ないしは何らかのメッセージ性・シンボル性が込められている（←当時の「漢籍」等からの借入 or 参照？）。もちろん、それは、淡海三船の歴史観、人生観、氏族観等が投影されている？！その代表的なものが、（以前にも述べた）「神」の使用である。→神武、崇神、神功（皇后）、応神。しかも、それらは相互に関係しており、その中心（起点）が応神とされている？！
- ③九州（倭国）年号としての「継体（年号）」は、それが記載されているものとそうでない（消されている？）ものがある！誰（何）かの、それがある（残している？）と困るという配慮（意向）が、そこにはある？！
- ④しかも、一番大きいのは、少なくともその時期（「漢風諡号」賦与时）までは、年号と人物（天皇）名は、同一ではない！何故、「継体」だけが、元号名でもあり、人物（天皇）名でもあるのか？！
- ⑤さらに、その「継体（年号）」を、その建元創始者である（とされる？）「継体（人物）」本人が命名（使用？）したということになれば、それは、根本的におかしい（生前？自らを、「継体」と名乗っていたことになる？）？！もし、そうであれば、その後も（その前も？）、そうした建元の仕方（自分の名前を元号とすること）があつてしかるべきである？！ただし、冷静に考えてみると、自分の死後の諡名おくりなを、自らの在世の年号とすることは、物理的に不可

能である?!とにかく、あり得ない?ということである!

- ⑥ということは、少なくとも淡海三船が、その九州(倭国)年号をどこかで見て(知って?)おり、そこでの最初の年号「継体」(元号名)を、ある意図をもって、「記紀」(『日本書紀』?)のある人物名に採用(盗用?)し、彼(記紀の「継体」)の「漢風諡号」にしたということではないか?!その人物(その時の九州倭国の王?)に、どうしても、もう一人の「継体」(「記紀」に言う、越出身の「オヲド王/彦太尊^{ひこふつのみこと}」→通説の「継体天皇」)を繋げたかった?!その意味での、新たな?「継体」ということではなかったか?!

- ⑦ちなみに、そこには、(藤原氏に、ある意味「ものが言える」?)秦氏や息長氏の意向・思惑が絡んでいた?!

とまあ、こういうことであるが(他にもあるかもしれないが?)、517年(これは確かである!)に九州(倭国)年号を創始したある人物、多分、これが「磐井の乱?」(515年?、522年 or 531年ではない!)で勝利した、継体こと軍君(同じく(筑紫)倭国に入質していた昆支の実弟で、(豊国)倭国に入質していた百済仇台系牟氏の王子→王。だから男弟王?!))であるということになるが、彼(軍君)自身は、その5年後に死んでいるという(このことは極めて重要!)?!

なお、兄の昆支(倭王「旨」?)は、その後百済に戻って、(温祚系余氏に助力して、)そこで死んだとされるが(兼川氏)、例の石渡氏は、そうではなく、その昆支自体が「応神天皇」だとされて、「応神・継体兄弟説」を出されているのでもある(何とも興味をそそられるが?、現時点では、その判断には躊躇も覚える?!)!

いずれにしても、「記紀」及び「淡海三船」は、継体こと軍君(男弟王)を「継体天皇」として、近江・越の継体(オヲド王/彦太尊)にすり替えて(「継体」して!)、すべてを近畿天皇家の事績としたということである?!そして、その後の近畿天皇家につなげるものとした(当然、それはある意味では、事実であったからである?!)!

それを暗に示すのが、「磐井の乱?」の前の「継体?」の言、すなわち「(勝利後は)、自分は、長門以東を統治する!おまえ(物部麁鹿火)は、筑紫以西を統治せよ!」という、怪しげな?セリフなのでもある?!こうなると、この時の「九州の継体」(軍君)と、ある意味すったもんだで即位した「近畿の継体」(オヲド王/彦太尊)は、やはり別人となる?!

ちなみに、この時の「乱?」のあり様(場所や兵の移動状況等)では、とてもじゃないが、「近畿」(の天皇家?勢力)が、「九州」(の磐井勢力)を討つというようなことは、物理的(地理的)にも考えられないことなのである(兼川氏)!

- (3) 豊国倭国の筑紫(九州)倭国乗っ取り?と近畿(河内・近江)への進出?!そこにある「軍君/男弟王→オヲド/彦太尊」への「継体?」?!だが、倭国皇統

（物部麁鹿火→尾輿→上宮王家→蘇我氏？）の九州（筑紫）残存?!

ということで、少なくとも「継体」という言葉は、以下の、三つの意味（思惑?）があるということになる?!

- ①（「九州倭国」皇統を）百済温祚系余氏から仇台系牟（←余）氏が継いだ。→これが、本来の意味?!
- ②九州（筑紫）倭国王統を豊国倭国（檐魯国家）王統が継いだ。→これは、実質的には、①のことを意味する!
- ③「応神王統」を「継体王統」が、（辛うじて?）継いだ。→これが、「記紀」の言い分?!

とにかく、ここで言う「継いだ（継体）」という言葉は、実質的には「乗っ取った?!」ということであろうが、問題は、その後、ここから、どのような史実?が展開されるのかである?!

定説?からすると、かなりの珍説?のように思われるかもしれないが、実は、こうした理解が、前後の我が国の歴史を、より整合的に解釈できるのでもある?!ただし、当然?これも間違っているのかもしれない?!しかし、そうであれば、その間違いを正していけばよいだけの話である?!

しかるに、そうしたこともせずに、ただこれまでの定説?を鵜呑みにして、あるいは目をつぶり、おかしなところ、矛盾したところをそのままにして、たとえ詳細な論究（研究?）をしても、あるいは甲論乙駁を繰り返しても、ほとんど進展は見られないのではないか?!

どうせそうであるならば?、一度（くらい?）は、この仮説（真実?）を受け入れてみて、その次の（大いなる?）史実解明に多くの人に参加できれば、これほど有益なことはないのではないだろうか?!

末尾ではあるが、この間の動きを、多少具体的に追ってみると、百済から九州に渡来した、本宗家（沸流系余氏）残国兄王（滕→応神に投影?）は基肆（貴→大倭/倭?）で倭国皇統を入手（確立?）し、その後裔の「倭の五王」（讃・珍・済・興・武）が版図を広げ（「檐魯」の拡大）、それら全体を倭国とした?!

ただし、最後の筑紫（→後に「太宰府」へ）の「武」こと「磐井」と、その檐魯国家の一つ「豊国倭国」（仇台系牟氏）の男弟王/軍君との諍い（「磐井の乱」）が生じ、「豊国倭国」が勝利し、その時の軍君こと継体（倭国年号創始者!）は、やがてそこで死んだ（→531年「辛亥の変」?）?!

それらの後裔・関係勢力であった息長氏や秦氏等は、河内・近江・越等に移動し、河内・近江・越の同族及び協力者達（大伴金村・巨勢男人等?）と組んで、「オヲド王/彦太尊」を擁立し、河内・近江、そして大和に進出していった?!それが、いわゆる記紀が言う「継体天皇」であり、その治世である?!

一方、残った「筑紫（九州）倭国」は、最初磐井の子の葛子が継いだ、そ

の後、荒山大連（物部麿鹿火の類族？あるいは本人？）の子・尾輿に移り、さらにその後、その実権は、弟の目連^{めのむらじ}（蘇我稲目？→欽明・ワカタケル大王?!）に移り、物部/蘇我による倭国皇統（百濟溫祚系余氏）が、九州に残った形となった?!

上宮王家と呼ばれる「一族」が出てきたのも、ここからである?! 実は、隋に使いを送った（600 年）、有名な「日出処天子・天足彦^{あまたらしひこ}」は、ここの王である（決して「聖徳太子」ではない!）?!

だが、例の「白村江の戦い」の敗戦（663 年）によって、九州倭国は、徐々に崩壊していった?! ある意味二朝並立状態となっていた倭国は、九州本国がなくなり、大和飛鳥に拠点を移した上宮王家と、もともとの橿魯国家「日本国」（近江への遷都?）との共存状態? が続いたが（645 年の「乙巳の変」まで!）、徐々に後者に収斂させられていった?! これが、天智天皇以後の倭国（我が国）の歩みである?!

3 神武とその子達（神八井耳命と神沼河耳命→綏靖）、その関係（広がり？）を推理する?!

(1) 謎の？神八井耳命（多氏の祖）、そして、その九州の後裔達?!彼らは、どのような関係だったのか?!

次に、今新たに、少しだけ（かなり？）面白い着想が頭に浮かんできている！それは、「記紀」に示されている神武の子達と、その関係についてであるが、とりわけ（東征後の）神武の、近畿大和での嫡子とされる神八井耳^{かむやいみみ}命と神沼河耳^{かむぬなかわみみ}命との関係（彼らは、事代主神と三嶋溝櫛耳^{みぞくいみみ}の娘の玉櫛媛との間に生まれた媛蹈鞰五十鈴媛^{ひめたたらいすず}命との間の子）についてである（「東征」に同行した、日向？での先妻の子もいる！→多研耳^{たぎしみみ}命等）。

とにかく、前者が兄とされ、後者が弟とされるが、皇位（2代目）は、弟の神沼河耳命が継承し（→綏靖^{すいせい}天皇）、兄の神八井耳命は、皇位継承はせず、弟を下支えする役割を担ったとされる（尤も、義兄多研耳の野望を兄弟で阻止しようとしたが、最後に怖気づいてしまって、弟の神沼河耳命に譲ったということらしいが？）?!

そのことはともかく、ここでの最大の？疑問（謎？）は、兄の神八井耳命の方が、初期大和王権？の正当な後継者？ではなかったのかということであるが（「末子相続」という見方も成り立つが、その当時、血脈で引き継がれる「天皇」というような存在や位置づけはなかったのであり、しかもそうした兄弟関係は、「神武天皇」の実在も含めて、後からの造作であったと考えられる?!ちなみに、「末子相続」は、モンゴル系の「扶余」、あるいはその流れにある高句麗・百済系の社会にはあったらしい?!）、何か、そこには知られてはまずい、別の史実？が隠されているのではないかということである?!

例えば、その兄弟に擬せられた二つの部族・勢力があり、片方の部族・勢力が、もう一方の部族・勢力に排斥された（主導権争いに負けた？）ということである?!すなわち、もともとと同じ勢力・部族であった神八井耳命と神沼河耳命（に昇華されている?）、それぞれの部族・勢力が、何らかの理由で背反?し、いわゆる「初期大和王権」（の主流）となっていた神沼河耳命（に昇華されている?）の部族・勢力（系統）に、神八井耳命（に昇華されている?）の部族・勢力（系統）が駆逐されていた?事実が、そこには投影されているのではないかということである?!

ただし、神八井耳命にしろ、神沼河耳命にしろ、彼ら（の部族・勢力）は、神武（九州南部?勢力→鴨族?）と出雲（の一部勢力?）との婚姻（同盟）関係で生まれた御子とされているわけであり、彼らの部族・勢力（系統）が、最初の大和王権の中核であったことが、そこには示されているわけではある?!

なお、事代主神と三嶋溝櫛耳（大山祇^{おおやまつみ}?）の関係は、まだよく整理が

つかないが、前にも確認したように、事代主神は、大国主神（出雲神→大国・大黒様）の子神（→恵比寿神）で、奈良葛城地方の地主神ともされるが、彼が、三嶋溝槲耳の娘の玉櫛媛と結ばれているということは（これが、例の日向三代の神話、とりわけ「ヒコホホデミ（山幸彦）」と「豊玉姫」の婚姻話に投影されている?!）、それは、例の、吉備から近畿・大和に進出、集結した前方後方墳勢力（河内・近江・山城回り→淀川水系）と前方後円墳勢力（河内・生駒回り→大和川水系）の関係を指しているのではないかということである（これは、葛城勢力と瀬戸内海勢力が協力関係にあったことを意味する?!）?!

(2) 果たして、九州はどうなったのか?! その中で、(九州の?!) 邪馬台国は、どうなったのか?!

だが、そのことは、ここではひとまず置いておくこととして、ここでの追究の矛先は、かの神八井耳命が、多^{おお}（or 大・太・意富等）氏の先祖とされ、一方でまた、肥（火）の君、大分の君、筑紫の君等の、多くの九州の豪族? 達も、その後裔とされているということについてである。すなわち、彼らは、もともと在地の豪族という可能性もあるが、近畿・大和から移動してきた部族・勢力だと捉えれば（だが、もともとは? 彼らの先祖は九州に居て、吉備・出雲? を経由して、近畿・大和に移動していた?!）、ある時期から、九州に移り住んだ（故地に戻った?）、ある意味出戻り? 部族・勢力ということになるのではないか?!

もし、そうであれば、何故、そして、いつ、どのように、彼らは、九州に移動した（戻った?）のか?! そうしたことが、問題（謎?）となるわけである?!

そこで考えられるのが、今や定説ともなっている?、ある時期（3世紀後半?）の、近畿から九州へ（東から西へ）の文物の移動の事実である!

そしてまた、それが、3世紀前後、いわゆる「大和（纏向）」に集結した「前方後方墳（→前方後円墳?）勢力」（吉備から、おそらく出雲を巻き込んで?、河内・近江に進出してきた勢力=「手焙型土器」/火・日神信仰勢力）の一派が、その後、（逆に?）九州地方にも流れ込み、例の「吉野ヶ里勢力（環濠集落・銅鐸勢力）」等を滅ぼした（放逐した）ことが考えられるが（その痕跡は、間違いなくある?!）そして、それが、いわゆる「倭国大乱」でもある?!）、そのことを、実は、神八井耳命（九州に向かった後裔達）の事績として、「記紀」は示しているのではないかということである?!

もちろん、このことは、私の、まったくのオリジナルではない（以前紹介した斎藤忠氏や藤井耕一郎氏の所論からである!）! とにかく、これまで把握してきた結果を推察すると、やはりその方がすんなりと理解が進むし、その後の「倭国の二極体制 or 構造」（九州倭国と近畿倭国→日本国）の淵源が分かるということでもある?!

すなわち、例えば「記紀」によれば、紀元前 660 年（「讖緯説→辛酉革命説」

による!)に、南九州(日向?)から、宇佐・岡(遠賀)・安芸・吉備を経て、その後、河内(・摂津)・熊野から大和(橿原)に進出した神武(一行)であるが(その後、出雲族や賀茂族との婚姻・融合関係が示されている!)、その物語は、時代考証や、事実それ自体の信憑性等、多くの問題点を抱えてはいるが、ある大きな事実(「倭国大乱」?)を基にした、我が国建国譚の創出の当然の成り行きであったのではないか(倭国は九州より始まり、近畿へ移動した!そしてまた、一部は九州へ回帰した?!)?!

要は、何回も言うように、最終的には、百済王族(沸流系余氏→温祚系余氏→仇台系余/牟氏)の渡来・定着、そして、彼らの(邪馬台国以降の)倭国(→日本国)参入で、それ以前の倭人国家(→半島南部を含んだ九州倭国)の実情(倭国大乱→邪馬台国の出現・没落?→その後の二朝?並立)が、上記のことを踏まえると、さらに矛盾なく?捉えられるということである?!

そして、そこ(「神八井耳命」の扱いの違い)から、いわゆる「記紀」の相違、あるいは依って立つところの相違(『古事記』は多氏によるもの!)も、改めて分かってくるのではないかということである?!とりわけ、件の邪馬台国の、その後の消息がはっきりとしないということも(中国史書に載らない!「記紀」も、直接的には、そのことは触れていない!)、これによって打開されるのではないかということでもある?!

ただし、ここで留意しておきたいのは、例の卑弥呼の死後、男王が立ったが、国中が服さず、内乱?となり、そこで再び、卑弥呼の宗女である台与(13歳)が共立され、内乱?は収まったということであるが、「宗女」とは縁戚関係であるので(姪?)、多分その争いは、卑弥呼の縁戚勢力と男王勢力の、言わば内輪争いであったのではないか?!

そうであれば、その卑弥呼の縁戚勢力と男王勢力は、それぞれどういう勢力であったのか?!最初に男王(勢力)が立ったのであるから、その勢力は、多分邪馬台国内部の勢力(「男弟」勢力?)であり、それに異を唱えたのは、卑弥呼の、別の縁戚勢力であったことが考えられる?!その勢力は、おそらくは邪馬台国内部にはいなくて、どこからか移動してきて、その政変に干渉した(直接影響を及ぼした)勢力と考えられないか?

ちなみに、その男王とは、卑弥呼の右腕?(実質的な王?)であった難升米であったかもしれない?!

(3)そこで気になるのが、日田勢力や、阿蘇氏の祖?とされる「健磐龍^{たけいわた}命」の九州進出?!

いずれにしても、ここで思い出されるのが、以前にも少し触れた、大分県日田市の小迫辻原遺跡のことである!その遺跡は、日田市の北部高台にあり、3世紀前後の環濠居館跡(遺跡そのものは、旧石器時代から古墳時代前期まで続いて

いる！)があり、そこには、近畿や出雲の土器等が埋もれていたという！

この日田は、実は筑後川の上流にあり、九州（筑紫平野→邪馬台国？）を攻めるには絶好の立地の場所であり、その遺跡と、そこに通ずる（山国川を介した）東の玄関口？宇佐・中津の関わりも大いにあるということである！邪馬台国が消えた？後は、その居館跡はなくなり（自主的に壊された形跡あり？）、その役割を終えた場所ともされる？！

もし、そうなると、宗女台与は、何らかの形で、その日田勢力（近畿・出雲の出先勢力？）とつながりがあったとも考えられる？！難升米が旧倭国（帥升王系統？）勢力の代表（ひょっとすると「一大率」？）、卑弥呼は、吉野ヶ里等を攻めた「手焙型土器・前方後方墳勢力」、つまり和珥^{わに}に族、その一族の多氏（の先祖）の縁戚者だったのではないか？！そして、それが、実は、邪馬台国連合の盟主となっていたということでもある（だから、「倭国大乱」後に、邪馬台国の女王となった?!）？！

これについては、以前にも述べたように、3世紀後半頃、吉野ヶ里（名前の比定はできないが、「魏志倭人伝」に示された 30ヶ旁国の一つであったことは間違いない！）が、手焙型土器勢力、すなわち前方後方墳勢力に滅ぼされたということであれば、その盟主国「邪馬台国」も、その勢力によって滅ぼされたか、あるいは、その政権中枢が、その勢力（手焙型土器／前方後方墳勢力）の意のままになった？ということではないか？！そして、その勢力の意が、宗女台与の女王推戴であったのではないか？！そのようにも、考えることができるのである？！

だとすれば、その卑弥呼自体も、その勢力（手焙型土器／前方後方墳勢力）と何らかの関係があったことになる？！多分、それが、例の天照大神と素戔鳴命の関係示唆（「誓約^{うけひ}」→婚姻関係？）でもあろう？！ただし、ここでの課題は、先に見たように、その後の九州における、肥（火）の君、大分の君、筑紫の君等の、多くの豪族？達が、多氏の祖とされる「神八井耳命」の後裔とされているということについてである（確かに、彼らは、九州の各地に、その根拠地をもっている！）？！

そこで気になるのが、阿蘇氏の祖？とされる「健甕龍^{たけいわたつ}命」である！彼は、阿蘇神社が奉斎する阿蘇山の神としての性格を持つが、他ならぬ神八井耳命の子と伝えられているのである！すなわち、阿蘇地方では、この健甕龍命に関する伝承があり、健甕龍命は、祖父の神武天皇の命をうけて阿蘇山へ至り、外輪山の上から目の前に広がる湖を眺め、その広大さに感心して、水をなくして田畑を造ろうと考えた。そこで、外輪山の一部を蹴破ろうとしたが、一度目に挑戦したところは、なかなか蹴破れなかったという？！

ということで、彼を主祭神とする「阿蘇神社」（肥後国一宮）のある阿蘇地方は、「高千穂神社」のある高千穂地方とも深い結びつきがあるようであり、

それらが、ここで言う「神八井耳命」や、その後裔である「多氏」や、肥（火）の君、大分の君、筑紫の君等の、多くの九州の豪族？達とも関連があるようなのである?!

なお、もう一つ、ここで思い出されるのが、「記紀」が描く「景行天皇の熊襲征討」の物語である！彼は、娑婆（佐波・現在の防府市）から九州に渡り、8年もの間（これは、彼が、大和の王ではなかったことを示す？そんなに長い間、遠く都を離れているということはある得ない?!）、九州中南部？を巡回したとされるが、それが、この「神八井耳命」の後裔達の事績と重なるのである?!

さらに、彼の子（の一人）が、宮崎県の西都原古墳群の主？「諸県君牛諸井」とされるが（南部九州での前方後円墳集中部で、彼の娘髪長姫は、仁徳天皇の後ともなっている！→女狭穗塚・男狭穗塚古墳?）、これらの関係（伝承）も、神武東征の話と結びつけば、面白い史実？なのである?!

4 二つの「高千穂」?!それは、何を意味するのか?!放ってはおけない?本当の歴史?!

(1) どうにもすっきりしない併記状態?!その追究は、やはり意味はないのか?!
否、そんなことはない?!

ところで、3と関連して、これは、以前から気になっていたことであるが、いわゆる「天孫降臨」の地が「高千穂」と呼ばれるところであり、その「高千穂」の地が、実際に(不思議にも?)、九州の2ヶ所にあるということについてである!

一つは、九州山地の中央部?、宮崎県西臼杵郡「高千穂町」、もう一つは、宮崎県と鹿児島県境の、霧島山系の一つ「高千穂峰」である!どちらも、それなりの雰囲気を持ち、まさに神々の降臨地に相応しい趣きと舞台装置?をもっているようであるが(そのように加工・脚色されている?)、そもそも何故、そのような事態を招いているのかということである?!「降臨」自体の事実とはともあれ(現実にはあり得ない!)、その伝承地(地名と共に)が二つあるということとは、誠に奇妙な?状況であることは言うまでもない?!

とにかく、現実(今現在)、そのように認知(了解)され、その双方の地が、それ(降臨地)と言われ続けることは、神話や伝承の贈り物?としては、それはそれでよいのであるが、冷静に捉えれば、科学的(物理的)にはまったくあり得ない現象(天孫降臨)が、誰か(ある部族・勢力)によって創られ・語り継がれ、そしてそれが、具体的な、どこかの地に比定されているのである!

双方の「高千穂」の言い分?はともかくとして(何か滑稽な感じもするが)、何故、そのようになっているのかという疑問(謎?)は、やはり解明されてしるべきものと言える?!

それは、紛れもなく、人々(ある部族・勢力)の動きや、彼らが作りだした人間(部族・勢力)関係を示すものであり、その意味で、それらが織り成した具体的な(本当の?)史実?を、現実(今現在)に指し示すということだからである?!

だが、もちろん今では、そうした史実?を、科学(学問)的には、容易に実証できないということではあるが、他に様々な要素・思惑等も絡み合い、どちらを真の降臨地にするのかということは、タブーというよりは、その積極的な意義・メリットはないということでもあろう(観光地という点では、まさにそうである!)?!

しかも、私はここで、どちらが、本当?の「高千穂」であるのかという決定をしようとしている訳でもない!神話や地域伝承等は、それはそれでよいし、別な意味で意義もあり、興味もある!また、ある種のロマンを感じさせるものでもある!単純に言えば、どちらの「高千穂」も、事実としてはそうであっても(神話・伝承として創作されたものであっても!)、まったく、それはそれでよ

いのである！要は、何故そこに、そのような伝承や、それに関わる事物（神社等）があるかなのである！

(2) 一つの鍵を握る！「阿蘇神社」（「健磐龍^{たけいわたつ}命」）と「高千穂神社」（「三毛入野^{みけいりぬ}命」）の伝承・事物！

ということで、改めて、一体何故、そうした伝承や事物が、そこにあるのかである！例えば、宮崎県の高千穂町は、3で述べた、阿蘇氏の祖？とされる「健磐龍^{たけいわたつ}命（阿蘇都彦^{あそつひこ}命）」とその妃神、あるいは伯父とのつながりがあるようである？！健磐龍命は、肥後国一宮の阿蘇神社の主祭神であるが、その神は、他ならぬ神武（磐余彦）の、（東征後の）大和での長子・神八井耳命の子と伝えられている！

そして、この健磐龍命の子に、建稲背命、速瓶玉命（国造大神）、八井耳玉命（甲佐明神）がいるらしいが、これらの神は、すべて阿蘇地方の神とされている！ただし、直接の「阿蘇氏」の祖は、速瓶玉^{はやみかたま}命（国造大神）ということではあるらしい？！

ちなみに、9世紀の平安時代、健磐龍命神（阿蘇神社）が従四位に叙せられると、噴火を鎮めるためか、20年足らずで正二位にまで上った（その時期、阿蘇神社は、朝廷から特別の配慮を受けている？）。しかし、正二位になった5年後の貞観6年（864年）には、阿蘇は、山上の池が沸騰して、天に吹き飛ぶ噴火を起こしたとされる。

それはともかく、一方で（後に？）、神八井耳命の4世孫で、科野（長野県）の国造の祖となったとされる「武五百建命」という人物がいるらしいが（→健磐龍命と音が似ている？）、彼は、崇神天皇の御代（4世紀前後？）に阿蘇国造に任命され、子に阿蘇氏の祖となった速瓶玉命と、金刺氏の祖となった建稲背命がおり、また科野大宮社を創建したとも伝わる？！

これは、阿蘇（そして高千穂も?!）と科野（信濃）の関係を示すものであることは、言うまでもない？！例えば、それが、例の「天岩戸神話」で、「手力雄命」が、天照大神（卑弥呼 or 台与？）を窟から引っ張り出した際に、その扉（岩）が、信濃の戸隠平？にまで飛んで行ったとされる話ともつながるのである？！

さらに、その「武五百建命」は、神倭伊波礼毘古命の皇子・神八井耳命の3世孫の敷桁彦命の子で、兄弟に武恵賀前命と、火国造の祖となった建緒組命がいるという話や、彼の後が、建御名方神の子・出早雄命と、洩矢^{もりや}神の娘・多満留比売命の子孫である会知早男命の娘・阿蘇比売命で、子は、阿蘇氏の祖・速瓶玉命と金刺氏の祖建稲背命とされているという伝承もあるようである？！

ところで、「健磐龍命神」の妃神・阿蘇都比咩^{（口偏に羊）}命は、その阿蘇地方を支配していた草部吉見^{くさかべよしみ}神の娘とされ、現在、その奥地の草部吉見神社は、日向国と阿蘇地方の境に位置し、またそこは、豊後へと抜ける交通の

要衝でもあった。その草部吉見神社の社伝によれば、神武の皇子・彦八井耳命（国龍命・吉見神）は、日向国から川走谷の窟（当地）に居を定めた。そこに、神武の孫の健磐龍命が、肥後国を治めるようにとの勅命で下向し、彦八井耳命の娘を妃にして、宮地（阿蘇）に移ったという。

神八井耳と彦八井耳の関係が紛らわしいが（上記のように、別人であれば、健磐龍命と彦八井耳命の娘は従妹関係?!）、阿蘇氏は、日向から阿蘇に進出したことになる?!そして、阿蘇から、肥（火）国全体に広がっていった?!要は、神八井耳命の一族（多氏の一派?）は、日向から阿蘇、大分方面に進出していったということである?!

一方、その日向国から見て手前の「高千穂神社」であるが、主祭神が、一之御殿の高千穂皇神^{たかちほすめがみ}と二之御殿の十社大明神で、高千穂皇神は、「記紀」神話の「日向三代」である皇祖神とその配偶神（天津彦火瓊瓊杵尊と木花開耶姫命、彦火火出見尊と豊玉姫命、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊と玉依姫命）の総称で、十社大明神は、神武天皇の兄・三毛入野命^{みけぬのみこと}と、その妻子神9柱（妃神である鵜目姫^{うのめひめ}命、両神の子神である御子太郎^{みこたろう}命、二郎^{じろう}命、三郎^{さぶろう}命、畝見^{うねみ}命、照野^{てるの}命、大戸^{おおと}命、霊社^{れいしゃ}命、浅良部^{あさらべ}命）の総称とされている。

随分と欲張りな？祭神の顔ぶれであるが、とにかく高千穂（神社）は、神武の兄・三毛入野命の出身地ないしは所縁の地であったことはまちがいない?!そしてまた、三毛入野命（高千穂）は、健磐龍命（阿蘇）の祖父（神武）の兄、父・神八井耳命の伯父であったということでもある?!ただし、その、十社大明神の中心である三毛入野命は、「記紀」には、例の「神武東征」中、浪穂を踏んで常世国に渡った（死んだ?）とある！だが、当地の伝承では、高千穂に戻り、その当時一帯を荒らしていた鬼神の鬼八^{きはち}を退治し、当地に宮を構えたとされる（この「鬼八伝説」は、件の「阿蘇神社」にもある!）。

ちなみに、これについては、文治5年（1189年）3月吉日の年記を持つ、当神社の縁起書『十社旭大明神記』には、神武天皇の皇子「正市伊」が「きはちふし」という鬼を退治し、その後、正市伊とその子孫等が十社大明神として祀られたという異伝を載せているらしい（ここでは、この「正市伊」が、「彦八井耳命」ということになる?!そして、もしそうであれば、「彦八井耳命」は「三毛入野命」ということにもなる?!）。

さらに、正和2年（1313年）成立の『八幡宇佐宮御託宣集』（巻2）に、「高知尾（明神）」は、神武天皇の御子である神八井耳命の別名で、「阿蘇（大明神）」の兄神であるという異伝もあり、また、『平家物語』では、「日向国にあがめられ給へる高知尾の明神」の正体は「大蛇」で、豊後緒方氏の祖神であるとされているらしい?!「大蛇」であれば、前方後方墳勢力（←吉備の「龍神

信仰」勢力)、あるいは「出雲勢力」である?!また、後の「鵜目姫命」は「祖母岳明神」の娘神で、鬼八に捕らわれていたところを、三毛入野命に助け出され、後にその妃神になったという伝承もあるらしい?!

こうなると、「高知尾(明神)」、「神八井耳命」、「阿蘇(大明神)」、「健磐龍命」?、「彦八井耳命」、「三毛入野命」というような、各祭神・人物の特定、血縁関係の不整合が気になるころではある?!しかし、とにかく、高千穂神社は、日向三代の宮である高千穂宮が置かれた地と伝えられ、また、天孫降臨伝承と在地固有の信仰が融合し、さらに熊野修験も加わるなど、複雑な信仰を包含する神社である?!もちろん、同地にある「穂触^{くじふる}神社」等は、同神社と密接な関係があるようである。

同高千穂神社の社伝によれば、三毛入野命が神籬を建て、祖神の日向三代とその配偶神を祀り、その子孫が、後に三毛入野命、他の十社大明神を配祀し、垂仁天皇の時代(3世紀中頃?)に社殿を創建したということらしい。なお、同神社が、「高智保神(高智保皇神)」であったとすれば、朝廷からの神階授与があったことになるが、『延喜式神名帳』には記載がなく、また、天慶年間(938-47年)に、豊後国から大神^{おおが}惟基の長子政次(高知尾太郎政次)が当地に入り、高知尾(高千穂)氏を興したが、同氏は、当神社を、高千穂 18 郷にわたる 88 社(高千穂八十八社)の総社と位置づけて崇めたという?!

このように、伝承に、かなりの齟齬・混乱等が見えはするが、大きくは、神武・三毛入野命(兄弟)／神八井耳命・彦八井耳命(兄弟または同一人物?)／健磐龍命・速瓶玉命(親子)等の、まさに多氏?の部族・勢力が高千穂や阿蘇を治め(進出・略奪し?)、記紀に示されている「高天原」を、この地にしたということではないか?!そうしなければ、腹の虫が治まらなかった(「記紀」は、自らの部族・勢力の正統性・正当性を正しく伝えていない!我々が、その部族・勢力であると!)?!

(3) もう一つ、「景行天皇の熊襲征討」及び「隼人の反乱」の伝承(物語?)から見てくるものもある?!

そこで、もう一つ、ここで思い出されるのが、「記紀」が描く「景行天皇の熊襲征討」である(これが、例の日本武尊の熊襲征討の物語に投影されている?!)!彼は、娑婆^{さば}(現在の山口県防府市)から九州に渡り、8年もの間、九州中南部?を巡回したとされるが(これは、彼が、近畿大和の王でなかったことを示す?そんなに長い間、都を離れているという事実はあり得ない?!)、彼の子(の一人)が、宮崎県の西都原古墳群の主?「諸県君^{もろかたのきみ}牛諸井^{うしもろい}」とされるのである(南部九州での前方後円墳集中部で、彼の娘髪長姫は、仁徳天皇の後となっている!→女狭穂塚・男狭穂塚古墳?ただし、当地では、その双方の墓は、いわゆる「瓊瓊杵尊」と「木花開耶姫命」の夫婦墓とされている?!)?!

それから、もう一つ、例の「隼人の反乱」の時（720年）、九州北東部（豊前国・秦王国と呼ばれた新羅系の勢力地。いわゆる「秦氏」の根拠地?!）から、大挙して霧島山系の土地に移り住んだ人々（辛島氏?）がいたとされるが、彼らは、豊前の宇佐神宮（八幡宮）に異議を唱え、大隅正八幡宮（鹿児島神宮）が、その本宮（正統）であるとしている?!

多分この時に、「天孫降臨の地」を、霧島山系の一つ「高千穂峰」にしたのではないか?!その山上にある「天逆鉾」は、それを誇示する記念碑だった?!しかも、それに連なる霧島山系の最高峰「韓国岳」の名称も、この地が、「記紀」に示す「高天原」の人々が、移り住んだ地域であることを示すものではなかったか?!

以上、現在の「高千穂町」と「高千穂峰」の双方（の先祖達）が、それぞれ、当時の近畿大和政権（百済系・藤原氏）に対して、自らの正統性・正当性を誇示するために、「記紀」が描く「高天原」の地を、そこに措定し、それなりの伝承と事物を、それぞれ残したということではなかったのか?!そして、それが、ある意味正当ではあったので、時々の政権は、その主張・事物を認めざるを得なかった?!つまり、立てや酔狂で、天孫降臨あるいは高天原の地を、彼らが名乗ったのではないということである?!

もしそうであれば、彼らの先祖達は、「記紀」に示された高天原勢力（吉備から発した前方後方墳勢力、そして前方後円墳勢力!）の、ある意味正統・正当な後継者（の一族）であったということになる?!余談?ではあるが、ここでは、大分県の杵築（市）と出雲（杵築）大社の杵築、あるいは臼杵という、宮崎県の（西）臼杵郡と大分県臼杵市の関係等も、俄然興味が注がれる?!

5「天^{あま}」と「海^{あま}」、そこに交わる「神々達」?!投影されている氏族達は?!
(1)「記紀」の壮大な舞台仕掛け?!哲学?でもあるが、史実でもある?!「万世一系」に込められた?真実とは?!

次は、改めて、極めて大きな(無謀な?)テーマではあるが、「記紀(神話)」においては、自らの建国の祖達を「天^{あま}」と「海^{あま}」に投影?させ(それは、彼らの信仰対象でもあった!→太陽・日神信仰/月・月神信仰/北極星・北辰→海原信仰?)、その関係(渡来者としての移住・進出・攻防・和合等の状況)を、いわゆる「神々の体系」として暗示させているのではないかということである(もちろん、中国の漢籍等を活用して!)?!

そして、それを端的に表しているものが、まさに「神生み」のハイライト=三貴子、すなわち、天照大神(太陽・日神信仰)、月読命(月・月神信仰)、素戔嗚命(北極星・北辰→海原信仰)の誕生と、その相克?ということである?!

ただし、『古事記』と『日本書紀』とでは、そこでの神々の名前(種類)が、特に原初の頃の扱いが、順番も含めて、かなり違う?!

もちろん、それは、それぞれの編纂・執筆者(主体)が違う(先祖の信仰対象が違う?)ということであろうが、逆に(したがって?)、その違いを辿っていくと、両者がどのような氏族(部族・勢力)の後裔(主張者?)であったのかということが分かり、そこからまた、新たな古代(建国)史の真相解明の手立てが見えてくるかもしれない?!まさに、そういうことなのである!

これらは、大きくは、これまでも述べてきたように、南方系(中国江南の呉・越)、その後の伽耶・新羅系、そして、最後が扶余・百済系の倭人達(これらは、総称して「倭人」と位置づけられている?!)の「信仰対象」の表象ということになるだろうが、それらが、いわゆる「倭国→日本国」において、どのように根付き、展開されていったのかということでもある?!

ただし、そこに、いわゆる「縄文系」の人々の信仰(自然崇拝、巨石信仰等)が習合されているということも、多分?事実であろう?!私が言うのも憚れるが、本当に広くて、奥深い精神世界(哲学?)の構築物と言え、まさにそうであろう?!なお、天照大神(太陽・日神信仰)については、例の邪馬台国の卑弥呼(←大日巫女貴^{オオヒルメノムチ})の存在が、大きく影響していることは言うまでもないことである?!

ところで、これらに関わっては、とりわけ「三貴子の誕生」に関わっては、改めて、上山春平氏の、深い、ある意味美しい?解釈がある?!すなわち、『古事記』に示されている「神統譜」(神々の体系)は、天御中主^{あめのみなかぬし}と神武(磐余^{いわれ彦})が上下(最初と最後)に示され、その最上の天御中主から、「高天原系(大和←吉備?)」と「根の国系(出雲?)」の二つの系統に分かれ、それぞれタカミムスビとカミムスビ、イザナギとイザナミ、アマテラスとスサノオ、

ニニギとオオクニヌシが対になって繋がれ、そして最後に、再び神武（磐余彦）という、一人の人物（神→現人神・人間）に収斂していくという構図である！

天皇（という存在）は、まさに、その両系統の合わせ鏡、収斂の形なのだということである？！

ちなみに、そこで氏は、「高天原系」は「意思の絆」、「根の国系」は「心情の絆」とされているようであるが、もしも、『古事記』に、そのような配慮？が、それぞれの血縁関係？はともかく（史実ではない？ということも含めて！）、本当にあるのならば、これほどの壮大な舞台仕掛けはないであろう？！『古事記』の哲学、否、文学性？の面目躍如は、まさにここにあるとも言えよう？！

端的に、「意思の絆」は、言わば「父性的な？」建国・統治の強い意思の流れ、「心情の絆」は、それに影響を受ける敗者の側の、母と子、父と娘、義父と息子（夫婦）との、言わば「母性的な？」情愛の流れとも言えようが、それらが、関係の氏族（部族・勢力）の興亡（攻防？）の構図として描かれているということであろうか？！

ただし、私には（他にも、同じように思う人がいたようにも思うが？）、その「高天原系」は、厳密に言えば（直接的には？）、いわゆる藤原氏（不比等）の位置づけ・役割（正当性・正統性？）を投影させているものと見えるが、史実としては、一方で、隠された（敗北した？）側の「根の国系」の流れ（正当性・正統性？）があり、それを土台（反射鏡？）にして、アマテラスから始まる（ように見せかけた？）「万系一世」の構想が練られ、それを、「高天原系」の事績として綴ったものが、まさに「記紀（神話）」（の体系）であったというように捉えている？！そして、そのアマテラスには、当然、「大和王権」の祖（事実上の？→そうしなければならなかった？！）、かの「邪馬台国」の女王卑弥呼（or 台与？）の存在とイメージが昇華されているということである？！

(2) 具体的に、「高天原系」と「根の国系」とは、どのような氏族（部族・勢力）を指しているのか？！

さて、そこで、具体的に、この「高天原系」と「根の国系」とは、一体どういう氏族（部族・勢力）を指しているのかである？！常識的？には、『新撰姓氏録』（815年）に示されている、「神別」の中の「天神・天孫系」と「地祇系」が、それぞれ対応させられる（「天神」は、藤原、大中臣等 246 氏、「天孫」は尾張、出雲等 128 氏で、隼人系の氏族は天孫！「地祇」は、安曇、弓削等 30 氏！なお、その大きな括りは「皇別」「神別」「諸蕃」になっているが、「神別」の最初が「天孫」ではなく、「天神」とされているのが象徴的？）？！

そしてまた、別の見方としては、いわゆる「臣（姓）」と「連（姓）」の違いによって、それに該当させることも出来ようが（例えば、前者が物部＜大臣＞・阿刀・穂積・中臣等、後者が蘇我＜大連＞・葛城・尾張・大伴等）、その間の混淆・

紆余曲折もあり、単純な種分けは出来ないと思われる?!

とは言え、3世紀初頭?の「大和集結・建国」(九州→吉備・出雲?からの近畿進出＝神武期、纏向・三輪政権＝崇神期)、そして「王権の確立(篡奪?)・発展」(河内政権＝応神期)」と続いた、彼ら(上山春平氏?)が「高天原系」と称する氏族達(部族・勢力)の動きや関係を、(強いて言えば「持統・藤原体制」から)描いたものが「記紀(神話)」であり、そしてまたその過程において、排斥され、敗北していったのが、まさに「根の国系」の氏族達(部族・勢力)であったということである?!

ところで、これについては、次のような指摘(事実?)もある!「太陽・日神信仰」は「対馬」、「月・月神信仰」は「壱岐」(から始まった?)ということであるが、前者は、阿麻氏留^{あまてる}神社(祭神:天日神命)、後者は、月読神社(祭神:月夜見/月弓/月読命)に代表されるように、両島の部族・勢力(航海民・海人族)の影響(進出・参画?)が、倭国(→日本国)建国のプロセスに、間違いなく組み込まれていたということでもある(ひょっとすると、むしろそちらの方に、その出発地はあったのかもしれない?地勢的には、その方が合理的のようにも見える?)?!

例えば、対馬の阿麻氏留神社は、以前にも述べた、吉備からの前方後方墳勢力の近畿進出・全国移動(環濠集落勢力の駆逐?)の際に、その土地々に奉斎(埋納?)されていった「手焙型土器」に替わって建造?されていった「天照(御魂)神社」、まさにその系列であるということである?!ただし、それは、前方後円墳勢力(日神信仰→物部勢力?)の為せる業でもあった?!とにかく、対馬の部族・勢力は、いわゆる「天神系」の系列(天津神)であつということでもある?!

一方、壱岐の部族・勢力が、その「天神系」の系列(天津神)であつたかどうかは、私には判断が出来ない?!大きく言えば、そこも、天^{あま}の系列(→高天原系)であつたことは間違いはない?!ちなみに、そこにある「月読神社」からすれば、そしてまた、「記紀神話」からすれば、その系統は、「高天原系」(「天照(御魂)神社」)に飲み込まれていったものとも考えられる?!何故なら、「三貴子」の逸話からすれば、「アマテラス」と「スサノオ」の両系統の相克と収斂が大きなテーマとされているということであり、「月読命系」は、ほとんど無視?されているからである?!

とは言え、その後は、とりわけ「陰陽思想」の導入・発展の中で、この「月読神社(祭神:月夜見/月弓/月読命)」が、目立ってはいないが、きちんと位置付けられていることは忘れられてはいけない(昨日読んだある本で、他ならぬ「伊勢神宮」の「内宮」「外宮」共に、その「月読(夜見)神社」が配祀されていると言う!単なる陰陽思想上の配祀ではないようにも思われるが、いかがであろうか?)?!

(3)「高天原系」の素性?!「天照大神」に昇華された「卑弥呼」、「豊受大神」に昇華された「台与」?!

いずれにしても、ここでの問題は、最初はこちらの方が先（政權樹立主体）であった?「出雲」、そして、それらと複雑怪奇な因縁関係?にある「丹波（丹後）」や「伊勢」の役割と、その悲劇?であろう?!例えば、「元伊勢」と呼ばれる所が各地にあるが（一番有名なのは、丹後一宮の「籠このの神社」?）、それらは、「伊勢神宮」が、現在の地に着座するまでに、各地に遷座・分祀された神社群である。

ただし、丹波国（現京都府福知山市大江町）に創建された「皇大神社」と「豊受大神社」は、それぞれ「元内宮」と「元外宮」として伝わり（基本的にはセット!）、これらは近接しているので、大江町の二社を総称して「元伊勢神宮」とも言うらしい!また、同地内の岩戸山という異称を持つ「日室ヶ嶽」の麓には、「天岩戸神社」があつて、これらで「元伊勢三社」とも言うらしい?!とにかく、丹波・丹後も怪しい?!

とは言え、現在の伊勢神宮内宮の祭神・天照大神が皇祖神であり、第10代崇神天皇の時代までは天皇と「同床共殿」であつたが（つまり、それまでは皇居内に祀られていた!）、その関係を畏怖した同天皇が皇女・豊鋤入姫命にその神霊を託して（その祭祀を忌避したということ?）、大和笠縫邑に「磯堅城の神籬」を立てたことに始まり、更に理想的な鎮座地を求めて各地を転々とし、第11代垂仁天皇の第四皇女・倭姫命がこれを引き継いで、およそ90年をかけて現在地に遷座したとされるのである（全部で26宮。伝承地・候補地多数!）?!

こうした遷座の経緯については、『古事記』では示さないが、『日本書紀』では簡略に、『皇太神宮儀式帳』ではやや詳しく、そして中世の『神道五部書』の一書である『倭姫命世記』においては、より詳しく記されているということである。これ自体は、なかなかややこしい話ではある?!

また、「外宮」の祭神である「豊受大神」は、不思議なことに、『古事記』『日本書紀』ではまったく記されず、『止由気宮儀式帳』や『倭姫命世記』によれば、第21代雄略天皇の時代に、天照大神の神託によって、丹波（丹後）から遷座したと伝えられているようである?!

なお、天照大神が遍歴する説話は、『常陸国風土記』の筑波山の話に登場する祖神や民間説話の弘法大師伝説に類するものともされているらしいが、一般の神社の縁起でも、鎮座地を求めて神が旅する話は多いので、「旅する神」の典型的な類型でもあるらしい（以上、「ウィキペディア」より）?!

それはともかく、ここで言いたいことは、件の「神々の体系」は、『魏志』に登場している「卑弥呼」と「台与」をモチーフに、前者を「天照大神」、後者を「豊受大神」に昇華させ、さらに、前者に「持統」を潜り込ませ（すり替

え?)、それを「天津神系(勝者 or 統治する側としての天智系・藤原氏)」、つまり「天」＝「高天原系(韓半島→北九州→吉備→大和)」とし、後者を、「国津神系(敗北 or 統治される側としての天武系・蘇我／物部氏?)」、つまり「海」＝「地祇・出雲系」＝「根の国系」(江南・伽耶・新羅→北九州→山陰→丹波・越→近江・伊勢→信濃?)として、その間の関係を、「天照大神」と「素戔鳴命」の攻防という形で、寓話(鏡像?)化したものではないか?!

そして、それが本当ならば、「台与」or「豊受大神」の実像に迫っていけば、鏡に映される前の本来の姿が見えてくる?そして、そこには、決して表には出て来ない、陰で操る?「秦氏」の姿も見えてくる?ということである?!ちなみに、「天照大神」は、本来は「男神」であり、「豊受大神」は、その「妻神」である(もちろんそれは、関係勢力の関係比喻でもある?だが、そのモデルはいる?→天日矛＝武内宿禰と息長足姫(竹野姫?)＝神功皇后?!)?!

6「三種の神器」からみた「大和王権」の成立過程?!「記紀」は、それをどのように示しているか?!

(1)「三種の神器」とは何か?それは、何を表しているのか?!何かの「意匠」であり、「メッセージ」でもある?!

さて、先(5)に、我が国建国における「高天原系≡天津神(天神・天孫)系?」と「根の国系≡国津神(地祇)系?」の相克の歴史と、その構図(まさに壮大な?建国史)を、各関係氏族(部族・勢力)の関係と、その系譜としての「神々の体系」の造作(トリック?)という視点で、考察してみた?!ここでは、その続きとして、多分?そのことに大に関わる(核となる?)「三種の神器(八咫やた鏡/天叢雲あめのむらくも剣→草薙くさなぎ剣/八尺瓊やさかに勾玉)」の存在と、その意味を、改めて考察してみることにしたい!

と言うのも、いわゆる「三種の神器」とは、もちろん古墳(前方後円墳?)への埋葬品でもある「鏡」「剣」「玉(勾玉)」のことであり、その被葬者が、生前所有していた威信材・奢侈品でもあったわけであるが、その三つの品物(宝物?)の「セット所有」は、明らかに、ある何かの「意匠」であり、「メッセージ」でもあったと考えられるからである?!そしてまた、その三つの「セット所有」が、その土地(国_{クニ})の支配者である?「大王」、最終的には「天皇」の権威の象徴となったということであるが、問題は、それが、何故、「鏡」「剣」「玉(勾玉)」なのか?ということだからである?!

すなわち、それらは、それぞれ、恐らく?特別な生活の必需品(豊作祈願や自然崇拝あるいは祖先崇拝や呪術等、さらには戦闘鼓舞の道具?!)であり、しかも「高価?で、貴重であった」わけであるが(手に入れにくい!それ故に「宝物」?)、何故、それら(「鏡」「剣」「玉(勾玉)」)なのか、そして何故、その三つなのかということである?!いろんな解釈の仕方もあるだろうが(たまたまそうであった?ということも含めて?)、そこには、多分?「記紀」の編纂者達(直接的には、持統・藤原政権?)の演出(真相吐露?→嘘はつけない?)があるようにも思えるのである?!

しかるに、それらは、最初から「三種の神器」と呼ばれていたわけではなく(「用語・概念」がなかった?!)、しかも、それらは、言わば「バラバラに(個別に)」作成・所有されていた(はずである?)からである?!現実的にも(現在でも)、それらの所有者(管理者)は、伊勢神宮、熱田神宮、そして天皇家(皇居)となっている!

もちろん、形式としては、それ以前から、そのような埋葬形態もあったであろう?!例えば、福岡県前原市の曾根遺跡群・「平原遺跡(平原王墓?)」あるいは福岡市の「吉武高木遺跡」、壱岐市の「原の辻遺跡」、そして、福岡県小郡市の津古生掛遺跡群(3世紀末?)等である?!その意味で、当時の持統・藤原政

権が、そのような形式にヒントを得た（モデルとした？）？あるいは、ひょっとすると、これもあり得ようが、その形式を大和に持ち込んだ部族・勢力（の後裔？）が、ある意味「大和王権」の中心となっていたのではないかということである?!

とにかく、それらは、個別の存在（「ご神体？」）であったということは間違いなく、問題は、それが、何故、その集合体としての「三種の神器」という、まさに「観念的なもの」となっているのかである?!とは言え、その「観念」（「ご神体？」）は、まったくの空想物ではなく、そこには、それを、それぞれの作成・所有主体の象徴とするという、ある種の思い（作為？）があるということであり、ここが重要であるが、その、それぞれの三つの作成・所有主体が、まさに「セット（鼎?）」となって（協力して?）「大和王権（前方後円墳体制?）」を創り上げたという、言わば「仮構の表象」（アピール?）であるということである?!

もし、そうであれば、それらが、どこに奉斎されているのか、そして、それが、どの部族・勢力に関わるものであったのか？そういうことを明らかにしていけば、より具体的な（真実の?）建国のプロセスが分かるということでもある?!繰り返しになるが、それが、大和王権を構成した？有力部族・勢力の動き・働きを示すことになるのである?!言い換えれば、その来歴等が、改めて追究されていけば、その大和王権（建国）の実相と、それに関わった部族・勢力の出自や関係等が浮かび上がってくるということである?!ただし、単純ではない?!

(2)「鏡」「剣」「玉（勾玉）」から見た、大和建国の構図?!

ということで、改めてまず、「鏡」であるが、これは、「日神信仰」あるいは「太陽信仰」を表していることは言うまでもない!日の光が当たると反射し、神々しい（恐ろしい?）輝きを発すると共に、自らの顔をも映し出す、誠に?摩訶不思議な「鏡」に、誰もが驚き、畏怖の念を重ねたことは（それ故、「辟邪へきじゃ」の意味ももった?）、今なお容易に想像できることである!

件の邪馬台国の「卑弥呼」が、「魏」から「好物」とされ、100枚の「銅鏡」を下賜されたという話は、つとに有名であるが、この頃（3世紀半ば）、既に?「（銅）鏡」が珍重され、その所有と使用（「祭り事」）は、王権（支配・統制）の権威と納得の形でもあったということである（例の「鬼道」というものが、その使用の発現の形であった?）?!

ちなみに、この「鏡」の一形式である「銅鏡」、その中の「三角縁神獣鏡」が、卑弥呼が魏から貰った鏡なのか、すなわち「舶載鏡（外国で作られた）」なのか、それとも、例えば、「倭」に移住して来た「呉」の職人による?「仿製鏡（「舶載鏡」を模した）」あるいは「国産鏡」なのかという、これまた「永遠の?」論争があるが（私自身は、「三角縁神獣鏡」は、「舶載鏡」ではなく、それこそ「辟

邪」の意味をもたせた、国内で大量に生産された「仿製鏡」または「国産鏡」であると考えている！)、ここで言う「鏡」とは、「神宝?」「威信材」としての、高価で、貴重な「銅鏡」(国産鏡?)ないしは「鉄鏡」のことである?!

なお、「鏡作り」自体は、その部族・勢力の職掌(生業)であったことは言うまでもない?!とにかく、その「(八咫)鏡」は、3世紀中頃?の「纏向祭政都市」の神殿部?にあったものの(「同床共殿」)、4世紀前後?の「崇神政権?」(三輪)から遠ざけられ、各地を転々として、最終的には、伊勢(内宮)に行き着いたわけである?!

ただし、この「鏡」の部族・勢力は、高天原勢力、すなわち「(最終的には?)前方後円墳勢力」の主力であった物部氏の一族?(石凝姥いしこりどめ命→鏡作部)とはされているようであるが、具体的に、彼らが、どのような形で、それを奉斎していったのかは、今のところ、私には明確にはできない(伊勢神宮を最初に創建した部族・勢力→荒木田氏・内宮 or 渡会氏・外宮?!→ただし、両者自体は、かなり仲が悪かったようである?!) !

次に、「剣」であるが、これは、尾張氏の根拠地・熱田神宮にあるとされている?!だが、その剣が、例の素戔鳴命が出雲(斐伊川上流)で八岐大蛇を退治した時に、体中から出てきたものということは広く知られているが、何故、どのような経緯で、尾張氏(熱田神宮)が保有しているのかについては、あまり詰められていない?!

素戔鳴命→(献上)天照大神→(下賜)タケミカヅチ命?/高倉下命?→(倭姫命)→(日本武尊)→尾張氏(宮簀みやす媛←父・乎止与おとよ命)といった流れとなるが?、かなりの謎である?!特に、尾張氏の所有(象徴)ということになれば、尾張氏は、他ならぬ「高天原」から追放された「素戔鳴命」と大いに関係があることになる?!

最後に、「玉(勾玉)」は、現在皇居(「天皇家」)にあるということだが、それは、「天太玉あめのふとだま」の後裔とされる「忌部いんべ氏」(「伊福部氏」も?)と関係があったようである?!彼らは、後にも述べるように、基本的には「出雲」(「山陰」)の部族・勢力である(ただし、四国・阿波、そして房総・安房への進出は顕著である?!) ?!

(3) 改めて、それは「観念的なもの」であり、実際の(最後まで)協力関係(「合力」?)を表すものではない?!

以上、簡潔に?、「鏡」「剣」「玉(勾玉)」の所有・シンボル氏族を挙げたわけであるが、それらは、それらの部族・勢力の、単純な「連携・協力」を指すものではなさそうである?!何故なら、「鏡」は、第10代崇神天皇の時に、大和(纏向)を離れて(忌避されて?)、笠縫邑(「檜原神社」?)を皮切りに、各地(かなり広範囲で!)を転々とし、最後は、現在の伊勢(神宮)の地まで遷座さ

せられている（なお、それぞれの遷座地は、いわゆる「元伊勢」と呼ばれるが、その数は何と90を超えるらしい?!）?!おそらく、それらの地は、「鏡」を信奉・作製する部族・勢力の居留地・移動地であったであろうが、最後が、「伊勢→磯部」であったのは、やはり変なのである?!

すなわち、そこは、多分北部九州（「伊都国」?）からの移住民?「海部→磯（イト→イツ→イソ?）部」の寄留地・進出地（の一つ）であったろうが、そこが、ある意味、ある時期、その部族・勢力の（最大かつ最終?の）地であった?!しかも、その部族・勢力は、いわゆる「出雲系?」であり、彼らは、最後はそこに押し込められた（壊滅させられた?）?!それを示唆?しているのが、「天孫降臨」を嚮導?した、例の「猿田彦」「天鈿女」の顛末である（「猿田彦」は、そこで奇妙な、否、滑稽な?死に方をしている!他にも、当地には、いくつか面白い伝承がある?!）?!

次に、「剣」に関してであるが、以前にも述べたように、吉備（赤磐市）の「石上布都魂神社」に、「出雲の象徴?」でもある「素戔鳴命」が、何故か?祀られている（吉備に、物部系の神社があること自体は不思議ではなく、問題は、その物部氏と「素戔鳴命」に、どのような接点があるのかということになる?!）!その答え（ヒント?）は、まさしく素戔鳴命が、出雲で、例の八岐大蛇を斬った時の刀剣が、物部氏の祭神「布都御魂^{ふつのみたま}」とされていることにある?!そして、その後の、タケミカヅチ（「中臣氏」→「藤原氏」?）が大国主に国譲りを迫った時の刀剣も「十拳^{とつか}の剣」であり、それも?「布都御魂」とされている?!

また、時代?は前後するが、国生み神である「イザナギ・イザナミ」の所で、最後に、イザナギが、妻のイザナミを死に追いやった?「カグツチ」を斬った時の剣も「十拳の剣」とされ、別名「天尾羽張^{あめのおはばり}」とも呼ばれている?!実は、ここに、いみじくも?「尾張氏」の影がチラつくのであるが、まさしく、その後の出雲を支配した「出雲（臣）氏」（「国造」→出雲大社の宮司家!）は、尾張氏、正確に言うと、（「出雲の国譲り」の時の）高天原からの先兵?であった「アメノホヒ」の後裔であり、その「アメノホヒ」は、大国主勢力と仲良くなって?、出雲に同化したとされる（「出雲国造神賀詞」では、大和王権に忠実に貢献したと言うが!）?!

だとすれば、その「アメノホヒ」が、ある面「素戔鳴命」の顔（要素）をもっているのであり、しかも、出雲と紀伊（→神武を助けた、尾張氏の「高倉下^{たかくらじ}」）の双方の「熊野」の関係も、より真実味が出てくることになる?!素戔鳴命は、「出雲へ追放された」が、一応「高天原」勢力の一員ではあったのであり、吉備を出発した?物部氏系（本来の「高天原系」?）の神社に祀られていても、さほど驚くことではなく、むしろ素戔鳴命は、まさに物部氏、そして尾

張氏（の類縁者？あるいは、その何らかの虚像？）であったとも考えられるのである？！

最後の「八尺瓊勾玉」（天太玉→忌部氏・伊福部氏も？）についてであるが、「忌（斎）部氏」は、もともとの発生（母体？）は「出雲（意富郡？→玉造部氏？）」であった？！だから？、その「忌部氏」は、その後、（中臣氏を取り込み、中枢であった物部氏をも習合させた？！）藤原氏と反りが合わず、記紀の表舞台？には登場しない？！しかし、例の「天の岩戸神話」では、その饗宴？（「三種の神器」を意識させた？演出？！）の中に、その存在が明確に示されている？！

ちなみに、忌部氏の後裔である「忌部広成」が、『古後拾遺』（807 年）を著し、時の（これまでの）政権に、かなりの憤懣？を露にしたとされるが、それもまた、大和王権が、誰もが納得のいく成立・維持を果たしていないことを示すものである？！しかし、大きくは、当該の三勢力が、「大和王権」を創り出したということではある？！

7 「大和三山（天の香久山・耳成山・畝傍山）」の意味?! 「三種の神器」との関係は?!

(1) ここにも、「大和王権」の構図が示されている?! 改めて、その意味するものは?!

さらに、これも前から気になっていたことであるが、いわゆる「大和三山（天の香久山・耳成山・畝傍山）」に纏わる古代氏族の関係について、私なりに考察しておきたい！実は、この「大和三山」を象徴する古代有力氏族があり、その古代有力氏族が、言わば「鼎^{かなえ}」? となって、「大和王権」（「倭→日本国」）を樹立して（実権を握って?!）いったのではないかということである?! それが、まさに「物部氏」であり、「蘇我氏」であり、「尾張氏」であるということであるが、本当に彼らは、そうであったのであろうか? そしてまた、それが真実であるならば、どのようにして、そうなっていったのであろうか? そこに、関心が持たれるということである?!

ちなみに、今回新たに、この「大和三山」について調べていたら、それについてのネット情報・研究成果? が様々に見られた！本当に、これについても、多くの人が興味・関心をもたれている、あるいはそれを、ライフワーク（仕事?）にされていることが分かった（尤も、私も、その一人ではあるが?!）！ただし、多くの人が、いろんなことを語って（調べて）おられるということは、これについてもまた、諸説紛々ということにはなる?!

さて、それはそれで、ある意味仕方がないことではあるが、この「大和三山」の関係については、次の二つの万葉歌が大いに注目されるところとなる?! すなわち、それは、中大兄皇子、つまり後の「天智天皇」と、その娘の一人「持統天皇」（天武天皇の正妃!）の歌とされるものであるが、取りようによっては、それらは、ある重大な過去（関係）を仄めかしているものではないのかということである?!

つまり、その歌意（底意?）には、歴史的な何かの真相が、誰かの作為によって（本当は、誰が作ったのか分からないということも含めて?）、遠回し（文学的?）に示されているのではないかということである?! だから、後世にも残った?! そうということである?!

・ 香具山は 畝傍ををしと 耳梨と 相あらそひき
神世より かくにあるらし

古昔も 然にあれこそ うつせみも 孀を あらそふらしき
（読み）かぐやまは うねびおおしと みみなしと あいあらそいき かみよより
かくにあるらし いにしえも しかにあれこそ うつせみも つまを あらそう
らしき

（訳）香具山は、畝傍山が愛おしいと言って、耳梨山と争った。神代から、そうで

あるらしい。昔からこうだったのだから、いまでも、一人の女性を、二人の男性で争うんだね。

まずは、この「中大兄皇子」の歌とされるものである！その読みと訳は、今回のインターネット情報からのものであるが、「一人の男性を二人の女性が争ったという解釈もあるそうですが、わたしは中大兄皇子、大海人皇子、額田王の三角関係のほうが萌えるので、こっちをご紹介します。」ともある！それはそれで、艶やかな男女関係の浪漫？も高まるので、しかも、一般にも、そのように解釈されている向きもあるようなので、私は、その歌の解釈自体には、あまりこだわらなう？！

だが、やはり私は、この歌の底意？、すなわち「**神世より かくにあるらし 古昔も 然にあれこそ**」という部分に、何かの暗示、歴史的なメッセージ性を感じるのである？！すなわち、ある時（それまで）の、その、それぞれの聖山を象徴する（根拠地とする？）部族・勢力の関係は、実はこのようであったということ、誰かが、歌に託して示しているのではないかということである？！それが、「尾張氏」（天の香久山）、「蘇我氏」（畝傍山）、「物部氏」（耳成山）の関係であり、しかも、直意は、「尾張氏」は、「蘇我氏」を巡って（頼って？）、「物部氏」と争った（ことがある？）ということである？！

・春過ぎて 夏来るらし 白袴たえの 衣干したり 天の香久山

次は、この著名な万葉歌であるが、これは、「春が過ぎて、夏が来たようだ！向こうの『天の香久山』には、白い衣が干してある！何と清々しいことよ！」というように、一般には、季節の移り変わりを詠う、長閑で、平和な初夏の歌？とされているようである？！

しかし、実は、その歌の別な（深い？）解釈で、誠に面白い？ものがあるのである！それは、例の関裕二氏の指摘であるが、「（王権を狙う？）持統天皇が、天の香久山の白袴の衣（天皇の着衣＝皇位）を前にして、いよいよその時が来た！」というような心情を表した歌であり、本当は、彼女（達）の恐ろしい企みを暗示しているというものである？！しかも、関氏によれば、実態？として、聖山である香久山には民家はなかったのであり、洗濯物を干すような、長閑な光景などはなかったというのである？！

もし、そうだとすれば、そこには、かなりの説得力があることになる？！何故なら、その後持統（藤原不比等とのコンビ！）は、夫（天武）の勢力や「尾張氏」を斥けて、皇位を篡奪している（天武王統から天智王統へ、そして自ら高天原系の頂点へ?!）?!ということは、「皇位」（の行く末？）は、「天の香久山」、すなわち「尾張氏」が握っている（た？）、ということの「寓意」ではなかったかということである？！換言すれば、「尾張氏」は、ある種の「キングメーカー」ないしは「（王位継承の）キャスティング・ボード」を担った氏族だったというこ

とである?!

その証拠?に、その昔(3世紀末?)に(も?)、吉備から?出雲(王権?)に乗り込み(参画し?)、そこと融和?した「尾張氏」(前方後方墳勢力の一派?)であったが、彼らは、その後、仲間?の「大物主系」、そして「和珥系」(前方後方墳勢力の全体?)、その中心勢力であった「多(意富?)氏」等と袂を分かち(裏切り?)、「物部氏」(双方円墳→同じ吉備からの前方後円墳勢力?)や「忌部氏」と、大和(纏向)で合同政権(三輪王権?)を打ち立てた?!そして、その後、何らかの形で蘇ってきた(「畝傍山」を象徴する部族・勢力となっていた?)、多分「和珥系」の流れを汲む?「(武内宿禰→)蘇我氏」と組み、再び「王権」に参画した?!

(2)それぞれの「聖山」の意味、特徴?!

ということで、次に、それぞれの「聖山」の具体的な意味、特徴?をまとめてみると、まず、「天の香久山」であるが、そこは、確か「神武東征」時に、大和での戦況を打開するために、「八咫鳥(鴨族?)」と「弟磯城(磯城県主^{しき}のあがためしの祖)」の二人が、敵(反対勢力)の目を欺いて?、その山の土(埴)を取って来て、「厳瓦いっへ」(呪術のための土器)を作り、その聖意(火?)によって、敵を靡かせたという話がある?!

その山が、「天の香久山」、まさに「尾張氏の祖・(天)香久山」の名を負っているのである(これは、例の、吉備から出立した「手焙型土器」勢力(前方後方墳勢力)との接触・融合を彷彿とさせる?)?!単純に言えば、「天の香久山」(の周辺)は、その「尾張氏」(の祖)が掌握していたということである?!

ところで、この山には「意加美^{おかみ}神社」(祭神:淤加美または龍(龍)神)があり、その祭神は、「神生み」において、伊邪那岐^{いざなぎ}神が迦具土^{かぐつち}(火の神)を斬り殺した際に生まれた神とされている。また、この神と同神と考えられる高龍^{たかおかみ}神は、貴船神社(京都市)の祭神でもあるといい、この神は、出雲の素戔鳴命や大国主命とも関係があるらしいが、ここで注目されるのは、龍^{おかみ}は「龍」の古語であり、龍は水や雨を司る神として信仰されていたことである!

先の貴船神社のほか、丹生川上神社(奈良県吉野郡)では罔象女^{みづはのめ}神(水の神)とともに祀られており、全国にも「意加美神社」と称する神社は多々あるということである。とすれば、これらから、以前にも述べた、吉備の「龍神信仰(日神信仰)」が連想されるが、尾張氏(の祖)が、その吉備からの「龍神信仰(日神信仰)」の一派であったことが推察されるかもしれない?!ちなみに、香久山は、「鉄・銅・辰砂(朱・硫化水銀)」の産出地でもあったらしい?!これについては、「石凝姥^{いしこりどめ}命」(鏡作^{かがみづくり}連らの祖)が、この「天の香久山」の金(属)を取って、例の「八咫鏡」を冶工に造らせたとある?!道教の思

想では、鏡（日神）は宇宙の最高神の権力を象徴するとされるが、この「八咫鏡」は、まさに、そういうことであろう?!

次に、「耳成山」であるが、その山は、「天然の山ではなく、古代に造営された『上円下方墳』との説がある。大和三山が二等辺三角形をなし、かつその事実が古くより知られていた事、古事記や日本書紀において古い時代の記述が無く、ようやく日本書紀において允恭天皇の時代以降に記述が見られる事が根拠として提示される。その規模の大きさから全くのゼロから造営された古墳でなく、既存の天然山を改造したという説もあり、火山と見られるのに噴火口が無い事から、噴火口を埋めるなどの造成をした（その際に大和三山の山頂が二等辺三角形をなすように調整された）とも考えられている。かつては、「天神山」とも呼ばれ、天神山城があったとされる。」とある!

この地には、例えば高市御県御坐鴨事代主神社、天太玉命神社等もあり、これらのことから、ある時期まで大和王権の中心（母体）であった「物部氏」（「忌部氏」も?）が支配する聖山であったことが分かる?!

最後に、「畝傍山」であるが、この山麓が、神武天皇の即位地（王権発祥の地→橿原宮）でもある!興味深いのは、この畝傍山と橿原宮の周囲には、「九州の海人」（「神武東征」で活躍した大伴氏と久米氏。大伴と久米は同族で、大伴と天皇家の絆は強い!）が陣取っていたようである!

すなわち、そこは、「道臣^{みちのおみ}命」（大伴氏の祖→吉備の上道・下道臣氏の祖?）と「大来目部」（久米氏の祖。入れ墨あり!）、そしてまた「忌部氏」（彼らもまた、入れ墨あり!）も、この地に地盤をもっていた（彼らは、「阿曇族」か?!）!初代王（神武）は、海人族とともに、この地に入植してきたということであるが、後に、そこに「蘇我氏」が被さって来たのである（→大和の飛鳥!）?!

(3) 改めて、「三種の神器」とそれぞれの「聖山」の関係は?!

翻って、大和三山は、畝傍山を頂点として二等辺三角形を成しており、頂点と底辺の中点を結んだ線の延長上に三輪山があり、そのピラミッドパワーが、三輪山に放出されているという説もある?!例の「天の岩戸事件」（天児屋根命と太玉命が、八咫瓊の五百箇の御統（勾玉）や八咫鏡と共に、天香山の榊を掘って揃えてきた神事）を彷彿とさせる?一方で、他でもない、持統天皇が建都した「藤原京」は、その三山の中心に当たるらしい?!

尤も、この三山の関係には、別な解釈、例えば、出雲（三輪?）、橿原（神武）、葛城（鴨?）の三者の関係（三角関係?）もあるらしいが、いずれにしても、「大和王権」が、畝傍山（蘇我氏→男性性）・八咫瓊勾玉（天太玉命→忌部氏）、耳成山（物部氏→女性性）・八咫鏡、天の香久山（尾張氏→女性性）・天叢雲剣（草薙剣）の部族・勢力が、畝傍山（蘇我氏）を頂点にして、樹立されたものであるということを示すものであるということである?!

なお、史実としても、持統・藤原勢力が、蘇我氏（王権）を倒し（「乙巳の変」）、その地位を奪ったことは確かであるが、そこには、「尾張氏」も関係していること、しかもそのことは、往古のそれと同じであるということである?!別言すれば、「天の香久山」は、大和三山の裏中心?ともされていたということであり、具体的には、「尾張氏」が、「出雲」、そして「神武（大和）」、その後「物部」や「蘇我」の王権に参画・協力してきたということである?!実は、それが、「三種の神器」の意味でもある（状況→物的証拠?）ということである?!

我々は、そのことを、正確に認識しなければいけないということになるが、とりわけ「尾張氏」の存在と、彼らが果たした役割（裏切り?も含めて!）は、我が国の古代史を解明する大きな鍵となることは間違いないであろう?!

8 「出雲大社」と「熊野大社」の関係にみる、「根の国系＝出雲系？」の謎、否、怪?!

(1) まずは、出雲（島根県）の熊野大社と紀伊（和歌山県）の熊野大社の関係を問う?!そこには、何が?!

ところで、先の5、6、7と連動して、これも、以前から気になっていたことがある!それは、島根県（出雲）の「熊野大社」と和歌山県（紀伊）の「熊野大社（本宮大社・速玉大社・那智大社）」の関係というか、神社名が同じであることから、何らかの関係があることは明らかではあるが、単純に?どちらが先にあったのかというようなことである!

だが、ある意味仕方がないが、これにも双方の説があるようであり、今回、改めて調べてみたところ、やはりそのようなものでもある?!ただし、出雲の「熊野大社」（松江市）には、自社の方が「元宮」である、というような古伝もあるようである（私は、その説?を支持する!）?!果たして真実は、どうなのか?!

ちなみに、この私の問いは、紀伊の「熊野大社」のうち、「本宮大社」（田辺市）が一番古そうであるので（ただし、「熊野三山」の位置づけ以前は、それぞれが、別の神社・信仰地であった可能性もある?）、出雲の「熊野大社」と紀伊の「（熊野）本宮大社」とでは、どちらが古いか（関係部族・勢力の移動の後先?!）ということになる?!

とは言え、この問いは、単純な「新旧」の問題ではなく、例えば、「記紀」における、いわゆる「出雲の国譲り」が、具体的に（史実として?）、どこ（から）の、どのような部族・勢力が、どのような範囲（地域）で、どのような攻防を繰り返したことを指しているのか、そして、その結果、どのような事態が引き起こされたのかということでもあるので、関係部族・勢力の「場所移動?」も含めて、この「新旧」の問題は、ある意味大変な「問題提起」の要素ももっているわけである?!

ということで、まずは、その中でも、特に、そこにおける「ご祭神」と、その関係が注目されるところとなる?!と言うのも、件の出雲の「熊野大社」は、出雲東部（意宇郡）にあり、それでまた、西部（杵築郡）の「出雲大社」とのつながりも強固であるようであるが、例えば、出雲の「熊野大社」に関わる（もちろん「出雲大社」にも関わる?）、すなわち、その出雲を象徴する「スサノオ」が、その祭神とされている?!

そして、そのスサノオの子?とされる「五十猛いたける」が、兵庫県の「中臣印達いたて神社」（播磨の揖保川流域）の祭神とされており、彼ら親子?（二人の姉妹も含めて!）の痕跡は、もちろん出雲にも多々あるが、紀伊・熊野にも広がっているのである?!

このように、たとえスサノオが、出雲の勢力・実情をすべて投影させられて

いる架空の人物？であったとしても（その可能性は大である？）、最近、再三繰り返しているように、吉備からの？尾張氏（の一派？＝天菩比^{アメノホヒ}勢力）が出雲に進出したことは間違いなく、その吉備の「前方後方墳（手焙形土器）勢力」は、龍王の祖先（モデル）としてスサノオを創出した？しかし、その悪しき遍歴？によって、その後の高天原（前方後円墳）勢力から、次第に忌避されるようになっていった？！そういうことであったのではないか？！

一方、その吉備の本隊？（日神信仰＝龍王山信仰）勢力（物部氏？）は、同族の尾張氏（「アメノホヒ」）が出雲に進出しても？、武器形青銅器や銅鐸の祭祀には戻らなかった？！それに代わって、同じ青銅製の「鏡」を造り始めた？！

それは、あの卑弥呼の好物とされた「鏡」であろうが、それが、（6）で述べたように、「八咫鏡^{やたのかがみ}」（イシコリドメ→アマテラス：物部（→藤原？）→伊勢）に繋がっていった？！そしてまた、それと連動して、「天叢雲^{あめのむらくも}劍→草薙^{くさなぎ}劍」（スサノオ→タケミカヅチ：尾張→中臣（→藤原？）／フツノミタマ：物部）、そして「八咫瓊勾玉^{やさかにのまがたま}」（アメノフトダマ：忌部→中臣（→藤原？）→皇居？）という、「三種の神器」につながっていった？！

この状況（物的？）証拠が、「大和王権」の成立、すなわち「出雲の国譲り」の結果？ということになるが、ここでは、その間の、スサノオ勢力、あるいは出雲の旧勢力（西部の「神門臣氏←四隅突出型墳丘墓？」）や「出雲国造家」となっていた「尾張氏」（アメノホヒ）の関係（移動）が、どのようになっていったのかということになるが、その鍵を握っているのが、他ならぬ「熊野（大社）」ということなのではないかということである？！

(2) 改めて、「出雲大社」と「熊野大社」、そして、その「祭神」の関係は？！

そこで、改めて、出雲の「熊野大社」の祭神であるが、「伊邪那伎日真名子^{いざなぎのひまなご} 加夫呂伎^{かぶろぎ} 熊野大神^{くまののおおかみ} 櫛御氣野命^{くしめけぬのみこと}」（何と長いことか！）とされ、この祭神名は、「素戔鳴尊」の別名であるとされているのである。

何故、その神が「素戔鳴尊」なのかは、多少不分明であるが、その「伊邪那伎日真名子」という意味は、「イザナギが可愛がる御子」、「加夫呂伎」は「神聖な祖神」の意とされており、「熊野大神」は、鎮座地名・社名に大神をつけたものであり、実際の神名は「櫛御氣野命」ということになる？！さらに、その「クシ」は「奇」、「ミケ」は「御食」の意で、食物神と解する説が通説であり、これは、『出雲国造神賀詞』に出てくる神名を採用したものとあり、『出雲国風土記』には、「伊佐奈枳乃麻奈子坐熊野加武呂乃命^{いざなひのまなご くまのにます かむろのみこと}」とあるらしい。

なお、現在では、櫛御氣野命と素戔鳴尊とは、本来は無関係であったとみる説も出ているらしいが、『先代旧事本紀』（「神代本紀」）には、「出雲国熊

野に坐す建速素盞鳴尊」とあり、少なくとも現存する伝承が成立した時には、すでに櫛御氣野命が、素戔鳴尊と同一神と考えられていたことが分かるとある?!（以上、ウィキペディアより）

一方の、紀伊の「熊野大社」では、本宮大社が「家都美御子大神けつみみこのおかみ（熊野坐大神くまぬにますおかみ、熊野加武呂乃命くまぬかむろのみこととも）。ちなみに、速玉大社では「熊野速玉大神くまのはやたまのおかみと熊野夫須美大神くまのふすみのおかみ」。そして、那智大社では「熊野夫須美大神」が主祭神とされている。

いずれにしても、問題を簡素化すれば、（出雲の）「櫛御氣野命（素戔鳴尊）」と（紀伊「本宮大社」の）「家都美御子大神（熊野坐大神あるいは熊野加武呂乃命。ただし、彼は、素戔鳴尊の子の「五十猛いたける命」とも言われるが?）」のどちらが古いのかということである?!

これを、単純に、「スサノオ」が出雲で、その子の「五十猛」が紀伊ということであれば、まさに「出雲から紀伊」へ、「熊野」の名を携えた（「スサノオ」をシンボルとした）部族・勢力（の一部?）が移動したということになるが、もし、そうだとしたら、いつ頃、何故、どのようにして、彼らは、出雲から紀伊へ移動したのかということになる?!

実は、それが、熊野の「高倉下たかくらじ」の謎にも結びついてくるのである（彼は、高座結御子たかくらけつみこ神社・熱田神宮境外摂社に、「高座たかくらさま」と呼ばれ、尾張氏の祖として信仰されているらしい?!）?!ちなみに、先の『先代旧事本紀』（巻5「天孫本紀」）においては、熊野の「高倉下」は、物部氏の祖神である「饒速日にぎはやひ命」の子で、尾張連らの祖「天香語山命」（越後の「彌彦神社」の御祭神でもある!）の割註に、「天降り以後の名は手栗彦命または高倉下命である」とされているらしい?!

また、『海部氏系図』の「勘注系図」においては、始祖「彦火明命ひこほあかり（饒速日命）」の兄「天香語山命」の註に、（「天香語山命」が）大屋津比賣命を娶り、高倉下を生んだ。そして、始祖の孫（「天香語山命」の子にあたる）「天村雲命」の弟として、“弟熊野高倉下 母大屋津比賣命”と表記されているらしい?!（これもまた、ウィキペディアより）

いずれにしても、物部氏と海部氏、そして尾張氏（→紀氏も?）は、始祖が、すべて「彦火明命（饒速日命）→物部氏の祖?」とされているため?、その限りにおいて同族だと考えられるが、（紀伊の）熊野に尾張氏（の祖の一人?）が関わっているとすれば、出雲と紀伊の（熊野の）関係は、単に、その二つの氏族（部族・勢力）の関係に終わらず、物部氏や海部氏との関係も（→紀氏も?）、新たに追究されなければいけない（ある意味?再び、困ったものである!）?!

(3)「火」と「日」の「裏表」?!元は、「火」の神、そして「日」の神へ?!「出雲国造」の謎?!

ただし、ここでは、そのことは一先ず置いておくことにして、とにかく、「熊野」が「スサノオ」、そして「尾張氏」と関係していることは、多分?明らかであり、そしてまた、「出雲大社」の宮司である「千家氏(出雲国造家)」が「アメノホヒ」の末裔であり、その「アメノホヒ」勢力は、まさに「尾張氏」(の一派?)であるので、ここに、「出雲(大社)」、「熊野(大社)」、「尾張(熱田神宮)」の関係が見えてくるのでもある?!

すなわち、熊野の「高倉下」が、天照大神を通じて「タケミカヅチ命」から「霊剣(フツノミタマ)」を下賜?されているが、スサノオ(八岐大蛇退治)、剣(天叢雲剣→草薙剣)、尾張氏(熱田神宮)と繋げてみれば、双方の熊野の関係も、さらに見えてくるようにも思われるからである?!

なお、「出雲大社」は、ある時期(まで?)、件の「スサノオ」を主祭神として祀っていたという?!この事実?は、別の意味で重要である?!何故なら、「スサノオ」と「大国主命」は(義理の?)親子、あるいは6世孫?の関係とされているが、とにかく、これはよく知られていることであるが、現「出雲大社」の本殿裏には、(末社として)「素戔社そがのやしろ」があり、そこには「スサノオ」が祀られているのである(→「蘇我氏」との関係が、そこには埋め込まれている?!)!

しかも、その後先であるが、物部/尾張(前方後円墳=日神・龍神信仰/前方後方墳=火神信仰=手焙型土器勢力)は、多分?吉備から出立していると考えられるので、地勢的にも、尾張(熊野)は出雲の方が先で、その後(葛城・高尾張を経由して?または、その逆かも?)、紀伊熊野、そして伊勢、尾張(熱田)というように流れていったのではないかと思われるのである?!

ただし、それは、おそらく貴重な鉱物資源を求めて、そしてまた、鉄の生産・加工のための木材を求めての、新天地・開拓地への移動・進出であったことであろう?!そして、それを支えた(協力した)のが、もともとは海人族の一派であった、同じ出雲・山陰?からの「忌部氏」であった?!船による移動は、彼らには容易なことであった(彼らは、徳島県や千葉県等に、淡路・阿波・安房・粟等の名を残している?!)??

最後になるが、この「(出雲の)熊野大社」と、多分その対とも言える?「出雲大社(杵築大社)」には、今ではかなり珍妙にも思える?関係があるようである!それは、「鑽火さんか式」(亀太夫神事)と呼ばれるものであるが、その儀式は、「出雲大社」が、「国造」の代替わりの時、「熊野大社」に「燧ひきりうす・燧杵ひきりきね」(火を熾す道具)を借りるという神事であり、その際、「熊野大社」の下級神官「亀太夫」(本当は重要な役職?)から、さんざん嫌味や小言を言われながらも、それに絶えて、その神事を全うするというものである!

ちなみに、「出雲国造」は、唯一人（大国主と共に？）、その時の「火」を使った食事をし続けるということである！元来、「出雲国造」の役目（「大国主」を封じ込め、祀ること！or 偉大な祖先である？「大国主」を祀ること？）は、東部の「熊野大社」（本家？）にあったが、それを、出雲国造家（分家？）が、西部の「出雲大社」（杵築←「神門臣氏」支配地！）に移り、大和（「高天原」勢力）の指示によって、それを代行した（乗っ取った？）?!ということは、「出雲大社」（の社領）は、もともとは、在地の「神門臣氏」の聖地であったかもしれない?!

それはともかく、「出雲大社」（出雲国造家）には、「形式的には、（熊野大社に）頭が上がらない関係があった」ということである?!なお、これに関わって、「出雲大社」には、「身逃^{みにげ}に神事（神幸祭）」という、これもまた珍？神事があり、そこにも、「出雲大社」（国造家←大和）と「熊野大社」（スサノオ・大国主←尾張氏？）の、まことに奇妙な関係が埋め込まれているようである?!

その関係は、天皇即位の儀式、いわゆる「大嘗祭」にも組み込まれているとされるが、「出雲・根の国系」（←熊野・尾張？）の「火」、そして「大和・高天原系」の「日」という関係もあり、その相補関係（裏表？）が、伊勢神宮の、「内宮」の「日」、「外宮」の「火」ということにもなっている?!

9 新たに始める「古代史の旅」！「こんなことが言える？-Part 2-」に託すもの?!

(1) 「こんなことが言える？-Part 2-」として！

突然ではあるが、先号（8）で、この新シリーズ「こんなことが言える？」（Part 1）を、ある意味終えることにした！

新たな位置づけ（思い?）で、私なりに、「これについては、かなり確かなのではないか?」と思われる事実?や関係等を提示してきたのであるが、結果的には、なかなかそうもいかなかった（その意味では、前シリーズとあまり変わらない?）?!

原因は、いくつかあるが、ささやかではあるが、その度に追加（参照）している、新たな情報（多くはネット上の研究成果?）に惑わされ?、「全体（確たる真実?）が掌握（説明）出来ていないのではないか?」（という思いが、一方で重くのしかかって来ている?）ということである?!本当に難しいものである?!

今更ながら、古代史解明の困難さ・辛さ?を痛感する次第でもある?!改めて、怖気づいているのかもしれない?!

それにしても、本当に膨大かつ複雑（怪奇?）な情報（研究成果?）が、ネット上も含めて、多様に存在しているものである?!そういうことは、ある意味十分に織り込み済みであったわけではあるので、ここでも怯むわけにはいかないのであるが、いずれにしても、そのためには、さらに、かなりの戦術転換が必要である?!

そういう思いで、以降は、新たな視点・スタンスを見出し（変え?）、同じように「こんなことが言える?」というテーマではあるが、これまで扱ってきたテーマも含めて、例えば「こんなことはあり得ない」とか、「これだけは、やはり明らかなのではないか」と思われる話を抽出し、そこでの展開を下に、より大きな?知見や提案をまとめ（Part 2として）、固めていきたい！

ということである（これがまた、真のオリジナリティともなる?!）！

(2) 改めて、「こんなことはあり得ない!」「これだけは、やはり明らかなのではないか!」という話について

ということで、改めて「こんなことはあり得ない!」「これだけは、やはり明らかなのではないか!」というような話を抽出すると、次のようなものがある?!

ただし、「神話」や、例の「聖徳太子」の「超人性?」のようなものは、ここでは論外とする！何故なら、それらは、もともとが「あり得ない話」であるからである！

なお、「聖徳太子」については、「乙巳の変」（645年）以降の、（天智・）持統・藤原体制が創り出した、蘇我氏の正当性・正統性を隠蔽するための虚像（カラ

クリ?)であり、それもまた、本来「あり得ない」話なのである?!

しかるに、まず、その「あり得ない話」で真っ先に思い出されるのが、天智（中大兄皇子）と天武（大海人皇子）の関係である！彼らは、舒明と皇極（斉明）の子で、実の兄弟とされるが、その兄（天智）が、弟（天武）に、自分の娘4人を嫁がせるということは、いくら政略的なものがあったとしても、絶対にあり得ない（例え1人であっても?!）！

もし、そういうことがあったとすれば、まったくの他人か、せめて（いくつか説があるように）、二人が異父兄弟であった（しかも、天武の方が年上?）としか考えられないのである（この場合、「天武」として一番可能性があるのは、母親の前夫で、蘇我系の「用明天皇」の孫の「高向王^{たかむこのおおきみ}」との間の子「漢^{あや}皇子」である?!）?!

次は、天皇や謎の人物、武内宿禰の年齢が遥かに100歳を超えて描かれているが、例えそこに「2倍年歴?」（春と秋で年を数えること!）が盛り込まれていたとしても（実際、それはあったし、そのことが反映されているかもしれない?）だが、それは、全員には該当しない?）、武内宿禰にあつては「300歳前後?」（複数あり!）とされるなど、そういうことは絶対にあり得ないのである?!

わざとそうしたのか（本当は、実在していないことを示した?）、伝説上の話をそのまま取り込んだのか?、その理由についてはよく分からないが、（後世）明らかにおかしいと分かることを、何故したのか?!

ちなみに、初期のそれは、いわゆる「神武天皇」の事績を出来るだけ古い時代に持っていきたいがために（BC660年）、ある期間の人物群の年齢が、それぞれ引き伸ばされたということではある?!

また、「これだけは、やはり明らかなのではないか!」と思われる話としては、次のようなものがある?!

例えば、中国史書においては、既に107年に「倭国王帥升」という表記があり、「倭国」という、幾つかの「国々」(30余国?)のまとまりがあつたことが認識（了解）されていた。他方で、「倭人」とされるものが、その国（倭国）以外にも種々いたことも、併せて認識（了解）されていた。

ということは、「倭国」というものを、常に、唯一不変の「単独国（倭人国）」と見なすことは（「版図」の変動はあつたにしても?）、おかしいということになる?!

このことはまた、その後の、(二つの?)「倭国」あるいは「倭国」と「日本国」の併存（並立?）があり得た（本当にあつた?!）ということ、かなりの蓋然性でもって受け止めなければならないということになる?!

(3) いずれにしても、文献資料から事実?を捉える場合、かなり大きな視点（大枠）で捉える他ない！

さて、以上のことも含めて、文献資料から事実？を捉える（推察する？）場合、結局は、かなり大きな視点（大枠）で捉える他ない！

何故なら、そこには、個々の著者の思惑、事実誤認、そしてまた、その人が参照・参考にした報告書等の事実誤認、作為（嘘や誇張も含めた？）等による、意図しない事実誤認、さらにまた、後世の誤写等による事実の改変？等があるからである（しかも、それ自体が実証出来ない?!）。

したがって、それはまた、ある意味正しい？限界ではあるので、その限界を適切に踏まえて、まずは大きな事実？を掴む必要があるということにもなる?!つまり、「大きな整合性」の中で、事実？を考察することが重要であるということである?!

例えば、そこに示されている地形・地勢や位置関係等については、今なお、（現物・現状が）そこにあるのであり（多少の変動はあろうが?）、その（時点の）記述に違和感、不正確さがあるものであっても、後は、そのことを踏まえて、冷静かつ総合的に事実（そこにある関係・状態!）を見極めていくことが重要だということである！

繰り返すように、そうしたことに関する記述や情報は、事実誤認あるいは多少の誤差はあるものの（例えば方位、距離、日数等）、しっかりとそのことを受け止めれば、それに基づく大枠（の事実!）を見定めることが出来るということである?!

それこそ、「海を渡る」とかといった場合には、必ずそこには「海」があり、その向こうには、必ず別な「陸地（島も含めて!）」があるのである！

ここで思い出されるのが、以前にも書いたように（「さらなる真相を求めて～続・『古代史の旅』Part 1の4」）、例の「魏志倭人伝」を文字通り読めば（方位・日数等）、「邪馬台国」は、はるか南方海上に出てしまうという指摘があるが、実際には、その（陸続きの!）南（確かである!）には「狗奴国」があるのであり、方位や距離の読み込みには限界（無理）があるのであるが、両国？が、実際に存在していたことは間違いないのであるから、そのことを前提にして、各種の情報（記事）を整合させる必要があるということである！

なお、同じ「魏志倭人伝」においては、「奴国」の東隣の「不彌国」の東で、海を渡れば、また別の倭人がいる（国がある?）という記述から、少なくともその当時は、「倭国」（の版図）は、九州（筑紫）島を出ることはないのであり、邪馬台国（女王国）自体も、その限りにおいて、近畿（大和）にはない?ことは明らかなのである?!

もちろん、これについては、たったこれだけの論証?で、あの永遠の?「邪馬台国所在地論争」に終止符を打とうなどとは言わないが（失礼にも程があるので!）、少なくとも「九州か、近畿（大和）か?」というような、（地理的にも

おかしい?) 単純な二者択一論争とは、きっぱりと訣別した方がよいのではないかということは、言っておいてもよいのではないだろうか?!

一つの事実(情報)が、「そのことは絶対にあり得ない!」ということを示すものであれば、たとえ他のことが妥当であっても、やはり「あり得ない!」のである?!逆に、「絶対にある!」ということを示すものがあれば、他のことが何とも言えないものであっても、「ある!」のである?!

ただし、後者の方は、実際には、なかなかそのようにはならない?!ほとんどが、実証が難しいということである?!

(4)ということで、「倭国併立あるいは倭国併呑」のスタンス(事実?)から、全体を捉え直すことは必要である?!

ところで、この話は、ずーと後の話となるが、中国の『旧唐書』(945年)の、「倭国伝」と「日本国伝」の併記ということにも関係してくる?!

すなわち、当時(までは?)、中国(唐)は、いわゆる「倭国」が、「倭国(九州)」と「日本国(近畿)」に分かれている、あるいは「倭国(九州)」の版図の中に、(新たな?)「日本国」が存在している(生まれている?)というように認識(了解)していた?!

しかし、その後『新唐書』(1060年)では、「日本国伝」に一本化されているので、その間(認識変化の過程?)、倭国(九州)が消滅した、あるいは、その「倭国(九州)」の版図が「日本国」となった、すなわち両国の立場が入れ替わった、あるいは「倭国(九州)」が「日本国」に併呑された?ということ(事実?)を認識、承認したということである?!

ただし、その時の認識・承認状況(の説明)は、かなり不正確な(怪しい?)ものであったことは、よく知られる通りである?!

しかしながら、これに関わっては、今読んでいる『ここまでわかった!「古代」謎の4世紀』(『歴史読本』編集部編、(株)KADOKAWA、2014年)で紹介されている最新?の研究成果についてであるが、それらが、まったく中国史書に記されていない「謎(空白?)の4世紀」、そして突然再開?された、「謎?の5世紀」の記述、すなわち「倭の五王」についての記述(『宋書』等。ちなみに、それに対応する記事が、今度は逆に我が国の史書(記紀)には見えない!)が、上記の「倭国併立→倭国併呑?!」の事実?とまったく相応しない(考慮されていない!)ということが、改めて気になるということにもなる?!

すなわち、そこでは、3世紀末?の台与以後の「倭国」の実情が中国史書に載っていない(遣使等の交流がなく、事実上情報がなかったか、それとも、本国においては、そういうことをまとめられるような状況ではなかったか?)、そしてそれが5世紀になって、突然再開?されるということであるが、ここで言いたいことは、これが定説なのであろうが?、「倭の五王」を、「記紀」が示す、そして

それを、近畿（大和）「倭国」の天皇群として、無前提に、しかも無理矢理対応させている？、まさにそうした姿勢に問題があるのではないかということである！

結論的には、「讃＝履中、珍＝反正、済＝允恭、興＝木梨輕皇子、武＝雄略」ということが示されているのであるが（足立倫行氏担当部分）、果たして、これでよいのか?!ここに、上記の「倭国併立あるいは倭国併呑」の（状態の）可能性を踏まえた視点・アプローチがあるのかどうかということである?!

ちなみに、そこでは、その「倭の五王」に対応させた、5世紀の大阪河内の巨大天皇（大王）陵、すなわち（年代順に）「讃→誉田山古墳（現応神天皇陵）」「珍→大山古墳（現仁徳天皇陵）」「済→市野山古墳（現允恭天皇陵）」「興→土師ニサンザイ古墳（現陵墓参考地）」「武→岡ミサンザイ古墳（現仲哀天皇陵）」の比定も紹介されている！

しかしながら、やはりこれらは、私にしてみれば、我が国側の史料（記紀）に、ある意味盲目的に？中国側の情報を当て嵌めたもので（それしか考えられないということであろうが?）、当時の倭国の実体 or 実態（二朝並立→九州倭国と近畿倭国?→その後、その関係は変容し、最後は近畿倭国（→日本国））に統合された!）を無視している（考慮していない?）?!本当に、それでよいのかということである?!

中国・唐の時代の認識及びその変更?という客観的事実?があるにも拘らず、それらと結びつかない解釈（解明）は、たとえ内なる整合性を得るものであっても、それを含む全体としては、やはりおかしい（真実ではない?）解釈（解明）になっているということである?!

10「伊勢神宮の謎？」に、本格的に挑む?!それが解ければ、一体何が分かるのか?!

(1)伊勢神宮の多くの謎?!だが、その総体（骨格?）は、史実解明の「スクリーン」or「解説書」となる?!

次に、ここで、いわゆる「伊勢神宮の謎？」に、本格的に?挑戦してみたいと思う?!

というのも、「伊勢神宮の謎？」は、個々には種々雑多に存在するが、一方で、それらの「謎？」の総体（骨格?）を抽出していけば、私の古代史の旅?も、それこそ飛躍的に?進展するかもしれない?!そして、「史実？」に、かなり接近出来るかもしれない?!そう思えるからである!

極論すれば、「伊勢神宮の謎？」は、我が国古代史の「真相」or「重要部分」を映し出す、ある種の「スクリーン？」or「解説書？」となるのではないかということである?!

しかるに、やはりその最大の「謎？」は、何故、奈良・京都（天皇居住地）から遠く離れた「伊勢」という地に、皇室の祖先神「天照大神」（「内宮」）が祀られているのか?

そしてまた、何故、そこに、さらに遠くの、丹後国（京都府北部）「籠このの神社」の「豊受大神」（「外宮」）が祀られ（呼び寄せられ!）ているのかということであるが、仮に、事実?がそうであったとしても、そこには、深い、あるいはかなり複雑な理由（背景）があったからだとしか考えようがないのである?!

ましてや、一方で、「園そのの神（大物主神?）」「韓から神（大己貴おおなむち命・少彦名すくなひこな命?）」という、（現）「皇室」にとっては重要な神々（本来の祖先神?）が、別（→皇居内部!「園韓神社そのからかみのやしる」）に祀られていた（る?）にも拘わらずである?!

その真偽・経緯も含めて、そこには、何とも不可思議な光景（構図?）があるのである?!

なお、その「園韓神社」の祭神名は、『大倭（和）神社註進状』（←倭直やまとのあたい氏!実は同氏は、「籠神社」と密接に結びついてもいる?!）に書かれているものであり、一般には、そのように理解されているものである?!

ということは、そこには、かの出雲（「出雲大社」、「熊野大社」、ひょっとしたら「諏訪大社」も?!）との関係も、改めてクローズアップされてくる?!

何故なら、彼らはすべて、その「出雲」に関わる「神」であり、以前にも述べたように、出雲には（も?）、彼らに関わる多様な「謎?」が存在するのであり、言わば「お互いの謎?が結びついている?」ということであれば、それらも含めて、その「謎?」の全体像（骨格?）を解明しなければならないということにもなる?!

しかもそれは、おそらく「倭の五王」や、その後の王権？の推移とも大いに関わってくる（「神功皇后」や「武内宿禰」、そして「応神」や「継体」、さらには「欽明」等が絡んだ、「倭国」と「日本国」の二朝並立、百済王族の参画？等?!）?!

これらが、我が国古代史解明の根幹部分？でなくして、何と言おうか?!

そこで、まずは、この謎？解きは、持統天皇以後、明治天皇が参詣するまで、歴代の天皇が、自らの始祖神（「天照大神」）を祀る「伊勢神宮」を参詣していないというのが、冷静に？捉えてみれば、「実は、そのこと自体が、絶対におかしい（怪しい?）!」というところから始まることになる?!

何故なら、「実質の初代王」とも目される第10代「崇神」（初肇国天皇はつくにしらすめらみこと→伽耶・新羅系倭人?）の時に、宮中に居た（共殿同床）「天照大神」は、そこを追い出され（畏怖 or 忌避された?!これ自体は、もう一人の「大物主」も同じ!）、各地を転々とし、最後には伊勢の地に落ち着いたという!

裏を返せば、「崇神天皇」以下は、その後裔ではないということになる?!ならば、実際はどうであったのか?

ちなみに、初代の「神武天皇」も、「始馭天下之天皇はつくにしらすめらみこと→呉国系倭人・海人族?」とされているが、改めて、これらはどういうことを意味するのか?!

さらに、伊勢神宮（内宮）の「ご神体」は鏡（「八咫鏡」→天照大神?）とされるが、（同格の?）外宮では、それが不明だという?!しかも、「鏡」は、同神宮（内宮）内にあるというのが、明確に見た者は誰もいないという?!

現在、その「形代^{かたしろ}」（レプリカ（模造品）ではないとされる!）が皇居にあるとされるが、この、いわゆる「三種の神器」（「鏡」「劔」「（勾）玉」）が、どこに、どのようにあり、それが、何故そのようになっているのか、その全体的な関係性（「整合性」）は、まだまだ掴めていない（これについては、一応、個別には考査したが!）?!

他にも、多々あるが、このように、伊勢神宮（「天照大神」）には、実に多くの謎？が横たわっているのである?!

(2)「内宮（皇大神宮）」と「外宮（豊受大神宮）」の奇妙な？関係?!それが示す、驚きの（本当の?）関係とは?!

ところで、一般には「太陽神」は男神とされるが（「日光感精」等）、そして、いわゆる「斎宮^{さいぐう} or いつきのみや」の存在（「伊勢神宮の祭神に仕える未婚の皇女または王女で、斎王、御杖代^{みつえしろ}とも言われる。崇神天皇の代、皇女豊鍬入姫が、大和笠縫邑に天照大神を祀ったのに始る。天皇の即位ごとに新任された。75代続き、後醍醐天皇の皇女祥子内親王を最後として、以後廃絶した」とされる。）、

さらに、「遷宮」時の「物忌み」（幼い少女?）の関わり、そしてまた、「豊受大神」（外宮）の遷座の時の逸話（天照大神が寂しいから呼び寄せた?）も含めて、

まさしく「天照大神」(内宮)は「男神」のはずなのであるが、実際は、「(太陽神)としての!」「女神」なのである!

一体これは、どういうことなのか?しかも、その「天照大神」は、最初「大日靈貴 オオヒルメノミチ (巫女)」であったというではないか?!これは、どう見ても「変である(怪しい)」?!どこかで、「誰か(男性)と誰か(女性)が入れ替わった?!」ということしか考えられない?!

しかも、一方の「豊受大神」(外宮)も、後に触れるように、「男神」という見方もあるが(坂本貴和子・渡辺英治『ロマンで古代史は読み解けない 科学者が結ぶ、地図と陰陽』 彩流社、2018年)、「女神」であることは間違いないのである?!

このように、「伊勢神宮の謎?」と言えば、「内宮」と「外宮」の関係、そして、「天照大神」と「豊受大神」の関係(「性別」も含めて!)が、その「骨格?」なのである?!

ちなみに、二社は、まるで双子(同格!対・対称!)のような関係であるらしいが(造りも含めて!これは、「道教」、その後の「陰陽思想」の影響だということらしい?)、そもそも何故、そのようになっているのかである?!

祭神や創建の経緯等も含めて、この二社の儀式や行事の在り方等については、桓武天皇の時に作られた、「皇大神宮儀式帳(内宮)」「止由氣宮 とゆけぐう 儀式帳(外宮)」「(804年)に定められたようであるが、そこには、一体どのような経緯(決着?)があったのであろうか?!かなりの読み込み(こじつけ?)があったことは、確かであろう?!

ここに、この二社の不思議な関係を象徴する言い伝え?がある?!「外宮先祭(拝?)」ということであるが、それは、伊勢神宮へのお参りの際には、「先に外宮に参る!」のが、本来的なあり方だということなのである?!

少し先走りすると?、その理由(真意)は、実質的には、「内宮」より「外宮」の方が「格上」(本来神?)であるということ?!あるいは、形式的には?、「外宮」の方を尊重しなければならないということかもしれない?!

これについては、当地の「渡会 わたらい 氏(外宮)」と「荒木田氏(内宮)」の相克?の話が、そこには伏在しているようであるが、要は、渡会氏(外宮)の方が、その伊勢地方の、元々の支配者(先住者)であり、伊勢神宮の社地は、その「渡会氏」のものであったということである?!

そして、実は、その「渡会氏」は「磯部 いそべ 氏」であり、その「磯部氏」は、件の「海部 あまべ 族(氏)」の一派でもある?!

ここに、大和と伊勢と丹波(後)、そして(ならば?)、越・出雲(族)との関係が(も?)、顔を出してくることになるのである?!

(3)大胆な推理?!本来、「三輪」と「伊勢」は同体?!であれば、それは、一体どういうことを意味するのか?!

これに関わっては（多分そうである？）、別に、さらに興味深い（面白い？）話がある！

持統6年（692年）3月、天皇の伊勢行幸計画が持ち上がり、それに対して、時の中納言「三輪高市麻呂^{たけちまろ}」という人物が猛反対したということである?!農作の繁忙期だからという反対理由だそうであるが、彼は、高位・中納言の職を賭して、最後まで抵抗したというのである！

その反対理由自体は、いかにも嘘臭い？が、「大物主」の子孫の「三輪氏」が、職を賭してまで反対したということは、並々ならぬ理由が、そこにはあったということである?!

国家祭祀の中心地移動（「大神神社」→「伊勢神宮」）への反対という、実しやかな理由も、もちろんあろうが、少し穿った推察を行えば、「内宮」のあり方を替え（祭神を入れ替え→誰かを昇格させ？）に行った?!

つまり、それまで祀られていた「天照大神」と、「記紀」が仄めかす?）「大日靈貴」（実は持統本人?）を入れ替え（昇格させ?）、彼女を「女神」としに行く（すり替え→神格化!）?!事実、持統は伊勢に行っているのであるから、それによって、「天照大神が女性神となった!」ということは、当然考えられることである?!

まさに、そのことを、本来の皇統にある?（だから物が言える?）「三輪氏」が、是が非でも止めさせようとしたということである?!

一方、「外宮」にも、これに直結する? 奇妙な真実? が埋め込まれている?!

改めて、外宮は、「豊受大神」という、多分女性神? が祀られているのであるが（「内宮」の御饌津^{みけつ}神＝食事係として招かれている! 何でも、天照大神が寂しいからという理由で連れて来られたらしいが、これは、どう見たって、女神の扱いである?! しかも、元居た（元伊勢の）「籠神社」でも女性である?!）、神社の祭神の性別を（も?）表すとされる「千木^{ちぎ}」（屋根にVの字に張り出した板?）と「鰹木^{かつおぎ}」（千木に組み合わされた丸太?）の形（配置）が、何と「男性仕立て」となっているということである！

もちろん、「内宮」は、「女性仕立て」となっているらしい! 要は、「千木」は、内宮では「内削ぎ」、外宮では「外削ぎ」、「鰹木」の数は、内宮は偶数、外宮は奇数になっているらしい（「男女の対性」が維持されている?!）!そして、それらは、それぞれ「女性性」「男性性」を表すということである?!

改めて、「内宮」と「外宮」には、他にも幾つか特徴があって、すべての関係が「対称（対）」となっているというが、これは、まさしく両社が、いわゆる「陰陽思想」で貫徹されていることを物語るものではあろう?!

だが、私には、この女性性と男性性だけについては、どうしても腑に落ちないのである?!これ（千木と鰹木）が動かぬ証拠ということで、外宮の「豊受大

神」を男性神と断定する向きもあるようであるが、もしそれが（も？）、上記の「持統の伊勢行幸の時の画策」であったならば、「千木・鯉木」の入れ替え（逆転？）は、かなり蓋然性のあることだったと考えられるのである（人間の工作物であるので、そういうことは可能である?!）?!

だからこそ、三輪高市麻呂は、その暴挙（あってはならないこと!）を止めさせるために、職を賭して諫めたのである?!

翻って、その「三輪（→大神^{おおみわ}）氏」であるが、同氏は、「崇神」に招かれた、「大物主」の子（孫）とされる「大田田根子^{おおたたねこ}」（三輪山の^{大物主}を祀っている「大神神社」の初代祭主!「意富多多泥古」「大直禰子」という表記もある!「大（多）」氏の直系ということか?）の子孫である!

そして、その「大物主」は、出雲の「大国主神」（様々な異称あり!）の「和魂^{にぎみたま}」とされているが、彼は、最初に大和に進出していた（政権を樹立した?）和珥^{わに}族（前方後方墳勢力?!）、またはその一派（吉備→出雲?）の「多」（大・意宇・富・太）氏の頭領?であった（ひょっとしたら、彼は、「記紀」においては、「神武」の、大和での長男「神八井耳命」に投影されているかもしれない?!）?!

であれば、その（「神八井耳命」の末裔!）多氏の九州進出（回帰?）譚（龍蛇の活躍?!）、そして、三輪氏の九州での存在も、大いに説明がつく?!

「大物主」は「龍（蛇）」なのであり、三輪山頂には「高宮^{こうのみや}神社」があり、「日向御子」という祭神が祀られてもいた（る?）?!

その祭神が、まさしく「龍王（龍蛇神）」であり、「大物主」（龍王山・太陽信仰の象徴?）でもあった?!そして、彼が、きっと当初の「天照大神」であった?!

ここにおいて、今でも秘かに?語られる「三輪と伊勢は同体!」ということは、実は、こういうことなのでもある?!

11「丹波（後）」に、「伊勢神宮」の原型？がある?! 本当の謎？は、そこにある?!

(1) 注目すべきは「籠この神社」?! そこに広がる「海部あまべ氏」の怪?! 重要人物「彦（天？）火明ほあかり命」とは?!

先号（10）で、「大和・三輪（大物主）」と「伊勢（天照大神）」の、本当の（本来の？）関係を見つけ出してしまった?! それが、「伊勢神宮の謎？」の中核部分？ということであったが、そこには、必然的に？、もう一つの重要な視点が付け加わってくる?! それは、他ならぬ「大和⇔伊勢と丹波（後）の関係」である?!

ただし、その関係は、既に「伊勢神宮（天照大神）」と「籠神社（豊受大神）」との関係ということで、おおよその見当はついている?! しかし、多分？そこには、記紀神話の「高天原系」と「根の国系」の相克、ひょっとしたら？、「山祇やまつみ→山の霊」と「海神わたつみ→海の霊」の相克の構図も、改めて見えてくる?! そんな予感？がするのである?!

果たして、そこには、一体どのような史実？が横たわっているのであろうか?!

ということで、まずは、その丹波（後）の「籠神社」自体について、少しまとめておきたい!

一応ウィキペディアによると、「式内社（名神大社）、丹後国一宮。旧社格は国幣中社、現在は神社本庁の別表神社」とあり、「元伊勢の一社で『元伊勢籠神社』とも称し、また『元伊勢根本宮』『内宮本宮』『籠守大権現』『籠宮大明神』とも称する。現在まで海部氏が神職を担当している。丹後国総社は不詳だが、当社が総社を兼ねたとする説がある。」とされている。

早速この中で気になるのは、別称のうちの「元伊勢根本宮」と「内宮本宮」という名前であるが、前者は、いわゆる、各地にある「元伊勢」の「総本締め（出発地?）」ということであろうから、それはそれで合点がいく?!

だが、どうにも解せないのが、後者の「内宮本宮」という別称である?! もし、その「内宮」が「伊勢神宮の『内宮』」を指しているのならば、当然？「伊勢神宮の『外宮』」でなければならない?! 伝承等の、何かの間違いなのか?! それとも、敢えてその名を出しているのかである?!

ちなみに、残りの別称は、いわゆる「神仏集合」後の命名であろう?!

それはともかく、そこで気になってくる祭神であるが、主祭神が「彦火明ひこほあかり命」で、別名「天火明あめのほあかり命」「天照御魂あまてるみたま神」「天照国照あまてるくにてる彦火明命」「饒速日にぎはやひ命」ともいい、社家「海部氏」の祖神とある。

ただし、この主？祭神については諸説があり、「伊弉諾いざなぎ尊」や「天水分あめのみくまり神」ともあるようである?! ちなみに、相殿神として、「豊受大神（御

饌津^{みけつ}神」とも)」「天照大神」「海神^{わたつみのかみ} (社家「海部氏」の氏神)」「天水分神」が配祀されているという?!

ここでは、「天照大神」という相殿神も祀られているが、これもまた、奇妙?である?!

もし、それが、件の「天照大神 (伊勢)」であるならば、いみじくも、この「籠神社」には (相殿神ではあるが!)、伊勢神宮と同じ、「天照大神と豊受大神の取り合わせ」があることになる (→「天照大神」と「豊受大神」が同居?している?!) ?!

ならば、それは、「伊勢神宮」の原型なのか?! どうにも不可思議?である?!

ところで、ここでは、そのことはひとまず置いておくことにして、まず主祭神が「彦火明命」(「天火明命」等)であれば、後に述べるように、例の「物部氏」と同族で (『先代旧事本紀』『天孫本記])、しかも、「尾張氏」も、その始祖を同じくしていることになる (『先代旧事本紀』『国造本記]) ?!

ということになれば、まさしく「海部氏」は、初期大和王権を形成した「物部氏」や「尾張氏」と同族であったことになる (ただし、これについては、以前触れたことがある!) ?! しかも、ここでは、「海部氏」の方が、それらの本家 (本流?) だというような趣もある?!

なお、同社伝によれば、「現在伊勢神宮外宮に祀られている豊受大神は、神代は「真名井^{まなひ}原」の地 (現在の奥宮「真名井神社」) に鎮座した」という。その地は、古代「匏宮^{よさのみや}」(「匏^{ほう}→よさ」は「瓢^{ひさご}」のこと! →与佐宮/吉佐宮/与謝宮/久志濱宮^{くしはまのみや}) と呼ばれ、「天照大神」が4年間営んだ (滞在した?) 元伊勢の「吉佐宮」にあたるとされている。

そして、白鳳11年(671年)、彦火明命から26代目の「海部伍佰道^{いほじ}」が、「祭神が籠に乗って雪の中に現れた」という伝承に基づいて社名を「籠宮^{このみや}」と改め、「彦火火出見命」(海神 or 火の神?) を祀ったという。

その後、養老3年(719年)、真名井原から現在地に遷座し、27代「海部愛志^{えし}」が、主祭神を海部氏祖の彦火明命に改め、豊受・天照両神を相殿に祀り、天水分神も合わせ祀ったと伝えたとある。

(2) さらに謎?めく、「籠神社」の奥宮「真名井神社」?!

ところで、この、「豊受大神」(「彦火火出見命」、そして「彦火明命」も?!) が最初に祀られたという、「籠神社」の奥宮「真名井神社」(別称「豊受大神宮」「比沼真名井^{ひぬまひ}」「外宮元宮」「元伊勢大元宮」) は、件の「豊受大神」を主祭神として、天照大神・伊射奈岐^{いざなぎ}大神・伊射奈美^{いざなみ}大神・罔象女^{みづはのめ}命・彦火火出見尊・神代五代^{かみよいつよ}神が祀られているとされる?!

ここでは、「豊受大神」は、別名天御中主^{あめのみなかぬし}神・国常立^{くにとこたち}尊・御饌津^{みけつ}神とも云われ、「その御頭現の神を豊宇気毘女^{とようけひめ}神・豊受比

売。また食物を司るという属性の類似性から、倉稻魂命／宇迦之御魂^{うかのみた}ま・保食神^{うけもちのかみ}・大宜津比売命^{おおげつひめ}なども同神」とされている?!

何とも混乱を招く名前群ではあるが、有名な『丹後国風土記』の「天女伝説」に登場する豊宇賀能売^{とようかのめ}神も、「豊受大神の属性の神ですが、伊勢神宮外宮の主祭神の豊受大神とは別神で、豊宇賀能売神は御酒殿の守護神である「御酒殿神」として、伊勢神宮の所管社に祀られています」とある?!

何とも分かりにくい（支離滅裂な?）「社伝」の説明?であるが、いずれにしても、最後の「伊勢神宮外宮の主祭神の豊受大神とは別神である」というところに、かなりの違和感（無理?）が生じることは明らかである?!

何故なら、そうした属性をもつ「外宮の豊受大神」（御饌津神）が、他ならぬ「伊勢神宮」の「外宮」において、丹波（後）の「籠神社」（←「真名井神社」）から呼び寄せられたというではないか?!一体、話はどうなっているのか?!

しかも、同社は、別称として、「豊受大神宮」「外宮元宮」「元伊勢大元宮」を名乗っているではないか?!伊勢に連れて来られたのが、この豊宇賀能売神という「女性神」でないとすれば（外宮「別殿」に祀られているということではあるが?）、もう一人の?（男性神としたい?）「外宮の豊受大神」とは、一体誰で、何のために連れて来られたというのか?!

何とも不可解な?「籠神社」、そして、その奥宮「真名井神社」なのである?!

もちろん、こうした神社伝承等は、その時々^{その時々}の権力者の意向（指示命令?）に左右され、本来の伝承や真実を隠したり、変えたりしたものであろうから（特に、鍵を握っている重要な?神社は?!）、その辺りを考慮して受け止める必要はある（換骨奪胎 or 毀誉褒貶等がある?!）?!生き残る?ためには、ある意味仕方がなかったとも言えるであろう?!

ただし、たとえそうであったとしても、その原型（史実?）は、どこかには残っている（隠されている?）ものである?!「籠神社」や、その奥宮である「真名井神社」は、まさにその代表的な神社なのでもある?!

(3) 改めて、「籠神社」「真名井神社」の伝承から見えてくる?「倭→大和」の建国とその実相（大枠）?!

ということで、ここでは、我が国古代史の解明の基軸は、単に「記紀」の記述や神社伝承等を鵜呑みにするのではなく、それらが、いつの、何の、あるいは誰（どの勢力）の事績についてのことを述べているのかを、可能な限り精査し（造作されていることを前提に!）、史実?であったであろうことを、考古学的知見や客観的な文献史料の解読結果と照合しながら（私の場合は、すべてが他の人の紹介や解説によるが!）、明らかにしていくということが求められるということになる!

そして、もし、そうした手続きによって、（より）整合的な事実の解明が得

られれば、さらに、次なる（より大きな）史実？の解明を行っていくということになる?!

なお、ここではほとんど遅きに失しているが、上で述べたように、古代氏族・勢力の移動・交流、そして衝突・攻防の足跡が、古代史の根幹を形づくっているのではないかという感触を改めて得たが、そこには、「朱（硫化水銀）→丹_に」というような鉱物資源を巡るものが原因であったということである（当然「鉄」もだが?!）?!

神社仏閣等に塗られている、あのけげげばしい「朱色の」屋根・壁！その「朱」が、古代では薬や顔料としても使われていたということ、改めて知った！それが、まさか、金や銀、ましてや「鉄」以上の価値を有していたとは?!

とにかく、それらを求めての古代の人々の動き（倭人が中心ではある?!）が、まさに王権を左右していたのである?!→蒲池明弘『邪馬台国は「朱の王国」だった』（文春新書）文藝春秋 2018年

そう、それらの所有・分配（今でいう「経済」）を牛耳っていた者が支配者となることは、ある意味当然なのである?!そして、その「朱」の産地の中心が、丹波（丹後）？、そして奈良から伊勢へ（そこには、「海部氏」→日本海勢力？が大に関わっていた?!）！

その伊勢を、後々の政権（持統・藤原体制）が乗っ取り？、そこを聖地とはしながらも、一方で無視していた?!これが、伊勢神宮に纏わる「謎？の骨格」ではないかということである?!

この間、多分「応神王朝」以降は、鉄器等の使用により、土地開発や農産物の増産による支配原理によって、王権が維持・拡大されていったことは言うまでもない?!そしてまた、それを「律令」という法制度で固定・発展させていったのが、蘇我氏や藤原氏といった「百済系」の人達であったことも、多分間違いないであろう?!

ということで、その最初の「朱の攻防？」は、「前方後円墳」の衰亡（「物部氏」の没落？）と共に終わるのであるが、それが、古代史解明の基軸となるのは、ある意味当然なのかもしれない?!

これについては、改めて次号で考察するつもりであるが、それは、弥生時代からの、いわゆる「渡来系勢力（倭人）」による「やまと」（「倭」「大倭→大和」「日本」）の乗っ取り・征服ということではなく、そこで生きる人々（最初は「縄文人」と呼ばれる人達!）との共存・融合（もちろん、その過程の一部では、殺戮や強制移動？もあったであろうが!）の中で、そうした歴史が繰り返されてきたということである?!この総体が、言わば、私達の「古代」だということである?!

最後に、もうお分かりだとは思いますが、実は、以上述べてきたことは、私をこ

の世界に誘った関裕二氏の「壮大かつ本当の？古代史」の解明仮説（もう、仮説ではない？）と同じになるのであるが、

藤原・持統体制が、直近の「蘇我氏体制」を滅ぼし（陥れ？）、皇統を奪取（新たに創出？）し、そこでの、自らの正統性・正当性を確立（公言？）すべく、「高天原（神話）」（ルーツは「伽耶」？）を創作し、「三貴子誕生→素戔鳴命の狼藉→天照大神の岩戸隠れ→素戔鳴命の出雲追放→出雲大国主命の天下統一？→出雲の国譲り→天孫降臨→海幸山幸物語」、そして「神武東征」へと続く、「高天原勢力」（直接には、「吉備」から出立した外来勢力?!そして、それに連なるとした「藤原・持統体制」）の台頭と支配？の過程を創出（演出？）したのではないかということである?!

したがって、「記紀」が描く物語（想定されている期間）は、実は、多分2世紀頃からのもので（纏向祭政都市の誕生あたり?!それは、奇しくも「魏志倭人伝」の邪馬台国・卑弥呼時代でもある!）、実際の史実?（書き物や言い伝え等による?）をなぞり（人物・勢力や彼らの事績をモデル・題材として?!）、作り上げられたものだということでもある?!

「伊勢神宮の謎?」とは、いみじくも、そうした過程の中で生じた、様々な、生身の人間・勢力達の、その時々動きや心情等を、それこそ「陰に陽に!」、形にした記念碑?であるのかもしれない?!

12 大和建国（3世紀末？）における「日」と「火」（の勢力）の合体、そして分裂?!

(1) 「日」（三輪→伊勢）と「火」（熊野→出雲）の対称性（相補性？）から見えてくる？その真実とは?!

ついに？先号（11）、先々号（10）で、「三輪（大和）」（大物主）と「伊勢」（天照大神）、そして「丹波（丹後）」（豊受大神）の、本当の（本来の？）関係を炙り出して？しまったのであるが、そこにはさらに、もう一つの重要（最重要？）な視点がクローズアップされてくる?!それは、他ならぬ、「日」（三輪⇄伊勢）と「火」（熊野⇄出雲）の関係であり、その「対称性（相補性？）」である?!

多分？そこには、「記紀」神話の「高天原系」（アマテラス）と「根の国系」（スサノオ）の相克、あるいは？「山祇（積）やまつみ→山の霊」と「海神わたつみ→海の霊」の相克？の構図も、改めて見えてくるであろうが？、それは、一体どういうことになるのであろうか?!

端的に、それは、そこにある「日」（の勢力）と「火」（の勢力）の合流・合体、そして分離・分裂の史実？ということであるが、

これは、以前述べたように、まずは「出雲」に進攻（一部融和？）した吉備勢力（龍王山・太陽信仰族？）の、その後の、二手に分かれた近畿・東海への進出において（山陰・日本海→琵琶湖・淀川・木津川ルートと山陽・瀬戸内海→河内→大和川ルート、そしてそれを結ぶ「河内湖→狭山池（ジャンクション？）」を使った?!）、再び「大和（三輪／纏向）」で合流した「前方後方墳（手焙型土器）勢力→火」と「前方後円墳（竜王山・太陽信仰）勢力→日」の、まさに「和合と離反（経済権益・権力闘争？）」の歴史を示すものではないかということである?!

ただし、その吉備勢力（敢えて言うならば、大和を建国した「物部勢力」？）は、その後、朝鮮半島南東部南伽耶（→北部九州・伊都地方→近畿）の「崇神」勢力、そして百済（→北部九州・秦王国→近畿）の「応神」、実は「継体」勢力、そして、その中間の？北部伽耶からの「神功皇后・武内宿禰」勢力（→北部九州・肥前/筑後地方→近畿）との和合・集散の過程で、かなり変質していった?!

なお、「前方後方墳」勢力は、例の「手焙型土器」を共伴するように（→「甕・甕みか」という名？）、おそらく「火」（読みは「ほ」？→火明ほあかり）の勢力であり、「前方後円墳」勢力は、「日」、まさに「天照御魂あまてるみたま」の勢力であった?!そしてまた、後者には、「水→龍神→罔象女みずはのめ神」も加わっていた?!もちろん両者は、「ひ」（「日」「火」）で結ばれており、また、それぞれは、「山祇（積）やまつみ→山の霊」と「海神わたつみ→海の霊」として、「霊み→ひ」で結ばれているのでもあった?!

ところで、確認であるが、「三輪流神道」（「奈良県の大神おおみわ神社を中心に成立した神道」の一派。鎌倉末期、三輪上人慶円が創唱したといわれ、室町時代に発達。

両部神道（神仏集合）思想から『日本書紀』神代巻を解釈し、天照大神・三輪大明神の同体説を唱え、民間にも広く普及した」とされる。）では、天照大神と三輪の神（大物主神）は同体で、しかも、本来は三輪の神が格上であるとされている?!

「同体」で「格上」ということが、一体どういうことなのかという、ある種の根本的な問題もあるが、単純に考えれば、「同一神ではあるが、祀る側の主体（氏族）が違う?」、あるいは「同族神ではあるが、別々の神である?」ということになる?!

ただし、いずれにしても、一方が、他方よりも「格上」（正統性・正当性がある?）ということであろう?!となれば、「三輪」が「伊勢」より、つまり、「大物主神」の方が、「（当初の）天照御魂神」より、「正統・正当」だったということである?!

ちなみに、三輪の「大物主神」は蛇（龍蛇神?）であり、実は、最初の?伊勢の「天照大神」も「蛇」であった（前者は、「勢夜陀多良比売」「活玉依毘売」あるいは「倭迹迹日百襲姫」＝箸墓古墳の主の逸話から!後者は、傍に侍る「斎宮」とのまぐあい?の後、そこには蛇の鱗が落ちていたという逸話から?!)?!これらは、いずれも、大和・伊勢の出雲族（にされた?）が、「龍蛇信仰」の部族・勢力であったことを示すものであろう（龍と蛇の混淆?←吉備から出た「龍王（山）信仰+太陽信仰」?!）?!

その後、天武天皇（大海人^{おおあま}皇子）が、「壬申の乱」（672 年）の途上伊勢に立ち寄り、「天照大神」を遥拝したとあるが（「天照大神」を国家的な祭祀のシンボルとして浮上させようとした?!）、大海人（皇子）は、（大）海部^{あま}族（養育氏族?）の縁戚者であり、伊勢は、その（大）海部^{あま}族の所縁の地、祖先の眠る土地であったため、そうしたのもあろう?!

ただし、そこは、例の「猿田彦^{サルタヒコ}」（元々は「出雲」の支配者?）所縁の地?でもあった?!すなわち、この「猿田彦」は、出雲の島根半島（「佐田^{さた}神社」）の主であるが、最後に、この「伊勢」の地（「猿田彦神社」!）で亡くなったとされている人物?である!

彼は、天孫「邇邇芸命^{ニニギノミコト}」の嚮導役?として「記紀」では描かれているが、「出雲の国譲り」（「高天原系」による「根の国系」の乗っ取り?!）の際の、（出雲側の）最重要人物（シンボル?）であったのかもしれない（藤井耕一郎『サルタヒコの謎を解く』河出書房新社、2015 年）?!

(2)「火」から「日」へ?!そこから生まれた「天照大神」?!持統・藤原体制が造作?した「万世一系」の神統譜?!

翻って、その伊勢（イト→イソ→イセ?）の支配者であった「渡会氏」（「猿田彦」の後裔?!）は、九州の伊都（「伊都国」）から各地に散った?海部族（→磯部^{いそべ}族）であろうが、彼らは、多分?朱（丹・硫化水銀）→水銀（薬・顔料）、金

(水銀メッキ→金銅)、鉄(砂鉄?)等の鉱物資源、そして木材等を求めて移動した「海人族」の一派であった?!そして、彼らの動きの途上には、アマ(ベ、ルベ)→天・海部・海士・安満・阿万、そして余部^{あまるべ}・余呉^{よご}等の名が残された?!

なお、これに関わっては、和歌山県の「伊都(郡)」あるいは「丹生^{にう}(津媛/津神社)」、さらには「丹(生)^{にゅう}谷→入谷→いりや?」といった名前が、各地に残されているが、彼らの動きを示すものであろう(蒲池明弘『邪馬台国は「朱の王国」だった』(文春新書)文藝春秋 2018年)?!

しかるに、件の渡会氏は、雄略天皇の時に朝廷に文書を出し、丹波(丹後)国の「比治の真名井」(籠^{この}の神社=元伊勢大神宮)にいる「豊受大神」を御饌津^{みけつ}神として招くことを進言したという(「止由気宮とゆけぐう儀式帳」)!その国は、まさに「丹後王国」とも言える強国?で(←鉄、朱の生産・販売?!)、その氏族が伊勢に(も)関係していたということである?!

先号で見たように、その「籠神社」の祭神は、主祭神が「彦火明^{ひこほあかり}命」、相殿神が「豊受大神」、外に「天照大神」「海^{わたつみ}神」(社家「海部^{あまべ}氏」の氏神)「天水分^{あめのみくまり}神」となっているようである!基本的には(根本には?)、「海神」を祖先神としていたということである?!

そこで興味をそそられるのが(先号では触れられなかった!))、「籠神社」の境内には、亀の背中に乗る「珍彦^{うずひこ}」(椎^{しい} or 棹^{さお}根津彦)の像もあるということである!この珍彦は、例の「神武東征」の折、天皇一行を豊予 or 明石海峡で先導し、後の大和の「倭(大和)国造」となった人物であるが、彼は、瀬戸内海を牛耳っていた?海人族(海部氏?)の頭領であった?!

その「珍彦」が、同氏の祖先だということか?!ということは、改めて「海部氏」の怪?は、奥深い?!ここでは余談?かもしれないが、この「珍彦」が、実は、かの有名な「浦島太郎(水江浦嶋子→網野神社)」(のモデル?)であり、そしてまた、「住吉大神(塩土老翁^{しおつのおじ}?)」でもあった?!さらにはまた、「天日矛」あるいは「武内宿禰」(→葛城氏・蘇我氏等)に仮構された人物だったのかもしれない?!

一方でまた、宇佐神宮の「比売大神(ひよっとしたら「台与」?)」が「豊受大神(丹後の「竹野^{たかの}姫」?)」であり、そして彼女が「神功皇后(息長帯^{おきな}がたらし姫)」とされ、それが「天女(羽衣)伝説」の天女(→白鳥→鶴?)のモデルとなったのかもしれない?!

ただし、こちらは、後の「息長氏(+秦氏?)」による造作かもしれない?!いずれにしても、それらが、場所、位置づけ、事績、名称等、様々に存在し、まったくの混沌(荒唐無稽な世界!)に投げ出されそうであるが、そこにまた、本当の真実が紛れ込んでいるとも言える?!では、いかなる真実か?!

翻って、(丹後の)海部氏は、「彦火明^{ひこほあかり}命」を始祖として、尾張氏や紀氏と同族とされているが(国宝「海部氏勘注系図」による)、また、その「彦火明命」は、物部氏の始祖「天火明^{あめのほあかり}命」(正式には?「天照国照彦火明櫛玉饒速日命」、通称「ニギハヤヒ」)と同一人物とされている?!そしてまた、その「天火明命」は、「天照大神」の子(素戔鳴命との誓約^{ウケヒ}による!)とされ、「5男神」の次男?(長男は「アメノオシホミミ」、すなわち「天皇家」の直系子孫!)とされている!

なかなかのキャスティング?であるが、要は、ここに、藤原・持統体制の壮大な神統譜造作の真髓(本音→目的)が透けて見えるということでもある?!すなわち、「火」と「日」の合一であり、「日」による「火」の「乗っ取り?」という筋書きである?!

(3)「記紀」、とりわけその中の「高天原神話」に隠された(託された?)、持統・藤原体制の思い(陰謀?)?!

以上のように、伝承かつ「記紀」神話のストーリーから、「大和(日本)建国」において、「海部族」が多大な貢献をなし(本当は、彼らの王権であった?)、丹波(丹後)や伊勢地方にも(他に、豊後、阿波地方も→「海部郡」の所在!)、その勢力を拡大していったが、何らかの理由で、その王権から追い出され(忌避され?)、その痕跡が消された?!しかも、大和の三輪も、基本的には同じ運命を辿った?!ただし、三輪の方は、その後呼び戻された?!

要は、物部氏(の主流⇔饒速日命の子・可美真手(宇摩志麻治) ^{ウマシマデ}(ジ))と尾張氏が組んで、大和を建国・拡大したのではないかということであるが、その彼らの離合集散の足跡は、かなり複雑ではある?!

しかしながら、そこに、おそらく「崇神」に仮託されている「伽耶勢力」が、吉備で「加茂族(南部九州勢力→「タケツヌミ」→神武のモデル?)」と合流し、大和に進出した?!これが、いわゆる「神武東征」のモチーフでもあった?!

いずれにしても、大和建国(3世紀後半)のプロセスにおいて、(北部九州?→)吉備の「太陽信仰・龍蛇神信仰」(「手焙型土器勢力」)が、まずは「出雲」に進攻し、出雲の饗応勢力と大同団結して、近畿・東海に向かい、その後大和に集結(「纏向祭政都市」の建設)、そして、その一部(「神八井耳」勢力)は、九州の方にも進出し(戻り?)、いわゆる「環濠集落勢力」(中国江南出身海人族・安曇族/銅鐸・巴形銅器祭祀・稲作)を駆逐していった?!

しかし、その後、(吉備の)「太陽信仰・龍蛇神信仰」(「手焙型土器」)勢力は、「太陽信仰」勢力(アマテラス→物部氏+海部氏・尾張氏?)と「龍蛇神信仰」勢力(スサノオ→出雲系?→和珥氏・三輪氏?)に分裂し、最終的には「太陽信仰」勢力(アマテラス→物部氏+海部氏・尾張氏?)が実権を握った(ように描かれた?)?!

そして、それらの整合性を図るために、「伊勢（神宮）」を「日」に、「出雲（大社）」を「火」に仕立てて、「日」と「火」の対称性（相補性）を企図した?! ただし、その後者の「火」の本源が「熊野（大社）」にあったので（火鑽杵・火鑽臼の所有!）、以前にも述べたような、「出雲大社」と「熊野大社」の不思議な（奇怪な?）関係が現出されているのでもある?!

なお、その「出雲大社」の宮司（国造家）は尾張系（「アメノホヒ」の後裔）であり、祭神「大国主命」の魂鎮^{たましずめ}（見張り?）役ということでもある?! だから、「熊野（大社）」は、同族（格下?）である宮司（国造家）に対しては、「表面的（形式的）」には、何も出来ない（偉そうに出来ない?）のである?!

問題は、この「日」と「火」の関係の具体であるが、最終的には、前者が「前方後円墳」勢力、後者が「前方後方墳」勢力ということになるとは思われるが、まだまだ確たる論証は出来ない?!

とにかく、もう一度? 「出雲」を介した両勢力（「日」と「火」）の関係（変動?）、そして、それと連動している「物部氏」（天火明命→饒速日命?）と「尾張氏」「海部氏」（彦火明命→饒速日命?）との関係を追究していくことが必要かと思われる?!

それにしても、昔の人々の行動力（移動／合流・離反）と想像力（神々の体系化）には、ほとんど驚愕?させられる?!

13 再度？「賀茂（加茂・鴨・迦毛）族」を追う?! もう一つの？「大和建国」の功労者?!

(1)「賀茂（加茂・鴨・迦毛）族」は、絶対に「大和建国」に参画している?!でも、その様相は複雑怪奇?!

ここで改めて、「賀茂（加茂・鴨・迦毛）族」の関わりが気になってくる!

例えば、その「カモ族」（この表記で統一する!）の始祖?である「(カモ) 建角身 タケツヌミ→八咫鳥 ヤタガラス」（『古事記』では、大国主と共に国づくりを行った、「神産巢日 かみむすび神」（神魂命）の子を「少彦名 すくなひこな神」とし、彼を、その孫としている?!）は、南九州の「曾（曾於?）」の出身であるとか（『山城国風土記（逸文）』）、あるいは、彼がそのモデルとなっていると思われる?「神武」の東征先の重要寄港地?「吉備」の周辺には、「カモ」の名が群集している（「加茂遺跡」等）とかである!

そしてまた、奈良、京都をはじめ、本当に全国各地に「カモ」の名が残されている!

先に、「日」と「火」の関係から、大和（三輪）・伊勢・丹後、そして出雲の関係を探ったが、この「カモ族」が、まさに「大和建国」に参画していたことは間違いなく、そうであれば、改めてその「日」と「火」の関係、あるいは「大和建国」の全体構図に、その「カモ族」が、いかに関わっているのかが究明されなければ、それらは完全とはならない?!

そこで、実は、吉備の「賀茂西遺跡」が、例の「手焙型土器」（「火」の祭祀用?）の発祥の地（「カモ族」の出発地?）であったということ、ここでは改めて思い出す（藤井耕一郎『タケミカツチの正体 オミ姓氏族対ムラジ姓氏族』河出書房新社、2017年）!

もし、そういうことであれば、本来（最初?）の「火」の勢力は、この「カモ族」であったことになる?!あるいは、その「カモ族」を中心として、「火」の勢力（→前方後方墳勢力?）が形作られたことになる?!

さらにはまた、例えば、かの有名な出雲の「加茂岩倉遺跡（銅鐸大量出土地）」は、その「カモ族」が出雲に移動して、残したものとなる?!そういうことで、この「カモ族」（の動き）を追究していけば、それこそ古代史の真相?も、さらにまたはっきりとしてくるのではないか?!そんなことが、脳裏を過るわけである?!

さて、そもそも?、この「カモ族」は、『新撰姓氏録』（平安時代初期の815年に、嵯峨天皇の命により編纂された古代氏族名鑑）によれば、大きくは「天神系（賀茂県主系）」「地祇系（三輪氏族→賀茂君・朝臣系）」、そして「皇別氏族」である「吉備氏」系の「備前鴨（加茂）氏」に分かれるらしい?!

ちなみに、9世紀初頭の「姓氏録」ということで、そこには、かなりの曲折・

混乱？があるであろうが、「吉備氏」が「皇別氏族」であるとされ（「吉備の勢力」が、最初の大和政権を樹立しているのであるから、当地に残ったであろう一族「吉備氏」が、「皇別氏族」であることは当然である?!）、その系統とされる「備前鴨（加茂）氏」が、同じ「皇別氏族」となるのは至当である?!

とにかく、「天神系（賀茂県主系）」や「地祇系（三輪氏族→賀茂君・朝臣系）」も含めて、彼らは、すべて「吉備勢力」（の縁戚者?）であったということであり、その「姓氏録」からも、「カモ族」が、「大和建国」の、元々の一員であったということが判明するということである?!

ただし、当初「皇別氏族」扱いであった? 「備前鴨（加茂）氏」が、途中から「地祇系」とされたということでもあるらしいが、そうであれば、彼らは、「三輪氏族→賀茂君・朝臣系」と共に、いつの日からか? 政権から遠ざけられた（途中で乖離してしまった?）ということになる?!

となると、「カモ族」は、大和建国に携わった勢力・氏族ではあったが、「皇別」、そして、「天神系」と「地祇系」に分裂した（分離させられた?）、誠に複雑怪奇な勢力・氏族であったということになる?!

これを、単純に? 受け取ると、「カモ族」は、まずは初期大和王権の樹立勢力の一角（「吉備」勢力であったことは間違いない!）であったが（→皇別「吉備氏」及びその系統の「備前鴨（加茂）氏」）、その後、（吉備→出雲から? 移動してきた）「大和（葛城）」の「カモ族」は、「神別」の「天神系（賀茂県主系）」と「地祇系（三輪氏族→賀茂君・朝臣系）」とに分かれたということになる?!

しかも、途中で、「備前鴨（加茂）氏」も「地祇系」となった（ただし、その順序性は、まだよく分からない?!）?!そこにいかなる理由（いきさつ?）があったのかは、まだ判然とはしないが、いずれにしても、この「カモ族」は、同じ吉備?からの「物部氏」と同様に、かなりの広がりど錯綜?を呈する、何とも不思議な?勢力・氏族だったということである?!

(2)改めて、「(カモ) タケツヌミ」と「アジスキタカヒコネ（迦毛大神）」、そして「事代主」の関係は?!

だが、それはそうだとしても、本当によく分からないのは、始祖?の「(カモ) タケツヌミ」と「アジスキタカヒコネ（迦毛大神）」、そして「事代主神（恵比寿様?）」の関係である?!いずれも、「カモ族」（の頭領 or 縁戚者?）であったことは間違いないであろうが、その三者の関係が、今一つスッキリとしないのである?!そしてまた、「アジスキタカヒコネ」と「事代主神」との関係が、同じ「出雲系」でありながら（双方共に「大国主命」の子!しかし、異母兄弟?!）、上手く描けないのでもある?!

ひょっとしたら、この複雑な関係（様相?）は、上に示した「カモ族」の分離・分裂?の故なのかもしれない?!とにかく、その具体（真相?）が見えて来

ないのである?!

例えば、「三輪氏族（大物主系）」に属する「地祇系」の賀茂氏（→葛城系賀茂氏）は、第10代天皇「崇神」の時に登場してくる「大田田（多直おおただ？）根子」の孫「大鴨積（おおかもつみ）」を始祖とし、奈良盆地の西の大和国葛上郡鴨（現在の奈良県御所市）を本拠地とするとされるが、これは、「三輪氏族」と「カモ族」（の一派？）が、大和葛城で合流・合体？して出来た勢力・氏族であろう?!

だから、その「葛城」には、「事代主神」系の「積羽八重事代主神社」等と「アジスキタカヒコネ」系の「高鴨神社」等が同居しているのでもある?!

ちなみに、「記紀」によれば、「事代主神」は「大国主命」と「神屋楯（かむやた）比売」の子、「アジスキタカヒコネ」は「大国主命」と「宗像三女神（タギリ（ツ）姫）」の子とされている?!

しかし、前者の「神屋楯比売」の素性がはっきりとしない？ということもあって、理解が難しいのでもあるが（『古事記』にのみ記載！しかも、この「神屋楯比売」も、実は「宗像三女神」の別名でもあるようである？）、例の「出雲の国譲り」に際しては、「大国主命」は、事実上？その「事代主神」に、諾否？の決定を委ねている！その意味では、「事代主神」系の方が、積極的に？「大和（三輪）」に合流・合体？した勢力なのかもしれない（「記紀」も、そう示している?!）?!

一方、「アジスキタカヒコネ」の方は、その「出雲の国譲り」の前段で、先に「高天原（吉備?）」から派遣？されていた「天雅彦（あめわかひこ）」（アジスキタカヒコネの同母妹「下照姫」と結婚していた!）が、任務を全うしていないという咎で殺された？時に、その葬儀の席上、「天雅彦」の両親から、自分の息子と瓜二つであると喜ばれたが（つまり、息子は死んでいないと勝手に思われたということ?!）、彼は、そのことに立腹し、その喪屋を剣で切り壊したという逸話がある!

何とも「おどろおどろしい」（ほとんどあり得ない?）話であるが、出雲に同化した「天雅彦」との関係が、そこには仄めかされてはいるのではある（つまり、同族であったが、裏切ったということ?）?!

そこで、ここではまだまだ空想?の段階ではあるが、その「天雅彦」が、あの「賀茂岩倉遺跡」を残した「カモ族」（縁戚者?）であったならば、吉備から？出発して「出雲に同化した」彼の痕跡を示すものとして（銅鐸の大量出土等）、件の事件?には、何らかの真相?が隠されている?!しかも、現在の島根県安来市には、「賀茂神社」というものもあるらしい!

ならば、同じ大国主命と宗像三女神（「タギリ（ツ）姫」?）の子の「アジスキタカヒコネ」が、彼（「天雅彦」）と同族であることを否定したということは（似ている→同一人物?＝同族だと言われたので逆上?したということ?!）、その兩人（勢力）が、当地（出雲国意宇郡?）で袂を分かったということになる?!

(3)「大和葛城」が、すべてを解き明かす?!「製鉄族(山の民?)」と「海人族」の合流・合体、そして分裂?!

とは言え、「事代主神」の母親である「神屋楯比売」も、実は「宗像三女神(タギツ(リ)姫)」であるという話もある(ただし、その姫は、いわゆる「辺津宮」の神らしい?!ならば、それは「市杵島姫いちきしまひめ命」??)?!

そうであれば、「事代主神」と「アジスキタカヒコネ」は従兄弟、あるいは同母兄弟、さらには同一人物?となるが、そこに、「神屋楯比売→事代主神」系と「タギツ(リ)ヒメ→アジスキタカヒコネ」系があるということであるので、やはり二人は別人(勢力)ということにもなる?!

しかも、改めて考えると、大国主命は明らかに「カモ族」ではないので、「宗像三女神(タギツ(リ)姫)」(母方)の方が「カモ族」ということにもなる?!これもまた、実におかしな話となる?!それでは、一体どこに(で?)、「カモ族」の血が入り込んでいるのであろうか?!

そんな状況の中、「事代主神」は、正当な「出雲」の後継者?ということにされ、大和(葛城)の地主神ともされている?!そしてまた、そこには、「アジスキタカヒコネ」も、純粹の?「カモの大神」として祀られている?!

問題は、そのことを、どのように整合させればよいのかということになるが、出雲での二人(勢力)の関係は、これ以上ははっきりとしないが、注目されるのは、やはり「大和葛城」の地であり、そこで、どのような集散離合があったのかということになる?!

すなわち、ある時期からそこに蝟集した「(出雲系?)カモ族」は、まずは、山背(城)に向かった「賀茂県主系」(後に「秦氏」と組んだことは間違いない→上賀茂神社・下鴨神社!)と、葛城に残った「賀茂君・朝臣系」(→高鴨神社・八重事代主神社等)に分かれた?!その後、葛城に残った勢力は、「三輪氏(大物主神)」と組んで「大和建国」に参画したが、何らかの理由で、「事代主神」系と「アジスキタカヒコネ」系に分かれた(もちろん、「事代主神」系の方が積極的に参画した?!)?!

強いて言えば、前者は「日本海系」、後者は「瀬戸内海系」ということか?!何故なら、「事代主神」は、出雲の美保関に縁があり(→「美保神社」の祭神)、彼は、まさに日本海を股にした?、その「海人族」(宗像系?)の頭領?であった?!

また、大和(橿原)で「神武」(「タケツヌミ」が、そのモデル?!)の皇后となった「媛蹈鞴五十鈴媛ひめたたらいすずひめ命」は、三輪山(「大物主神」)を祭る巫女的な存在だったと思われるが、その婚姻は、「神武」(勢力)が、大和の出雲勢力(「大物主神」→「事代主神」系)と合流・合体?したことを物語っている?!

と言うのも、その名にある「タタラ」から分かるように、皇后の出身が、製

鉄と深い関係がある氏族（出雲族？）だったということになるからである?! あるいは意味、「大和建国」は、「製鉄族（山の民）」と「海人族（海の民）」の合流・合体の産物であったということでもある?!

その後、「吉備」の（を經由してきた?）「饒速日命」（物部）勢力（後から来た? 「伽耶」勢力? 太陽信仰族? →後の「崇神」に投影?!）が、先住の「葛城勢力」（「事代主系」と「アジスキタカヒコネ系」）を分断? させ（逆にこの時点で、両系統が出雲と結びつけられたのかも?）、「饒速日命」の子の「ウマシマジ（デ）命」が、「大和王権」（「物部氏族」の政権）を確立させたということである?!

このように、3世紀末?の「大和建国」は、吉備からの「物部氏族（饒速日命）」と、先住の「三輪氏族」と「葛城カモ族」との合力によってなされたが、後者の勢力は、同族?の「尾張系」（こちらも「葛城」から?）の離反（裏切り?）によって、二つの勢力に分断された?!

ただし、山背（城）に移動していた勢力（本隊?）は、後に「秦氏」の助力を得て?、「賀茂県主系」を形成した?! だから、「天神系」ともなった?! そして、「カモ族本系?」を、「京都（愛宕）」に祀った?! そう出来たからである?!

ということで、ここに重大な仮説（妄想?）が発生する?! つまり、例の「長脛彦ながすねひこ」は、「カモ族」（の一部→「地祇系」）に投影されている「人物」なのではないか?! 端的に、「カモ→鳥→長い脛?」だった?! こう考えると、かなりの整合性? が得られるのではないだろうか?!

14 続いて、「賀茂（加茂・鴨・迦毛）族」と「秦氏」、そして「息長氏」の関係を追う?!

(1) 俄然怪しくなったきた? 「賀茂（加茂・鴨・迦毛）族」と「秦氏」、そして「息長氏」?! 果たしてその関係は?!

随分時間がかかったが、先号（13）で見たように、「賀茂（加茂・鴨・迦毛）族」（以下、「カモ族」）は、実に多様な? 顔をもつが、大和建国の功労者（先導者?）であったことは、おそらく間違いないであろう?!

ただし、その痕跡（功績?）を辿っていくと、彼らの勢力（動き）は、不思議にも（厄介にも?）幾重にも分かれ、「大和葛城」を本拠地としながらも、京都山背（城）に移っていった本体?（「賀茂建角身命^{かもたけつのみのみこと}→賀茂県主」系→下鴨神社／上賀茂神社）は、後発の? 「秦氏」や「息長氏」と連動している?!

果たして、彼らは、どこから、どのようにして、近畿・大和へやってきたのか、そしてまた、どのようにして各地に広がっていったのか?!

そして、一方で、「秦氏」や「息長氏」は、初期大和王権（「崇神」?）以後、新たな勢力として「近畿（北陸を含む!）」に移動してきて、「応神」、そして「継体」王権の成立に、大きく関与していると考えられるが（だが、それらは、後の「百済系」の持統・藤原政権によって変質・脚色されてはいる?!）、彼らは、いつ、どのようにして、そうなったのか?!

多分? 彼らは、まずは半島南部から九州に拓殖して（鉱山開拓?）、その後、近畿に乗り込んできたものと思われるが、ここでは思い切って、それら三者の関係を、改めて洗い出してみたいのである。

従来、この辺りは、あまり突っ込んだ考察はなされていないようであるが、以下に述べるように、我が国古代史の闇?の部分（意図的に隠されている?）を絶対に握っていることは明らかなのである?!

ちなみに、「息長氏」は、「息長帯姫（神功皇后）」をはじめ、「天日矛（ツヌガアラシト?）」「武内宿禰」、そして、いよいよ?（4～6世紀?の謎の部分を解明していくのには、絶対に避けられぬ!）「応神」「継体」の謎にも関わってくる「（皇別）氏族」であることから、大変重要な氏族・勢力であることは言うまでもない?!

もちろん、「秦氏」も、当初から彼らと行動を共にし（と言うより、逸早く?）、その背後で暗躍?した氏族・勢力であったことは間違いない?!

ただし、その「秦氏」は、何故か、政治（政権）の前面には顔を出さない? 別な意味で、「奇怪な?」氏族・勢力なのでもある（例の関裕二氏によれば、「蘇我入鹿」暗殺?の主犯格?で、そのため、歴史の表舞台に出られなかったとのこと?）?!

改めて、彼らが、どのように出会い、どのように動いてきたのか? そして、

そこに、どのような関係を築いてきたのか？そこら辺が、問われるということである?!

(2) 藤原氏の、「万世一系」の皇統譜作成（捏造?）にとって、彼らの存在（活躍）は目障り（不都合）であった?!

まず、繰り返しになるが、「カモ族」にしろ、「息長氏」「秦氏」にしろ、大和建国史上重要な氏族であることは間違いないが、何故か「記紀」においては、「中央位置」で語られていないということがある?!

それは、やはり記紀編纂者（持統・藤原体制＝（沸流→仇台系）百済）にとっては、「蘇我氏」や「物部氏」と同じように、「真相を知られてはまずい」というような配慮?があったとは思われるが、要は、「天照大神（持統）」から始まる「万世一系」の皇統譜作成（捏造?）にとって、彼らの存在（活躍）は目障り（不都合）であったということである?!

ただし、「蘇我氏」や「物部氏」に対しては、彼らの正当性・正統性を悪逆に?奪ったというような後ろめたさ（罪悪感?→「聖徳太子」を創作!）から、「カモ族」や「息長氏」「秦氏」に対しては、利用はしたが、最後には裏切った（正当な扱いをしなかった?→「応神」「神功皇后」「武内宿禰」を創作!）というようなことである?!とりわけ、「秦氏」に対しては、そうした扱いが濃厚である（経済的な基盤という点では、秦氏の貢献は絶大である!）?!

そういう中で、年代（史実?）的には、やはり「カモ族」の登場が一番早いと思われるので、その「カモ族」が、どのように、新たな?渡来系勢力の「秦氏」や「息長氏」と繋がっていったのかということを、少し具体的に整理する必要がある。

何故なら、もともと「秦氏」や「息長氏」は、東部九州、すなわち「豊前→筑豊（秦王国?）」の地で一緒であったからである?!しかも、彼らは、いわゆる「新羅系」、厳密には、その前身の「辰韓系」であった?!

すなわち、その「新羅（辰韓）系」の「秦氏」や「息長氏」が、どのように、「カモ族」、とりわけ「賀茂建角身命＝八咫鳥」を始祖とする、後代天神系とされた「賀茂県主系」とつながり、その関係をもったのか?というところが焦点となるということである?!ここに、大きな謎が隠されている?!

(3) 「筑豊・豊前」に広がる「秦（王国）」の勢力、そして、そこに「新羅（←辰韓）」の影?がちらつく?!

しかるに、秦氏・息長氏は、京都の「上賀茂神社」「下鴨神社」、さらには著名な「太秦^{うずまさ}」（「広隆寺」「大酒神社」等）、そしてそれ以前?の、播磨の坂越（「大避神社」等）、さらには河内（そこにも「太秦」という地名があるらしい!）で繋がっていると思われるが、これと関連して（それ以前に?）気になってくるのが、それらと遠く離れた九州・田川にある「香春岳^{かわらだけ}」周辺であり、

そこの旧社（「香春神社」）の祭神として祀られている「辛国息長大姫大目からくにおきながおおひめおおめ命」という名前である（まさに「神功皇后＝息長帯比売」を彷彿とさせる?!）！

この祭神は、近くの「英彦山（神社）」とも関わり、そこの祭神「忍骨おしほね命」の母親とされてもいるようである（彼は、「記紀」に言う、天照大神の嫡子「天忍穗耳おしほみみ」→天孫系？に酷似している？）?!

これについて、『豊前国風土記（逸文）』には、その「香春の神は、新羅から渡ってきた神で、香春岳には銅がある」とされ、その香春岳（一ノ岳）の南麓には、香春三峰の神を祀る「香春神社」が鎮座し、その第一殿には、先の「辛国息長大姫大目命」が祀られている！

「辛から国」は「（秦）韓から国」に通じており、その神社の南には新羅系の瓦が発掘された「上伊田廃寺跡」があり、香春岳を中心に、新羅系渡来人集団が居住していたことは間違いないようである（→『隋書』に載る「秦王国」?!）。なお、その三ノ岳には、銅の採掘跡、鑄造した際の祭祀遺跡があり、麓に鎮座する清祀殿では、今でもその祭祀が続けられているという。

一方、その豊前宇佐の方では、「八幡神」の最も原初的な祭祀が行われていた「馬城峰」（現「御許山」）があり、八幡信仰が成立するよりも古い時代から、土着の「宇佐氏」によって遥拝されていたらしいが、「宇佐神宮」を大きくした大神比義おおがのひぎ（←大和の「大神おおみわ氏」？）は、秦氏系の辛嶋からしま氏の「弥泰ヤハタ神」も、大和系の大神おおが氏の「応神天皇」も、同体の「八幡神」だとして、両氏の争いを、仏教の「幡」と道教の思想習合によって収めさせたという。

これによって、「応神天皇」の神霊は、「弥泰神」であるということになり、官社「八幡宮やはたみや→宇佐八幡宮」が成立したということである（「宇佐神宮」の国家祭祀化!）?!この話は、「応神天皇」以後の大和（三輪）と豊前の関係を示したものであろうが、そこに新羅系の要素が色濃く示されていることは間違いないであろう！「八幡神」は、まさに新羅（←辰韓）の神なのでもある?!

（4）「秦氏」「息長氏」、「豊前」→「播磨」「但馬（出石神社）」「越」、そして→「近江」「河内」「磯城」へ?!

しかしながら、一方でこの地域は、「豊前秦氏」の密集地であり、「香春神社」は、それこそ「秦氏」の根拠地（フランチャイズ）でもあった?!しかも、その近隣には、何と北陸敦賀（→額賀つぬが氏→氣比神宮）の「ツヌガアラシト」を祀る「現人あらひと神社」も存在し、ツヌガアラシト＝天日矛（双方は同一人物?!）は、多くは秦氏と関連付けられる渡来系の神であるということになる?!

豊前が先なのか、近畿・北陸が先なのか？現時点では、まだまだ何とも言えないが（これは、例の物部氏についても言えるが?）、これらの勢力・氏族が、い

つ、どのようにして、大和王権に参画して（乗っ取り、乗っ取られて？）きたのか、その解明が必要なのでもある?! 多分、その位置関係から、豊前の方が先で、その後、近畿・北陸にその基盤を築いたものと思われるが（「神功皇后」「応神」の東征?）、これらが、ある時期の大和王権（記紀上の「継体」王権?）を指しているようにも思える?!

ところで、奈良の田原本町（磯城郡）には新羅（伽耶?）系の痕跡が多く、主となるのは秦氏で、秦河勝が住んでいたという「秦之庄」があり、河勝の創建と伝える秦楽寺や法貴寺、そして、秦氏と縁の深い鏡作神社、糸井神社他があるという。

また、「三輪山の信仰には渡来の文化との関わりがあった」とされ、かの「大田田根子」の裔とされ、「大神^{おおみわ}神社」の神職を務めた豪族「大神（大三輪）氏」は渡来の豪族であった?! 大田田根子が須恵村（陶邑）の出身である他に、南朝鮮に色濃く分布する「蛇身の神の神婚譚」と一致していることや「赤土を床の前にまきちらすのが朝鮮全土の村祭りで行われている祭場の浄化方法である」ことが、その理由とされる?!

「秦氏本系帳」にも、賀茂氏の「丹塗り矢伝説」とそっくりな物語があるともいう?!

さらに、三輪山西南麓の「金屋遺跡」からは、弥生時代の鉄滓や吹子の火口、焼土が出土しており、その付近で製鉄（鍛鉄?）が行われていた?! その山麓には、金屋・穴師・金刺などの産鉄地名が残り、産鉄地・産鉄の民と関係の深い地と見られている。

また、「都祁^{つげ}」は、早くからの新羅系移住民の定住地とされる。「三輪山は辰韓（新羅系渡来人集団）の本拠地であった朝鮮式山城とみられる神奈備山」であり、辰韓勢力は、出雲→若狭一帯→琵琶湖の沿岸を南下し、大和→奈良の都祁→三輪地方へ進出したということである?!

ただし、出雲にどのように進出していったのかは、まだよく分からない。想像を逞しくすると、その足跡が、いわゆる「素戔鳴命→大国主命（→大物主神?）」に投影されているのかもしれない?!

なお、大田田根子の孫「大鴨積^{おおかもつみ}」を始祖とする、三輪氏族に属する地祇系氏族の賀茂氏は、奈良盆地の西の大和国葛上郡鴨（現在の奈良県御所市）を本拠地とするが、現在の島根県安来市には賀茂神社があり、出雲に属するとされる。

山城賀茂県主系は、「天津神（天神）系」で、三輪氏族に属する葛城系賀茂氏は大国主と同じ「国津神（地祇）系」とされるが、出雲国造が熊野大社で行う「火継ぎ」神事は、古代「神魂^{かみす}神社」で行われていた。神魂神社の祭神は、原初は「御祖神」としての「神魂^{かみむすび}命」であったという（この辺りは、

いわゆる「ネット情報」による！)。

(5)「乙巳の変」→「聖徳太子信仰」→政治の表舞台に立てなかった？「秦氏」、そして「カモ族」「息長氏」？！

いずれにしても、その「カモ族」の正体の全貌？を見せてくれるのが、まさしく「大和葛城」であろう?!すなわち、この「大和葛城」には、「カモ族」、「出雲族（大物主→三輪氏）」、そして「秦氏」が集住していた地域である。現在「御所ごせ市」というのがあるが、そこに、何らかの？「御所」があったということではないか?!

天神系（賀茂県主系）の方は、最終的に山城国葛野郡・愛宕郡に移動していたが、これは、そこの先住者？「秦氏」と結びついていたからである（『山城国風土記（逸文）』では、賀茂県主の祖の賀茂建角身命は神武天皇の先導をした後、大和の葛城を通過して山城国へ至ったとされている!）?!

こうやってみると、崇神期に大量渡来したとされる「弓月君（融通王）」を祖とする「秦氏」は、豊前を根拠地としながら、全国各地に広がり（主として瀬戸内海を移動して?）、磯城、葛城、そして山背（城）に移動（先着?）し、「カモ族（の本流?）」と合体?し、九州倭国（筑紫宮家?→百済系）の後胤「中大兄皇子」と「中臣鎌足」の陰謀に乗り、「乙巳の変」（蘇我入鹿暗殺・本宗家滅亡）を敢行した?!

しかし、その悪行?によって、彼らは、世間からは白眼視され、その後は（それまでの栄光も?）、表向きには出されなかった?!そして、「息長氏」もまた、「神功皇后」「応神」「継体」という皇統譜捏造?の中で、その活躍が事実上掻き消されてしまった?!

15「縄文から弥生へ」は、「直線的？」につながっている?!そのことは分かったが?!

(1)「縄文から弥生へ」は、「直線的？」につながっている（バケツリレー?）?!
まずは、どういうことか?!

過日、再び関裕二氏の本を読んだ!今回は、『「縄文」の新常識を知れば日本の謎が解ける』（PHP新書、2019年3月）というものであったが、単純には、「縄文から弥生へ」は、従来考えられていたものとは違って、狩猟採集（先住縄文人）から稲作農耕（渡来弥生人）へと、単純に、しかも急激に変貌を遂げたものではなく、結果としては「直線的？」に、その時々の人々が、互いに影響を与えながら、融合?し合っていたのではないかということである（「バケツリレー」とある!）!

要は、「新来の」弥生人が、生産力（稲作）、武力（鉄器・青銅器等）に物を言わせて?、「旧来の」縄文人を排斥・駆逐していったのではないということであり、そこでは、新旧の生活用品（土器等）、生産物や文化の相互交流・取捨選択が行われ、そのことが、その後の日本人の価値観や生活様式に大きな影響を与えているということである!

端的に言えば、「弥生的」なものを適宜取り入れながら、「縄文的」なものが基層となり（言葉も?）、今日の日本（人）が形成されているということである?!

さて、その先住の縄文人とは、約1万年に亘って、各地・各様に辿り着いた?幾つかの部族（家族もある?）であり、ある特定の種族集団を指すわけではない!

しかるに、最初にアフリカを出た新人類（6万年前）は、5万年前に南アジア経由で東南アジア（スンダランド?）に到来し、パプアニューギニアやオーストラリアに移動した?!その後、5万年前?にアフリカを出発した第2陣?は、東南アジア・中国南部とバイカル湖を中心とする北方アジアに進出した（母子伝達のみトコンドリアDNAで言うと、ハプログループMとN）。

その中で、列島に渡来したのは、その分枝M7aとN9bとされる（前者は「沖縄、関東、北海道」、後者は「東北日本」に多い!）?!まさに「南方系」と「北方系」ということになるが、特筆すべきは、それと同じDNA配列をもつグループは、朝鮮半島南部にも多く、「少なくとも北部九州と朝鮮半島南部は同じ地域集団であった?」ということである?!

ただし、これは、いわゆる「女性系統」だけを示すものであり、「男性系統」（Y染色体DNA）は、それとはかなり異なったものであるらしい（20のハプログループがあるが、列島にやってきたのは、C、D、N、O、Q!）?!

C（C1とC3）は、我が国の人口の10%前後を占め、アイヌでやや多いとされるが、東アジア、オセアニア、シベリア、南北アメリカに分布し、その内

の **C 3** が、ユーラシア大陸東部を北上し、シベリアで繁栄し（新モンゴロイド？）、一部は西に、一部は東に向かい、アメリカ大陸へ。なお、**C 3** は、約 2 万年前に北海道に「細石刃文化」をもたらした（アイヌに見られるが、琉球には存在しない）？！

C 1 は、インドネシアに多く、東アジアには分布しないそうである（直接黒潮に乗って日本列島に流れ着いた？ごく少数ではあるが、重要なグループ！）？！

次の **D** (**D 2**) は、縄文人の中心的存在とされ（1 万 3 千年前に分岐し、ユーラシア南部を東に向かい、東南アジアを経由し、華北、モンゴルに至った。その一部が南下し、朝鮮半島経由で、日本列島へ。日本人男性の 30～40%。これだけの高密度は他にはない！）、**O** は、日本人男性の半数（**O 2b** と **O 3** が主で、前者は朝鮮半島と華北、後者は華南に多い）。

なお、**N** は、新石器時代に流入したが、シベリア北西部と北欧に集住（アイヌ、琉球には存在しない！）。**Q** は、ごく僅か！

結論として、「母系では、日本と東アジアは似通っているが、父系ではない！」「父系では、C、D、O の三つが 9 割を占める！」ということが、その特徴であるということである？！

(2) やがて、「渡来系弥生人」が「大きな変動？（大乱）」をもたらした？！それは、何故か？！

詳しくは、これ以上紹介できないが、別の最新の研究成果（「ヒトゲノム」の解析）も紹介されている！それは、縄文から弥生を含む、壮大な？日本人渡来の「三段階渡来モデル」である（括弧書きは、私の加筆！）。

第一段階：約 4 万 4000～4 万年前（旧石器時代から縄文時代中期まで）

ユーラシアの様々な地域から、南北のルートを使って渡来（→北方系の縄文人＋南方系の縄文人）。氷河期には陸続き。メインとなった人達（南方系の縄文人？）は、現在の東ユーラシアに住んでいる人達とは異なる。どこから来たのか、今のところ不明（スンドラランド経由？）！1 万 6 千年前、彼らは土器を作り始めた。

第二段階：約 4400～3000 年前（縄文時代後期と晩期）

列島中央部に、第二波の渡来。ルーツは不明だが、朝鮮半島、遼東半島、山東半島の海の民か、あるいは「園耕民」の可能性あり？！（→倭人→安曇族？）

第三段階前半：約 3000～1700 年前（弥生時代）

朝鮮半島（南部）を中心とした第三波。第二波と遺伝的に近いが、少し異なる。水田稲作技術を持ち込んだ。列島中心部に沿って東に居住域を拡大（→倭人→出雲族？）。東北の人達（北方系の縄文人？）とは混血していない。（南方系の縄文人が見えない？）

第三段階後半：約 1700 年前～現在（古墳時代以降）

第三波の渡来人と同じ種族が、継続的にユーラシア大陸から移住。第一波の渡来人は、北海道に移住（→アイヌ人？）。第二波の渡来人（→出雲族？）が東北に居住。

いずれにしても、まだまだ正確な人の動きが描かれてはいないのであるが、こうした流れの中で、我が国（日本）には、「縄文」の魂が脈々と流れているということである?!

その魂とは、換言すれば、自然との調和（畏敬と祭祀）、異なるものとの融和（交流と取捨選択?）ということであるが（ただし、それは「和解」、悪く言えば「妥協」かも?）、例えばそれが、聖徳太子（架空?）に「和を以て尊しとなす!」と言わせたのでもあろう?!

もちろん、それらは、実際には、ほとんど正当には実現され得ないものであったが（だからこそ?）、その精神（だけ?）は大切にしたいということであり（諍いを避ける?）、それは、「弥生人（文化）」に対する、「縄文人（文化）」の対処の仕方（あり方）を、どこかで?示しているということでもある?!

接触・交流はするが（せざるを得なかった!）、自分達にとって良いものだけを、慎重に?取捨選択する（自分達のものとして工夫をし、採り入れる!）?!

苦勞しながら、やっとの思いで辿り着いた「最果ての地」で、静かに（平和に?）暮らしていきたい!それが、「縄文人」の「思い」であり、「生きる力」「生活の知恵」でもあった?!

(3)問題は、「倭国大乱」と「纏向建設」、そして「倭国（邪馬台国）」（「魏志」）を如何に捉えるかである!

しかしながら、「縄文人」と「弥生人」の住み分けや緩やかな融合?も、やがて「国くに」同士の衝突や殺戮も行われるようになり（「弥生時代晩期」?）、その後「古墳時代」と呼ばれるような、各地の勢力・氏族達の同族意識の高揚や他勢力への勢威顕示?の状況が顕著となってきた?!

おそらく、そこには、稲作の進展とともに、人口増加や食料増産のための土地争いや、朱（硫化水銀）・銅・鉄等の鉱物資源、木材等の伐採・運搬等に絡まる海上輸送ルートの確保等の経済闘争?も激しくなっていた?!

それが、広域での争い、同盟・協力のネットワークづくりを促進させ、それこそ倭国全体を巻き込んだ「大きな変動」を惹き起こしていった?!

多分?、それが、『魏志』に示されている「倭国大乱」と呼ばれるものであったろう（2世紀末?）?!

ちなみに、それらの動きを、全体的な視野や利益（有利性）から動いた勢力・氏族が、いわゆる「海人族」であり、その「海人族」のネットワークを、それぞれ支援・拡大させていった（ある意味利用した?）のが、おそらく「伽耶・新羅系の王族?」であり、「百済系の王族?」であった?!

ただ、そこには、在

来の「海人族（江南系？の安曇族）」がいて、彼らを中心に複雑な同盟関係・ネットワークが形成された？！

その後、「カモ族（氏）」「海部族（氏）」、さらには「宗像族（氏）」、「住吉族（→津守氏）」といった、後発？の海人族達（「安曇族」から分岐していった？）が、それぞれの利害関係、ネットワークを構築し、その支配？領域を開拓・拡大していった？！

こうした中で、3世紀後半？三輪山麓（纏向）に、その後の「大和王権」の母体？となる「政治勢力」が結集したことは間違いない！その根拠の一つが、出土土器の状況であるが（全体の3割弱！）、東海（49%）、山陰・北陸（17%）、河内（10%）、吉備（7%）、関東（5%）、近江（5%）、西部瀬戸内（3%）、播磨（3%）、紀伊（1%）となっているらしい！

これらからすると、「東海」が一番、この動きに連動していることが分かる（→「尾張氏」の影がちらつく？）？！そして、驚き？は、何と言っても、「東海」と「関東」で半数以上を越すということ、九州系がほとんどないということである（少なくとも、この時期はであるが！）？！

これは、おそらく？九州倭国に対抗すべく、多分鉄資源等の確保、新たな開発を目論む新たな勢力が（ただし、当初は、九州倭国または九州の別な地域にいて、そこから飛び出していった、例えば「奴国」や「伊都国」あるいは中・南部九州の勢力であったかもしれない？そして、「吉備」を経由した？その勢力が、「神武東征」に擬せられた？）、地の利を生かした「大和纏向」に参集した（以前にも述べたように、その気配・匂いは大いにある？）？！

その中心となったのが、出雲（「葦原中つ国」）を分断させ？、先に日本海側から近畿（丹波→近江）に乗り込み、「前方後方墳勢力」の中心となっていた「和珥^{わに}族→多氏？」（尾張氏は、本来はその一派？）で、遅れて？瀬戸内側から近畿（河内→大和）に入った「前方後円墳勢力」（ニギハヤヒ→物部氏）が合流・合体し、まずは三輪王朝（「大物主」政権）を樹立させていたが（その象徴が、「箸墓古墳」に葬られたとされる「倭迹迹日百襲姫^{やまとととびももそひめ}命」である？）、その後、吉備から押し寄せてきた「前方後円墳勢力」が、その主導権を奪った？！

なお、北部九州には見られない「高地性集落」の分布は、弥生中期に「中部瀬戸内」と「大阪湾岸」に、弥生後期には「近畿」と「その周辺部」に、ほぼ限定されているということである？！それが、古墳時代前期には、西日本の「広島・鳥取」、北陸の「富山・石川・新潟」に分布するらしい？！

これらの集落遺跡の多くは、平地や海を広く展望できる高台にあり、西方からの進入に備えたものとみられている？！多分これが、上記の勢力・氏族の移動の痕跡を示すものであり（順序性も含めて？）、これが、まさに「倭国大乱」を示すものでもある？！

最後に、大和（纏向）を、『魏志』の「邪馬台国」とし、「箸墓古墳」を「卑弥呼」の墓とする、いわゆる「邪馬台国畿内説」であるが、そこには、「楼観や城柵（防御施設）がない?!」という（『魏志』にはある!）!しかも、この地は、突然に現れた、「政治と宗教に特化された人工都市」でもある（これだけをもってしても、「邪馬台国畿内説」は成立しない?!）!

そこで、「邪馬台国」が、「近畿にもない」「東遷したのでもない」とすれば、それをどのように受け止めればよいのか?!考えられるのは、二つの、別々な政治勢力の存在である（ただし、それらは、九州勢力の移動や近畿勢力の九州移動によって?、いつの頃からか緊密に結びつくものとなり、ある種の「二朝並立」となった?!→百済の「檐魯制」?これ自体は、例の「倭の五王」の時か?）?!

それが、701年（「大宝律令」制定）に統一（併呑）され、「(九州)倭国+（近畿）日本国→（九州+近畿）日本国」となった?!そして、これらを、「倭国=日本国」という形で、「記紀」（「九州倭国」の末裔である?持統・藤原政権）は、我が国の歴史とした（創り上げた?）?!

16「倭国大乱（2世紀末）」とは何だったのか?!そこから、「大和建国」は始まっている?!

(1)ならば、何故「倭国大乱」は起きたのか?!それはどういうもので、そして、何が原因だったのか?!

先号（15）で、従来考えられていた「縄文から弥生への道筋」は、狩猟採集（先住縄文人）から稲作（渡来弥生人）へと、急速に変貌を遂げたものではなく、ある意味「直線的?」に、ゆっくりと、しかも、互いが斟酌?を重ねながら、融合?していったのではないのか?!

つまり、「新来の」弥生人が、生産力（稲作）と武力?に物を言わせて、「先住の」縄文人をことごとく駆逐していったのではないということを、関裕二氏の本によって（再?）確認した!

ならば、改めて、何故2世紀末?に、いわゆる「倭国大乱」と呼ばれるものが生じたのであろうか?多少の軋轢（殺傷も?）はあったものの、新旧の住民（単純に言えば、縄文人と弥生人!）が、住み分けや融合（通婚?）を重ねながら、共存共栄?の道を歩んでいたならば、件の「倭国大乱」は起らなかったはずである?!

しかし、残念ながら、それは間違いなく起きているし、例の「魏志倭人伝」（以下、「魏志」）にも、そのことははっきりと書かれている?!ただ、「魏志」のそれ（「魏使」が伝えたもの?）が、どこから見て、どの範囲、どの程度のものであったのかは、定かではない?

例えば、それが、北部九州（倭国）だけのものだったのか、それとも、西日本一帯（倭人全体?）のものだったのか?多分、情報の限りでは前者かと思われるが（直接的には、当地倭国（邪馬台国?）で、それについて聞いていた?!）、いずれにしても、動き?としては、その大乱から「倭国」は大きく変わり、「新たな?倭国」へと変貌したということは間違いない?!

すなわち、奴国（57年「漢倭奴国王」や107年「帥升王（倭面土国）」?）から「邪馬台国（女王国）」（「親魏倭王」）へと、盟主が変わったということである?!そして、さらにまた、その情報（が示す真実?）が、本当は西日本全体のものであったならば（実は、まさにそうであった?!）、その「大乱」は、倭国九州だけではなく、西日本全体（否、東日本にまで及ぶ!）に、大きな社会変動をもたらした大事件（新たな、別な「政権（王権?）」の誕生?!）であったことは、言うまでもないということである?!

しかるに、後者については、以前に、吉備（伽耶經由北九州から?!残念ながら、それ以前は、まだよく分からない?）から進出していった「手焙型土器勢力（「火」の勢力?）」（日本海→琵琶湖・近江經由→前方後方墳勢力?）の、（先住の?）「環濠集落勢力」（「銅鐸・巴形銅器勢力」）への攻撃と駆逐について述べたが、おそ

らくそのことを指すものであろう?!そして、最終的には、同じ吉備?からの「日神・龍神?勢力（「日」の勢力?）」（瀬戸内海→河内・大和川経由→円墳勢力?）と合流して、新たな「勢力（政権 or 王権）→前方後円墳勢力?」を作り、それが、ある意味瞬く間に、全国各地に広まっていった?!これが、ここで言う「倭国大乱」の全貌ということにもなる?!

とは言え、先の「魏志」に示されている「大乱」自体は、西にも進出していった「前方後方墳勢力」の、九州倭国への移動（攻撃・転戦?）のこと（状態）を指していることは、時期的に見て?間違いないであろう（とりわけ、「吉野ヶ里」の環濠集落勢力への襲撃?）?!

だからこそ、もしそうであるならば、改めてここでは、その「大乱」の実相や原因を探り（まとめ?）、その後の「大和建国?」への道筋を明らかにしたいのである!もちろん、それは、まだまだ類推の域を出ないかもしれないが、この「倭国大乱」が、その後の「(九州) 邪馬台国（の出現?）」や「大和建国（「纏向」祭政都市の出現）」につながっていったことは明白であろうからである?!

(2)「鉄」の争奪?と宗教戦争?!「火」と「日」、「海の霊（海神^{わたつみ}）」と「山の霊（山祇^{やまつみ}）」の相克?!

そこで考えられるのは、大きくは「縄文・弥生のバランス?」を崩す、「鉄」の争奪と宗教戦争（「火」と「日」、「海の霊（海神^{わたつみ}）」と「山の霊（山祇^{やまつみ}）」の相克?）であろう?!「鉄（器）」は、まさに生活必需品、そして戦闘には絶対に有利な「文明の利器?」であった?!

その所有（入手）と分配の多寡が、そのまま国力（その勢力）の命運を左右したであろうことは、想像に難くない?!そしてまた、その「精神的な紐帯（実際は、相互の利益・安寧?）」を創り上げる、あるいは維持・発展させるためには、まさに共通の宗教（祭祀）の力が後押しとなる?!

その象徴的な姿・形、そして場所が、「神が宿る・祖先が眠る」祭祀場、すなわち「古墳」なのである?!ここに、「勢威（富?）」の不均衡が生じ、平等・安寧?の「縄文・弥生」時代が、事実上終焉を迎えるのでもある?!

そこで、やはりその発端は、「鉄（器）」の多寡（また、それによる生産力の多寡、そして、それを左右する「水利用」の不公平?等）による、各勢力（部族）間の諍い・戦闘?が、件の「倭国大乱」となっていたことは、これまた想像に難くない?!

そしてまた、その大きな構図が、まずは「鉄（器）」の保有で優位に立っていた「環濠集落勢力」と、一方で、極めて不利に立っていた「火神・手焙型土器勢力」（→前方後方墳勢力）と「日神・龍神信仰勢力」（円墳→前方後円墳勢力）の同盟・合流勢力との攻防であったということである?!

地域的に言えば、一番不利に立っていたのは「吉備」であり、そのため「出雲」に入り込んで（抱き込んで？）、その後、近畿（近江）・東海へ移動（進出？）し、そして、最後に「大和（纏向）」へ乗り込んでいった？！

多分？これが、例の「魏志」には直接は書かれなかったが、（九州を除いた？）西日本の変動（事件？）の状況であった？！そして、これをモチーフにして創作？されたのが、いわゆる「神武東征」の物語（「建国神話」）であった？！

ちなみに、当初「前方後方墳勢力」（「和珥族」？→多氏？）の一派？であった「尾張氏」は、東海・関東の利権のこともあり、後発の？吉備勢力（「崇神」勢力？）と共闘し、出雲勢力（「大物主」政権）を引きずり落とした（これが、例の「出雲の国譲り」神話である？！）？！

要は、吉備・尾張勢力が出雲を押さえ（裏切り？）、近畿大和政権の中枢になり上がったということである。

なお、「出雲大社」の宮司・出雲国造家（千家氏）は、その「尾張氏」の一族（「アメノホヒ」の末裔）であるということである（→大和王権の出雲監視・魂鎮め役？）！

(3) 二つに分かれた倭国（筑紫と大和）？！それを、一つにした（無理矢理継ぎ接ぎした？）「記紀」？！

とは言え、九州には（も？）、中国史書（『漢書』『後漢書』『三国志（「魏志」）』等）にもあるように、近畿とは別に、先在の「倭国」（「漢倭奴国」等）があったのであり、件の「倭国大乱」を経て、卑弥呼を女王（「親魏倭王」）とする邪馬台国を盟主とした「（九州）倭国」が存在したのである（ただし、その後を継いだとされる「台与」の後には、その所在・消息が不明であるが？）？！

そして、4世紀半ば？の神功・応神時代には「貴き（基肆 or 木？）国」（しかし、まだその存在は確定ではない？）、さらには6世紀初頭の「筑紫の君磐井」（実は、本来の倭国王？！）の存在、そして何より、『隋書』に見える7世紀初頭（600年）の「日出処の天子（アマタラシヒコ）」の存在（大倭→倭国？絶対にここは、近畿大和ではない！）は、筑後の「高良大社（大善寺）」や筑紫の「太宰府」の存在も加味するならば、この一帯が、（九州）倭国（の中心地！そして、例の「邪馬台国」のあった場所？！）であったことは、改めて間違いない？！

ということで、倭国は、いつの頃からか（明確なのは、4～5世紀代の「倭の五王」時代？）、近畿と九州に分立し（併存→「二朝体制」？）、前者が「（九州）倭国」、後者が「（近畿）日本国」となっていたが、701年の「大宝律令制定」（→「日本国」への「併呑」）で、全体が「日本_{やまと}国」とされた！

したがって、その辺りの真相を、改めて究明しなければいけないのであるが、それについては、「記紀」において隠されている（真相を知られたくない？）部分が多々あるようで、今もなお真相に辿り着けていないのである？！

ところで、そのことは、もちろん重要なのであるが、実は、他ならない「邪馬台国」の出自（どこの、あるいはどこから来た勢力なのか？）も、まだ明確ではないのである（九州か、近畿かという、著名な所在地論争だけが独り歩きしているが！）？！

そこで、もし、その邪馬台国（女王国）の出現（盟主国化？）が、先の「倭国大乱」後であるのならば、それはまさしく、その大乱の影響を受けたもの（勢力争いの結果！）であったことは間違いない？！そこで思い出されるのが、その時期（2世紀末）頃？とされる、東から西への文化（勢力？）の移動である？！

私は、それを、（全体の）倭国大乱の一環である、「前方後方墳勢力（手焙型土器勢力）」の西への移動だと受け止めているが（多分？これが、神武の、大和での長子とされる「神八井耳」勢力の移動であり、その後裔とされる「多（太）氏族」、すなわち「火/肥の君」「筑紫の君」「大分の君」等の存在であろう？！）、まずは彼らが、当地に「邪馬台国（女王国）」を建国し（「日田」経由か？）、それまでの盟主国（「奴国」or「倭面土→伊都国？」）を押さえ、新たな？倭国を作り上げた？！

ちなみに、その後、「卑弥呼」の死後、男王（「難升米」か？）が一時立ったが、周囲が反対し、卑弥呼の宗女（姪？）の「台与」が女王となって、「晋」等に遣使を行ったことは周知の通りである？！

とにかく、そのように考えれば、例えば、最初の頃に示した、丹波（後）の「籠かごの神社」に残されている「海部氏系図（国宝「勘注系図」）」の氏族・人物群（の類推？）の信憑性（前後性？）が、実証されることにもなる？！すなわち、海部氏一派（この限りにおいて、彼らは「前方後方墳勢力」？！）が、北部九州（筑紫）に邪馬台国を建国し、倭国の新たな実権を握ったということである？！

ただし、繰り返すように、「台与」の後、そこ（彼ら）がどのようなになったのかは、よく分からない（だが、海部氏の栄光・レガシー？は、実は、そこに発する？！）？！

(4) 問題は、「崇神」「応神（神功皇后）」、そして「継体」「欽明」に託された「倭国→日本国」の実相？！

最後に、本当は、ここで改めて、その辺のことを詳しく追っていきたいのであるが、紙幅の関係もあり、ここでは、その個々の事実？を云々する前に、そもそも何故、最終的な？「前方後円墳体制」が、そんなにも長く続いたのか（7世紀半ばまで？）、その原因（背景？）を探っておきたい！

何故なら、そうすることで、また別の解明視点が出て来るのではないかということであるが、少なくとも、「前方後円墳」は、様々な意匠・要素が融合されたものではあっても、まとまった一つの宗教的なシンボルであり、その限りにおいては、それを受容・維持した勢力（部族）には、何らかの精神的な紐帯（現実的にはメリット？）が共有されているからである？！

すなわち、「前方後円墳」には、海部氏あるいは「和珥族」（「多氏」はその一派？）の「前方後方墳」の要素があり（むしろ中核？）、それと「円墳」（勢力）が合体・合流していったことは、ある意味明らかなのであるが、それが、どこで、どのように始まり、そしてその後、どのようにして、海部氏（「多氏」も？）が、その中心から遠ざけられていったのか?!そのことが、分かるということである?!

なお、「前方後円墳（勢力）」の影響力（の源泉？）は、いわゆる「物部氏」の勢威（血統？）によるものとされているが？、およそ 400 年間に亘る勢威のシンボルの共有は、単なる利益・利害得失の為せる業ではなかったであろう?!やはりそこには、何らかの同族意識あるいは秩序意識が共有されていたのではないか?!それが、まさに「倭（人）」という意識・秩序であった?!

とは言え、最後の問題は、記紀に記される、「崇神」「応神（神功皇后）」、そして「継体」「欽明」に託された「倭国→日本国」の実相に、そのことがどのように組み込まれているのか？

何度も言うように、その部分が、一番隠蔽（捏造？）されているということであるが、何故、そうしなければならなかったのか？そこを、改めて追究していけば、単なる所在地論争、あるいは近畿大和一元史観では絶対に解けない、我が国の「古代史」の実相が、さらに明らかとなっていくものと思われる?!